
仁義なき妹【改訂版】

ゲレゲレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仁義なき妹【改訂版】

【Nコード】

N9403W

【作者名】

ゲレゲレ

【あらすじ】

無茶も通里も、私の愛の前では“ただの言葉”

兄以外の異性は眼中に無い……むしろ世界の汚物とも考えている桐嶋家の愚昧……桐嶋美夏、高校一年生。

この物語は、そんな困った思想の持ち主である人物にスポットを当てた。学園ラブ？ コメディー？ である。

この小説は『ブラコンとツンデレと』からタイトルを『仁義なき

妹』に変えたものの改訂版です。

おおよその登場人物には、あまり変化はありませんが。彼らが身を置いている環境がガラリと変わっています。

なので改訂前よりも大分話しが変わってしまうと思います。

改訂前より読んで頂いている数少ない方々には不快な思いをさせてしまう可能性もありますが、どうぞご了承下さい、お願いします。

設定（まだネタバレ無し）（前書き）

読んで頂く前に、大まかな設定です。

まだネタバレとかは御座いませんで、安心してください。

設定（まだネタバレ無し）

・学園都市

第一区から第十三区までである、小・中・高・大と様々な学校・学園が存在している一つの都市。

基本的に、そこに住んでいる住民は特に学生だけだとか、学校の関係者だけという訳ではなく。外食の店舗を構えている者だったり会社に勤めている者だったり、そこら辺の街と変わりの無い一般人もいる。

しかし、学園都市と呼ばれるだけあって、学生や学校関係者の数が圧倒的に多いのも事実。

所によつては、大学生などが研究などのために開いている店もあるくらい。

また、この学園都市の区分けには特徴……というより、俗称の様なものがある。

第一区から第三区までを“才能の区画”と称し。

第四区から第五区までを“品格の区画”と称し。

第六区から第十区までを“勤勉の区画”と称し。

残り第十一区から第十三区までを“未知の区画”と称している。

“才能の区画”はスポーツや芸術、または勉学でも一芸に秀でたものだけが入れる区画と呼ばれ、その中にはプロの世界で活躍する者だったりだとか、芸能の世界、遥か海の向こうの海外でも活躍出来る者だったり、非常に多種多様な才能たちが溢れかえっている事から、そう呼ばれている。

“品格の区画”とは、基本的にお嬢様だとかお坊ちゃまだとか、はたまた御曹司といった上流階級の親を持つ者達が集まる区画で。学校のカリキュラムでは通常の基礎知識だけではなくマナー講座だったり、彼らの将来にとっては必要な学問などが組み込まれている。

また、この区画には共学の学校または学園は一つも無く。その全てが男子校だったり女子高だったりといった、男女を分ける形をとられている。これは、将来の結婚相手を選ぶ際に、他の家の娘・息子に手を出してしまい、余計なトラブルが起こってしまう事を防ぐためにあるとかなないとか……真意は謎に包まれている。

“勤勉の区画”とは、その名の通り、才能だとかではなく、努力で学園都市内の学校・学園に入学できた者達を集めた区画だ。そのため、学力だけなら“才能の区画”と時たま互角を張る時があり。なかなか侮り難い者達がいる場所。

そして最後に“未知の区画”とは、まさに未知。つまり、住んでいる者たちが理解していない、または手を及ぼしてはいない地区であり。その区画内には、問題を起こし他の区画から追放された学生だったりだとかが集まるアンダーグラウンド的な場所があるだとか学園都市が秘密裏に行なっている研究を隠す為の場所だとか、もはや都市伝説の様な扱いを受けている場所。ちなみに、住民自体は普通に住んでいる。

また、それぞれの区画には留学生もかなりの数が在籍している。

・執行部

区画内で定められた規定の人数で構成された組織で。

基本、学校・学園内、区画内で起きた荒事を処理するために存在していると言われている。

また、構成されたメンバーは、その学校・学園の生徒会にしか知らされておらず、一般生徒はその存在すら認知していないのではないのかと言われている。

だが実は、中には執行部の存在を知っている一般生徒も存在しているらしい。

なんとも曖昧な組織だ。

・『JUDGE』

国内外問わず、格闘技団体史上最も最強を決めるに相応しい舞台を用意できる団体と言われている、格闘技のメジャー団体。

その団体に所属している選手達は、基本的に前に所属していた団体でトップ、または優秀な実績を収めた者でないといけないとされており。非常にレベルが世界規模で高い面子が集められている。

桐嶋竜蔵も、高校入学から少し経った16歳の頃にフルコンタクト空手で世界を最年少という記録で制覇し、この団体に所属している。

また、この団体には“階級という概念は存在しておらず”。その全ての試合が無差別級といった常識では考えられない制度を採用している。

基本ルールはMMA……しかし、肘や裏拳などといった制限は一切ない、真の“vale tudo【何でもあり】”の世界。

しかし、選手間の交渉次第では、様々なルールが適応される場合もあり、時にキック、時に肘などを抜きにした総合だったり、様々な種類のルールを^{ヘキサゴン}適応する事が出来る。

基本リングは六角形の金網で囲まれた物……しかし、これもルールの適応によっては普通のロープを張られた四角いリングになることもある。

リングの制度は、つい最近に作られたものであり、それまでは見やすいという事で四角いロープのリングのみであった。

竜蔵の父親、桐嶋虎刃喜は、この『JUDGE』の試合中に亡くなっている。

『JUDGE』という団体名は、『全世界で最強の男を、平等の試合で裁き決める』という考えの下、創設者によって名づけられた。

入学式（前書き）

第一章です。

入学式

眩いばかりのライトが、一つの白いキャンバスを照らす中。

二人の異なる国籍を持った男達が、文字通り血で血を洗う殴り合いを繰り広げていた……。

赤と青のコーナーストや、白いインターバルゾーンのポストなど、リング内だけを見ればどこにでもありそうな光景。

しかし、このリングのキャンバスに立っている二人の男達が。その手に着けているオープンフィンガーグローブの拳面を相手の顔面に衝突させ合う度に、周りを囲む万を超える人々の歓声は地鳴りにする程に二人の男達の全身を包み込んでいた。

その万の人員を動員出来るほどの会場は、既に中央で戦う二人以外に興味を示していないかのように、白いライトの照明をそこにしか集中させていない。

男の一人……東洋系の肌や顔立ちをした、一切の脂肪が無いほどに絞り上げられた完璧なまでの肉体を持つ男が、相手の白人男性の右頬を、文字通り左の拳で刈り取る様に打ち抜く。

もはやその拳は、ショートフックなどという名詞の枠では現せないぐらいのキレを誇っており、まるで鎌で相手の顎を削ぎ落としたのではないかという錯覚まで周囲に与えていた程だ。

左の拳を右頬に受けた白人男性の頑丈そうな顎が、殴られた軌道側へと弾き飛ばされるかの様に揺らいた。

しかし、白人男性は殴られた勢いそのままに沈みそうになっていた巨軀な肉体を、前足として置いていた左足を横に差出し、キャンバスに踏ん張ることで、その場に留めた。

だが東洋系の男の猛攻は止まない……。

崩れ落ちそうだった体を残した白人男性の奥足……つまりは右足の内腿に、右足によるインローキックを打ち込んだ。

バチイイイイン！！！！

と、地鳴りが響く程に大きな

歓声の中でもハッキリと聞こえる、白人男性の右内腿が、東洋系の男の右脛に蹴り抜かれた音。

その音は正に破裂音といっても過言ではなく、例外なく、白人男性の右足を蹴った方向に刈り取った。

右頬への左フックをかるうじて耐えた後の、右内腿へのインローで完全にバランスを崩してしまう白人男性……体格差は195?125?に185?の100?と、明らかに勝っている筈なのに、これほどまでに良い様にされてしまう事に白人男性の表情には、ダメージだけのものではない何かが浮き彫りになっていた。

無理やり足幅を^{スタンス}広げられる格好となった白人男性の大きな顔に、再び東洋系の男の拳
今度は利き腕の右
が飛び込んでくる。

真つ直ぐに……真正面に……真正直に、突き出されるその拳は。右のインローを引いたと同時に打ち込まれたために、腰の回転にツイスト気味の力がかかり、東洋系の男の柔軟な肩甲骨の使い方も相まって。普通のコンビネーションの決めに使われる右ストレートの威力や迫力となんら差異は感じられなかった。

当たる！！
東洋系の男は、この両者の顔面が血で染まるほどの殴り合いの終結を、そこに見た。

しかし、その刹那……。

グシャッ！！

「親父イイイイ！！！！」

鈍い……なんてものではない。

まるで、高速で飛んできた鉄球に顔面を潰された様な、短くも衝撃的な音が、両者の顔面を襲った。

同時に、東洋系の男の耳に、聞き慣れ過ぎた子供の悲鳴も飛び込んできた……。

相打ち……それも、相手が苦し紛れに打った右拳と自身の右拳が、同時に両者の顔面を捉えるほどのドンピシャなタイミング。

二人の鍛え上げられた首が、背中が、足が、ゆっくりと後ろへと倒れ込もうとする……。

打ち込まれた拳から離れた顔面からは、ネチャリと赤色で染まった粘液が共に糸を引きながら、生々しく離れていくのが見えた。

そして倒れ行く東洋系の男が、青コーナーからこちらを泣きながら見ている子供を、精根尽き果て朦朧とする意識の中で一瞬だけ捉えることが出来た。

本当に……本当に情けないぐらいに涙で顔をグチャグチャにした、小さな男の子だった。

（ごめんな……竜蔵……）

東洋系の男は、暗闇に包まれつつあった思考の中で、最後にそう囁いた後。

力なく、リングの上でこちらを照らし続けていたライトを仰ぎながら意識を沈めるのであった。

その男の筋骨隆々の肉体に纏った道着の黒帯には、金色の刺繍で桐嶋虎刃喜きつしま こねと書かれていた……。

桜色の季節とは、まさにこの事……。

三月の別れから、大して時も経たずに訪れる新たな出会いの季節。そう、現在は四月の入学シーズン真っ只中の季節だった

「美夏みなつさん！ もう皆多目的ホールに入っちゃってるよー！！」

晴天の空！ 正面に見据える桜色満載の並木道や、赤い煉瓦が敷き詰められたお洒落な地面が、視覚的にも新しい心境の訪れを感じさせる今日この頃。

そんな中、一人の少女の後ろから、少し焦り気味の声が聞こえてきた……。

「？」

その声をかけられた少女は、無言で後ろを振り向く。

少女の腰まで伸びた黒真珠の様に日光を反射させているロングストレートの髪が、春風によって桜の花びらと共に舞う。

「……」

この光景に、少女に声をかけた同学年の女生徒が思わず見惚れてしまう……。

先の艶やかな髪もさることながら、美しくも女子高生という若さ特有の可愛さを持つ瞳や、細く整った小顔の輪郭。まだ15歳という年齢ながら、165cmという身長に出るとこは出ているモデルのような体型のラインが、有無を言わさぬ優美さを誇っていたからだ。こちらを呼んだにも関わらず、突然口をポカンと開けて黙りこくってしまった同学年の女生徒に、美夏と呼ばれた少女は首を傾げる。

「どうしたの？ 急に黙り込んで……」

「……え、あ、うん！ そろそろ入学式が始まるって、伝えに来ただけ……」

自身が思わず見惚れてしまった少女に声をかけられ、ようやく意識を覚醒させた同学年の女生徒が。ここに来た理由を思い出したかのように伝える。

「そう……」

同学年の女生徒の言葉に、そう言って短く答える美夏と呼ばれた少女……。

この様子に、同学年の女生徒が心配そうな表情になる。

「もう緊張の方は大丈夫なの？ 私はやらないから結局他人事になっちゃうけど、やっぱり新入生代表の挨拶って、そんなに緊張するものなの？」

同学年の女生徒からかけられた言葉に、美夏は軽く微笑んで見せてから。

「うん……昨日までは楽しみって感じだったけど。今はそれなりに緊張してるかな」

「それなりにつて。緊張を解すために外に出るほどなんだから、相当の間違いなんじゃない？」

「ふふふ、そうかもしれないね？」

おそらく、こちらの緊張を和らげようと頑張ってくれているのだろう。この言葉のチョイスは、いささか逆効果なんじゃないかと感じる美夏であった……まあ、口には出さないが。

「でもまあ、どうせやる事になるんだし、なるようになれって思った方が気になるよ？ 人間はリラックスが大事って言うしね」
しかし、相手方はこれでこちらの緊張が解れていると感じているのか。

言ってやったという表情を浮かべながら、こちらに満面の笑みを浮かべてくる。

この瞬間、美夏の胸中では“この娘は対象外ね、まずいきなり下の名前で呼んできた時点で対象外だけど”と謎の評価が下されていた……。

「アドバイスありがとうね。そうする事にするよ」

「うん！ 頑張つてとしか私は言えないけど、ちゃんと後ろで応援してるからね！」

「ええ、でも、もう少しだけ外で落ち着きたいの。だから、先に行つてて」

「分かった！ なら、遅れないでね？ あと2・3分ぐらいで始まるらしいから」

そう言つて、同学年の女生徒は、多目的ホールや図書館が一体となった、地下一階地上四階の建物へと姿を消していく。

女生徒が去るのを、これまでの微笑みとは打って変わって特に興味なさげな視線で見送った美夏は。

再び、先程まで眺め続けていた桜並木の向こうに視線を戻した。
相も変わらず、綺麗な桜の花びらが、一枚一枚自己主張をしながら

ら散っていく……非常に綺麗で風流な光景だ。だが、そんなものは美夏は興味を示そうとはしない……ただただ、並木道の向こう側を見つめ続ける。

（やっぱり、お兄ちゃんはや来ないのかな……）

胸中での寂しそうな呟きは、春の暖かな風にも乗らずに、美夏の中だけで響き渡るだけだった。

そして、そろそろ入学式の時間が迫ってきていたのに気付いた美夏は。少々後ろ髪が引かれる思いをしながらも、後ろに佇んでいた大きな建物へと踵を返した。

入学式……それも高校生でのと来れば、誰しもが新たな何かに淡い期待を抱くであろう。

そして、そんな淡い期待を、入学式会場である多目的ホールへと入ってきた瞬間に、他方から浴びた人物がいた。

しかし、様々な視線を全身に感じながらも、その人物は一切の興味や物怖じすら見せずに、悠然とした足取りで多目的ホールの最前列へと歩を進めていった。

ここ多目的ホールは“第一区”新入生総勢3200人の内、新入生の500人は軽く収容できるほどの大きさを誇っている。

まあ確かに新入生の来賓やら父母の方々やらを合わせたら、この多目的ホールでも席がギリギリといった状態になってしまうが。高校にしてこれ程の人員を収容できる多目的ホールがある事自体珍しい事で……更には、このような空間が、この地下にはあと二つあるというのだから驚きだ。

そんな中を、この多目的ホールにいる人々から視線を集めながら最前列へと躍り出た人物が、ようやく席に着いた。

席は、最前列一番右側だ。

瞬間、多目的ホールに灯っていたライトの明かりが一斉に消え、

今度は目の前の壇上へと再び灯ったライトの明かりが注がれた。

この間、気持ちが入学式という事で高揚していた者達の中から驚きの声が上がっていたが、先ほど入ってきた人物は、至って平静のまま次なる出来事を待った。

『これより、今年度の二橋学園高等部ふたつばしの入学式を開式いたします』

いつの間に現れたのか　多目的ホールの殆どのライトが集

中した壇上の中で、一人の上級生であろう女生徒がマイクに向けて宣言すると共に、会場中の喋り声が一斉に鳴り止んだ。

その様子を確認したあと、壇上の女生徒が照明に向けて、手によるジェスチャーで鬱陶しそうに『ライトを向けるな』と指示を出す。途端に壇上に向けられていたライトが、壇上の上にある照明だけとなった。

そして再び、マイクへと口を開く。

『国歌斉唱。皆さんご起立のうえ、壇上の国旗に注目してください』すると、会場中の全ての人間がバタバタと中々に座り心地の良かったシートから起立していく。

会場中の起立が済むと同時に、国家が多目的ホールに設置されているスピーカー越しに流れ始めた。

いよいよ、二橋学園高等部入学式の始まりだ……。

入学式など、皆のウキウキ具合に比べ、何事もなく終わる様な退屈な一面も備えている。

そして、それはこの二橋学園高等部も例外ではない。

既に入学式も校長やらなんやらの有り難い訓示も終わり佳境に入っている。

だが未だに皆、入学初日から可笑しな目立ち方をしたくないがた

めに、座り心地の良いシートに背を預けながらも話しに耳を傾け続けている……。

そうこうしていると、先の女生徒、美夏の出番が回ってきた。

『新入生の挨拶。新入生代表、きりしま みなつ 桐嶋美夏さん。壇上へお上がりください』

この言葉を耳に入れた瞬間、壇下最前列の一番右側に座っていた美夏がハッキリとした透き通る声で「はい！」と返事をした後、シートからスッと立ち上がった。

そして、腰まで伸びたロングストレートの黒髪を靡かせながら、優美な曲線を描いたスラリと長い足を歩かせ、壇上へと上がって行く。

この間、新入生の男子生徒や後ろの方に座っている父母……特に男の方から、異様な視線と感慨の聲が漏れ出ていたのを、美夏はスルーする。

弧を描いた壇上へと足をつけると、目の前には丁度、美夏の身長に合わされたスタンドマイクが設置されていた。

その前で、女性でありながら堂々と気を付けの姿勢を取る美夏……心なしか、それだけの事で彼女の垢抜けた気品が感じられた気がした。

しかし、彼女にはこの様なことに対して何の感慨も生まれてこない。

むしろ、早く終わらそうという気持ち彼女のの中では勝っていたぐらいだ……もちろん緊張などではなく、本気でどうでも良いと考えている様であった。

だが表情には一切表れない。

この多目的ホールに入ってから依然として、確りとしたなかにも余裕が感じられる表情のままだ。

これを対面で見て、壇上に立っていた二橋学園生徒会長、ふたつばしひ 二橋姫樹めきの微笑ましそうに閉じていた瞼が、少しだけ興味深げに開いたのを、美夏は気付いていた。

しかし、それでも全く動じなかった美夏は、優等生らしく、桐嶋という名字に恥じぬよう、悠々と新入生代表挨拶をこなしたのであった。

入学式も問題なく終わり、現在は多目的ホールからクラス別に退場している。

そして美夏も例に漏れず、多目的ホールの両開きのドアから退場し、約1時間半ぶりに外の空気を体内に入れることが出来た。

本当に退屈だった……家族である母も妹も、そして何より兄も来てくれない入学式に、何の意味があるのか？

そんな事を考えながら、長い桜並木の道を歩いている時であった。突然、後ろから右肩をツンツンと突つかれた……。

これに自然に反応した美夏は、何かなと言った風に後ろを振り返る。

そこには、165?と、同年代の女子にしては発育良好な美夏よりも、10cm以上は高い女生徒が人懐っこい笑みを漏らしながら立っていた。

「新入生代表の桐嶋さんだね。あたしは同じクラスの木下藍きのしたあゐって言うんだけど、一緒に教室まで行かない？」

フランクな物言いもそうだが、美夏に話し掛けてきた木下藍という女生徒は。

長身にも関わらず均整の取れた体型がスマートな印象を持たせ、高い腰の位置や、コバルトブルーの瞳、少し赤茶がかった活発なシヨートヘアなどが、どこか日本人離れした雰囲気醸し出していた。

「うん、いいよ」

美夏の返事に「そう、じゃあ行こうか」と言って隣に並ぶ木下藍。

そうすると、よけいに美夏との身長差が際立って見える。

「木下さんって、何か部活とかやってるの？」

やはり、いくらこれまで興味が沸く事が少なかった美夏でも、こればかりは気になったのか、思わず質問を投げかけてしまう。

「あたしは女バスだよ。まあ、この成りを見れば、なんとなく想像が着いたでしょ？」

「ええ、まあ」

「そういう桐嶋さんは、何かやってるの？ 見たところ凄いプロポーションだから、体とか鍛えてるんでしょ。特に足とか見ると、結構やつてる感じがするよ」

少しだけ俗っぽい視線を美夏に向けつつも、意外に観察力の鋭い木下。

これに美夏は、密かに抱いていた彼女の第一印象である“大雑把そうな女”という評価をちよつとだけ改善させた。

「私は中学まで新体操をやってたけど、高校では続けないかな」

「へへ新体操ね………続けてれば、男子達が煩いからって理由で？」

ニヤニヤと美夏の豊かな美乳を眺めつつ尋ねてくる木下に。

「そうじゃないってば。ただ続けられる自信が無いって言うか、暇が無いって言うか………そんな感じかな」

「ふーん、もつたいない………桐嶋さんのレオタード姿とか、絶対に男子達が面白そうな反応すると思ったのに」

「まあ、確かに面白い反応はしてたけどね（思い出したくも無いくらいにね。ホント、お兄ちゃん以外の男子って“糞”ね）」

うん？ ちよつと待ってくれ………。

これまで、確かに桐嶋美夏という女生徒は、節々で影のある感じを醸し出していたが。

今の副音声は一体………？

非常に問いただしい所ではあるが、ここで美夏にとって、最も出会いたい……いや、死ぬまで添い遂げたい人物が。いつの間にかに来ていた桜並木の終わり、二橋学園“入り口”の校門前に現れた。

周囲にはまだ、美夏達の他にも新入生達の姿がゾロゾロとしていたが、その匂い、その存在感により、美夏は神業とも言える探知能力で、件の人物がいる方向へと“バ”っと振り向いた。

「うん？ どうしたのいきなり？」

突然の美夏の動きに、木下が不思議そうな表情をするも、もはや本人には眼中に無い。

視線の先には、一人の体格のいい……いや、もはや芸術とも呼べる肉体を誇った男性が、本学園の男子の制服を身に纏いながら誰かを探している光景が映っていて。

その表情には、一向に見つかる気配が無いのか焦燥感すら漂わせていた。

「桐嶋さーん、俺同じクラスの佐々木ってんだけど」

「ねえ、桐嶋さんだね？ 俺、君と中学で一緒だった……」

不意に、視線を固定してしまった美夏の後ろから、同じクラスの男子生徒達が声をかけてきた。

おそらく、彼女の容姿に惹かれた者達であろう……。

しかし、美夏は一切の反応を示さない。

ただただ、校門前で誰かを探し回る男を見つめているだけ……。

「桐嶋さん？」

当然、美夏の隣にいた木下は、新しく出来た知り合いを気遣うように、上から顔を覗き込む。

そこで、動きがあった。

「え？ ちよっ……」

木下が言い終わる前に、なんと美夏が前方へと飛び出したではないか。

柔らかい物腰や華奢な容姿からは考えられない、流れるように動く柔軟な走り、美夏はあつという間に木下や後ろにいた男子達を置き去りにしてしまった……。

そのスピードは、本当に高一女子とは思えない素晴らしいもので、腰まで伸びた黒髪を颯爽と風になびかせながら、一気に目的の人物

までの距離を縮め……そして。

「うん？」

件の人物の厚い胸板に、思いつきりダイブもといタツクルをかました。

ドン！！
という中々に良い音を鳴らした美夏のタツクルであつたが、男は何の問題も無く、飛び込んできた美夏を抱き止める形で包み込んでいた。

ガバツと、美夏が男の胸に埋めていた顔を上げる。

するとそこには、高校男児らしい若さと男らしい強さを持つ顔つきをした自慢の兄の姿があつた。

頑丈そうながらも、それなりに整った輪郭や、眼力のあるハツキリとした瞳。逆立てた黒髪の短髪は、高校生らしくワックスでセツトされ。美夏が抱きついている肉体は、胸囲と腹回りが反比例した理想的な逆三角形をしている……また、彼の鍛え上げられた太い首筋を見れば、中も相当な筋が浮き彫りになっているのだらうと想像が出来る。

そんなガチムチな兄貴が、受け止めた美夏を見る。

「おお、やっと見つけた……ごめんな？ 入学式に間に合わなくて」「そんな事ないよ！ こうして来てくれただけでも、私は嬉しいんだから……」

抱きつきながら見上げる瞳を潤ませながら、本当に嬉しそうに聞こえる美夏の声。

それを見て、美夏を抱きとめた格好となつている兄貴の表情が“悪いことしたな”と言外で語る様に眉を八の字にしていた。

しかし、ここにはまだ他にも新入生の面子が大勢いるのだ。

当然だ、なぜならここは学園都市第一区にある“二橋学園”の校門前なのだ。入学式を終えた生徒は、それぞれ教師との顔合わせのために自身の教室へと向かわねばならない。

そして、そんな場所で抱き合う二人……当然、二人の関係を兄妹と知らない周りからの注目を集めるわけで。

「え、嘘……桐嶋さんって彼氏持ち？」

「うわ、大胆……」

「マジかよ、あんあむさ苦しい奴に何で……」

ヒソヒソと聞こえてくる戸惑いの声。

そして、先程まで一緒に歩いてきた木下の後ろからは、声をかけようとしていた男子達が落胆の表情を浮かべている……が、ここでも何かなんだか分かっていなかった木下が、ある事に気付いたようだ。（あれ……あの男の人、どこかで見た事があるような）

頭の片隅に、様々な記憶を巡らせる木下。

もともと考えるということとは得意ではないのだが、こればかりはどうにも考えずにはいられなかった。

「うん？　もしかして、あの人って格闘家の……」

すると、どこからともなく木下の耳に、そんな声が静かに届いた。瞬間、木下の活発な眼が“カツ”と見開かれる。

「思い出した！　あの人、『JUDGE』に出てる人だ！」

この木下の言葉と共に、周りから「ああ！　そういえば！」だとか「学園パンフレットに載ってた人か」だとか様々な声が聞こえてきた。

「え？　ああ、そうか。そういえば、うちの学園にいるって書いてあったな」

「確か名前って、“桐嶋竜蔵”きりしまゆうぞうだったっけ？」

「馬鹿、今は先輩を付けろよ」

桜が舞う学園校門前で、方々から向けられる“有名人を見た”というミィハーな高校生の視線に、美夏の兄、桐嶋竜蔵は気付いたのか……。

「うん？　そういえば、まだ全部終わってなかったっけか」

目と目を合わせていた美夏から視線を外し、周囲を見回した後、そんな事を気付いたように呟いた。

同時に、現在兄妹で抱き合っている姿にようやく気付いたのか、抱きとめていた美夏の体をスツと放した……が。

「おい、ちょっと周りが見てるから……」

なぜか、こちらをニコニコと見つめたまま、美夏が離れようとしてくれない。

むしろ、ますますその發育良好な胸を押し当ててきたぐらいだ。

「ダメ これは入学式に来てくれくれなかった罰なんだから」

「いや、それは悪かったって……だけど、今は離れてくれないか？ お前もまだやる事が残ってるんだろ？」

「嫌」

甘えた声で、竜蔵の厚い鉄板の様な胸板に頬擦りをする。

困った……周りの視線が、何やら嫉妬やら何やらが混ざった痛い者を見る感じになってきてる。

これは早く何とかしないと。

そう考えた竜蔵は、ここである提案を持ち出す。

「なら、今日の夜に入学祝として何かプレゼントするから、それで許してくれないか？」

「そういうのは本人には黙ってるものなんだよ？」

もっともな指摘を受けて、竜蔵はますます困った顔をする……。

拙い、本当に拙い……。

このままだと俺は、極度のシスコン野郎って勘違いされてしまう。周りの新人生は、まだこの二人が兄妹とは気付いていない様であったが。そろそろ名字が同じだとかで気付く者が出てきても可笑しくは無い。

そして気付かれた上で、こんな事をいつまでもしていると、確実にこれから後輩となる連中に示しがなくなる。

故に竜蔵は、その懸垂で出来た^{たこ}尻や格闘家として作り上げてきた拳尻が目立つゴツゴツとした両手で、美夏の細い両肩をガシッと掴むと。

「あっ！」

「はい、そろそろ本気で離れるよ？」

その岩石の様な筋張った太い両腕を駆使して、懷に抱きついてい

た美夏を無理やり剥がした。

むくくと両頬を膨らませながら、不服そうにこちらを見る美夏。

しかし、入学式に参加できなかった事を悪いとは思いつつも、公私を弁えなければならぬと考えた竜蔵は。

「必ずこの埋め合わせはするから、今は言うことを聞いてくれ」

「むく……必ずだよ？ 絶対だよ？」

身長差は竜蔵170？なので、男女にしては5？しか差は無いが、先ほどの美夏の仕草で、どうにも彼女が子供っぽく見えてしまふ。

これに、新入生代表の挨拶を見ていた周りの男子達は、いわゆるギャップ萌えという奴で既に陥落寸前の状態であった。

しかし、何度も言うが、周りはまだ二人の関係には気付いていない……。

故に、最初から彼女に目をつけていた男子達からは嫉妬という負の感情が漏れ出るというより噴出していった。

だが、ここでもようやく、何やら気付いたものがあるようで。

「あれ、そういえば先輩の名字って、桐嶋さんと同じ……」

そう呟いたのは、先ほど竜蔵を『JUDGE』に出てる人と見抜いた木下藍だ。

そういえば『JUDGE』とは、ここ日本国内だけではなく、既に世界にも認められたメイドイン・ジャパンの格闘技団体で、各方面の団体から本当の実績を挙げたものしか出場出来ない狭き門の団体なのだが……今は割合しておく。

木下の呟きに、周りの新入生達も何かに気付いたのか。

「確かに、同じ名字だ……」

「え？ じゃあもしかして……」

「マジで？ でも、二人って言っちゃ悪いけど似て無くない？」

この周りのざわめきに、美夏と綺麗な耳がピクリと動く……。

同時に、向けていた体の正面を、今度はざわつく同級生達へと振り向かせた。

「急に騒いでゴメンね？　今から紹介するけど、この人が私の“お兄ちゃん”で……」

視線を同級生達に向けたまま、後ろにいた竜蔵のブレザーの袖をクイクイと引っ張り。

「うん？　ああ、桐嶋竜蔵って言います。知ってる人もいるかもしれないけど、一応空手やってます。部活はラグビー部です」

美夏のサインに気がついた竜蔵が、先輩らしい軽い口調で自己紹介をする。

すると、周囲から驚きと予想外だったという声が上がった。

「え！　うそマジ！？」なんて反応は当たり前で、もはや桜並木の終着点でもある二橋学園校門前では一種の騒ぎが起こり始めていた。

現役高校生格闘家の妹……ましてや、その現役高校生は、世界を相手に戦っているという説得力を持った風貌をしていて。

既に気の弱い男子達は、目をつけていた美夏から手を引こうかと考えている様であった。

だが、気の強いというより意志の強い連中には、どうやってたらあの兄をどかして美夏と接触するのかを画策している者もあり、男子間では非常に混沌とした思惑が入り混じっていた。

「皆さん、一体何の騒ぎですか？」

しかしそこに、なにやら決して大きくは無いが、不思議と誰の耳にも良く聞こえる女性の声が割り込んできた。

その声に、なぜかこれまで騒いでいた校門前にいた全員が振り向いてしまう。

それは例外が無く、美夏や竜蔵も同じことであった。

声の主である女性は、多目的ホール側の桜並木から、丁度ここに辿り着いたという所に、数人の生徒を連れながら立っていた。

「あ、会長だ」

突然現れた彼女を視界に入れた竜蔵の言葉に、美夏も「挨拶の時に会った人だ」と先の入学式での事を思い出していた。

「あら、桐嶋君に妹さんね　丁度良かったわ」

二人の反応を、まだ少し距離があるにも関わらず気付いた会長と呼ばれた人物は。

緩やかなウェーブのかかった、豊かな栗色の長髪を揺らしながら、優雅な足取りで二人に歩み寄っていく……その間、道の邪魔になっていた新入生たちは、自然とこの会長と呼ばれる人物に道を譲ってしまっていた。

そして美夏と竜蔵の前で、朗らかな笑顔を浮かべている会長が歩みを止めた。

「入学おめでとう、桐嶋美夏さん。さっき聞いたと思うけど、私は二橋姫樹ふたつばしひめき。学園都市第一区二橋学園高等学校の生徒会長を務めてます」

「ありがとうございます、二橋会長。私も改めて自己紹介をの方をさせていただきます、桐嶋美夏、後ろにいる桐嶋竜蔵とは兄妹の関係にあります」

行儀良く……というより、ただ自己紹介を礼混じりに行なっただけで、どこか涼やかな雰囲気すら醸し出す二人の所作に。周りの者達は一瞬だけ空気に吞まれる感覚を覚えた。

学園の生徒会長。

もちろん、先ほどの入学式にも出席していたために新入生には既に知られているが。

目の前で見ると、美夏に負けず劣らず……というより、胸の大きさや大人の女性といった物腰の所為で、どちらかといえば美夏にすら勝っているスタイルを誇っており。

その常に目は瞑っているが朗らかな微笑みを浮かべている表情のお陰で、周りに楽しそうな雰囲気分け与えている様であった。

この目の前に現れた魅力的な女性に、外見には出さないが美夏の警戒心が高まる……。

（なんなのこの女……底が見えないだけじゃなくて、容姿も油断なら無いじゃない。これは、リストの方に即効で追加ね）

なにやら黒い感情の籠った思惑……。

しかし、もしや気付いているのか？

目の前の姫樹はそれを片目だけ薄っすらと開けるだけで流した。
「ええ、一応名簿の方は目を通していたから知っています。しかし、それにしても兄妹揃って同じ学園とは……ちゃんと面倒を見てあげなくてはダメよ？ “お兄さん”」

悪戯な笑みを浮かべ、竜蔵を茶化す姫樹。

「やめてくださいよ。コイツは俺より出来た妹ですから、その必要も無いですよ」

「あらあら 随分と妹さんの事を信頼しているのね」

「やだ、お兄ちゃんたら……」

「お前はからかうな」

姫樹に続き、兄の事を茶化そうとした妹を咎める。

春風が吹く中で、桜の花びらが赤煉瓦調の地面に散りばめられる光景で、このまま他愛の無い会話が続けても良いが。生憎と新入生にはまだやらなくてはならない事がある。

「仲が良いのも結構ですが。そろそろ教室に向かわないと、担当の先生方が待ち草臥れてしまいますよ？」

故に姫樹が、やんわりとその事について口にする。

「あ、そつか。じゃあ美夏、また後でな？」

姫樹の言葉で随分と妹を引き止めて？ しまっていた事に気付いた竜蔵は、気軽な調子で美夏に言った。

「え……って言いたいところだけど、仕方ないよね。じゃあ、また後で、お兄ちゃん」

「ああ。それと、学校内では“お兄ちゃん”は止めてくれ。先輩に弄られるから」

気恥ずかしそうにする竜蔵に、美夏は嬉しそうな微笑を浮かべると。

「やだも〜ん。これは入学式に来てくれなかった罰です」

言いながら、「ちょー！」と反論しようとする竜蔵から逃げるよう

に、学園の校門の向こう側へと走っていく美夏。

妹が竜蔵を過ぎ去る際に、彼女の髪の毛が一瞬だけ竜蔵の確りと筋の通った鼻を擦った……春の陽気と相まって、とても甘い香りがしたのは、兄としては口に出しづらいところであろう。

「良い妹さんね。会長とても気に入っちゃったわ」

「俺には出来すぎた妹ですよ……家事も出来るし運動も勉強も完璧にこなすんですから」

妹である美夏が、制服のスカートを揺らしながら去って行った後で、竜蔵が疲れたように「ふん」と鼻で溜息をつく。

すると、姫樹の後ろにこれまでずっと控えていた連れの生徒達

おそらく生徒会のメンバーであろう　　が、周りにまだ

残っていた新入生達に早く教室へ向かうように促し始めた。

それに反応した、立ち止まっていた新入生達が慌てて校門の向こう側へと走っていく姿を見送ると。

「それで桐嶋君、折り入って会長からお願いがあるのだけれど……」

突然、姫樹が静かな声音で竜蔵に尋ねた。

何事かと、竜蔵が視線を新入生達から姫樹の方へと戻すと。

「なんですか？」

「お願いっていうより、“命令”って言った方が格好良いかしら？」

「いや、割とどうでも良いです」

「そう？」

おかしいわね〜と、右頬に右の掌を当てながら、困ったように表情を曇らせる姫樹。

「で、折りいっただお願いって何ですか？」

その竜蔵の本気でどうでも良いから、早く本題に入ってくれというニュアンスの込められた態度に。

自身もこの後、色々忙しい予定の姫樹は、とりあえず遊びを手放すことにした。

「“執行部”としてのお願いになるのだけれど、いま時間の方は大丈夫かしら？」

姫樹の柔らかそうな唇から出てきた“執行部”というワードに、竜蔵が露骨に面倒くさそうな顔をする。

その表情を見て、姫樹は「やっぱり、今はダメなの？」と残念そうにしたが。

「いえ、今さつき対戦相手との契約が終わったところなんで。特にこの後、予定って言う予定は無いんですが……俺じゃないとダメなんですか？」

「別に桐嶋君じゃないとって訳ではないのだけど……他の子たちが一切受けてくれなかったのよ」

「全員ですか？ 確か俺以外に、後何人いましたっけ？」

「うちの学園は少ないから、桐嶋君以外にあと二人しかないのよ……その二人にさつき『興味が無い』って理由で、断られちゃったから。受けてくれないかしら？」

姫樹の両手を合わせて“お願い”というポーズに、竜蔵の胸が撃ち抜かれそうになるも。それはその鋼鉄の大胸筋が弾丸を防いでくれたお陰で、難を逃れた。

理性を失う一歩手前……非常に危なかった。

しかし、防いだとしても他に人員がいらないと言う事では受けざる負えないのが残り物の宿命。

故に竜蔵は、まだ見たことも無い他の面子に“俺はただの手伝いなんだぞ”という意味を込めながら。思いつきり仕方ないといったふう「はあ」と溜息を吐いた。

「分かりました、どっちにしる暇だった訳ですし。アイツの入学祝のプレゼントを選ぶついで行って来ますよ」

瞬間、姫樹のもとと朗らかな微笑みを浮かべていた顔が、更に嬉しそうに花が開いた。

「本当に！ なら、お言葉に甘えてお願いしちゃうわね」

「ええ、どうぞ」

「場所は多目的ホールで、対象はやんちゃ盛んな新入生一名よ」それを聴いた瞬間、竜蔵は眉を少しだけ意外そうに吊り上げた。

「へー入学式早々に問題起こす奴が出たんですか。でも、それにし
ては落ち着いてコツチまで歩いてきてましたよね？ 会場で暴れて
る奴がいるって言うのに」

「やんちゃ盛りな新入生が対象ということで、おそらくそういった
事だろうなと当たりを付けた竜蔵の読みは、どうやら正解だったよ
うで。」

「うん、暴れていた子が私の親の友人の息子って話らしくて、先生
方も手が着けられない状態だったし。私なんかじゃ血気盛んな男の
子を取り押さえるなんて事出来ないから。潔く他の人を探してたっ
てわけ」

「潔くって……後ろにいる人たちじゃ無理だったんですか？ 男も
何人かいるみたいじゃないですか」

「そう言って、竜蔵は姫樹の後ろに控えていた数名の生徒会メンバ
ーを覗き見る。」

すると、竜蔵に視線を向けられた生徒会メンバー達は、なにやら
三つ編み眼鏡娘以外の全員が視線を反らし始めた。

「竜蔵は心の中で初めて意気地なしという言葉を彼らに向ける事に
した。」

「うちの生徒会って、皆荒事には向かないタイプだから、仕方ない
のよね」

「いや、少しは努力をしましょうよ……」

「うん だから我が学園でも数少ない“執行部”の子を探してた
のよ」

「俺、確か一応“手伝い”だけっていう話でしたよね？ それが
なんで……」

「“累積”よ、る・い・せ・き 本来なら、アナタは既に停学と
かいっレベルの範疇を超えて、退学になったって不思議じゃないく
らいに問題を起こしているのだから、当然でしょ？」

「意地悪に微笑み、竜蔵に理由を容赦なく突きつける姫樹の姿は。
やはり上に立つもので、弱みなどいくらでも利用してやるという心

意気が伺えるものであった。

「それに、そんなアナタを聖母の如く拾ってあげた恩人に、恩を倍にして返すなんて当たり前の事なのよ？ 返すチャンスを与えているのだから、むしろ感謝して欲しいぐらいね」

このとき竜蔵は、目の前の人物とはそろそろ一年来付き合い合いに突入しそうではあったが。改めて彼女の微笑みの裏に隠れている黒い部分を垣間見た気がしたのであった。

流石に、自分の犯してきた過ちを引き合いというより盾に出されてしまつては。潔く逃げてきたという彼女達を責める訳には行かない。

ここは大人しく、無難に従った方が嫌な所を突付かれなくて済むと考えた竜蔵は、再び仕方ないというニュアンスを込めた溜息を盛大に吐き出しながら。

「分かりました、感謝しますよ……とりあえず、多目的ホールに行けば良いんですね？」

「ええ、きっと彼もそこに居座り続けていると思うから」

その姫樹の意味深な言葉に、竜蔵は「え、どうしてですか？」と思わず尋ねてしまった。

姫樹はそれに、楽しそうな微笑を浮かべ。

「だって、“桐嶋竜蔵を出せ”とか言ってたんですもの、きっとまだいると思うわ」

再三に渡つての溜息が、また盛大に竜蔵の口から吐き出された。

「それって結局、俺が行かなきゃダメだったって事じゃないですか

……」

「え？ どうして？ 他の子を使って、後ろからズドンってやれば

……」

「高校の生徒会長が言うことじゃないでしょうに、それは」

心底この人は腹黒いのだなと、竜蔵はまた改めて心に刻むのであった。

そして、もうこの人と話すのは本当に疲れると判断した竜蔵は。

そのまま歩を入学式を行なっていた多目的ホールへと、勝手に進め始める。

「あゝじゃあ、俺もう行きますから。後で美夏に会ったら、先に帰っててくれって伝えといてももらえませんか？」

「ええ、確りと伝えておくわ」

「頼みましたよ」

そう言つて、竜蔵は生徒会のメンバー達とすれ違いながら、本当に面倒くさそうな足取りで桜並木の道を歩き始めた……そりゃもう、後頭部を左手でボリボリと搔いているぐらいにだ。

新しい環境、新しい友人

入学式後のクラスごとに始まる、最初の先生との顔合わせ。

二橋学園では通常とは違って、入学式で担当する教員を発表するのではなく、この入学式後のクラスごとの集まりの時に初めて行なわれるのだ。

ちなみに、特に理由は無い。

学園のクラスは基本、大学の様な段状になっていて、教卓からクラス全体が見渡せる様な構造になっている。

生徒はこのクラスの三人掛けの机を二人で使う事になっており、やはり新学期は窓際一番前の列から名前順に生徒達が並べられる。

そしてここは一年A組、桐嶋美夏きりしま みなつが在籍しているクラスで。美夏は運良く窓際最後列の一つ手前の席に座ることが出来ていた。

しかし、現在は肩に掛けるタイプの学生鞆の中身は空っぽのため、非常に手持ち無沙汰な気持ちに晒されていて。

また既に隣の男子との会話も無難に“退けた”後のために、余計な手持ち無沙汰感を味わっている最中なのであった。

左手で頬杖を付きながら、窓際の特権である外の様子を伺い見る……。

ここは校舎四階のため、窓の外の見晴らしは最高に良く。学園敷地内にある桜も、その外にある桜並木の風景もまとめて一望できた。学園の校舎の近くには、他にもパンフレットにも載っていた三面ガラス張りのデザインと屋上のテラスが売りの四階建て食堂棟や、地下には近代的なトレーニングルームもあるやたらデカイ体育館にサッカーグラウンドとラグビーグラウンドが一面ずつ人工芝の上に白線で描かれたナイターも可能なグラウンドなど、普通の学校の施設とは一線を画した施設が点々としていた。

この学園は敷地は、どれだけ広いのだと疑問を投げかけたいぐら

いに充実した施設の数々。

またこの他にも、各部活動が部室として使用している部室棟や、校内合宿用に建てられた合宿棟なるものまであるから驚きだ……更に言えば、この校舎自体デカイ。

これほどの施設……確かにこれなら、“才能の区画”と呼ばれる第一区から第三区の中で最も個性的で優秀な人材を集めた学園と呼ばれているのも頷けるというものだ。

ちなみに、プールは屋内にあり当然の様に温水も可能で“男女別”だ。

美夏にとって、ある意味ではこれが一番嬉しい事だったのかもしれない。

（だって、お兄ちゃんという至高の存在以外の“汚物共”に私の水着姿を見せるなんて。本当に鳥肌が立ちそうで嫌だったんだもん……）

その誰とも知れない胸中での呟きは当然誰にも聞き取れない。すると、頬杖を付きながら外を眺めていた美夏の背中に、ツンツンといった細い指の感触が伝わってきた。

「うん？」

それに反応し、上を見上げる形で振り向く美夏……段状というのは、こういう時に面倒だ。

しかし、美夏を振り向かせた張本人は、そんな事は気にしてないようだ。

「何見てるの？ ぼくつと外なんか眺めちゃってさ？」

後ろの席に座っていたのは、長身でスレンダーな体型が特徴的な活発な女子、きのしたあい木下藍。

彼女はコバルトブルーの瞳や、赤みがかったボーイッシュな短髪から、どこか日本人離れた容姿をしているが、先ほど美夏が気になって聞いたところ、やはり日本人とアイルランド人のクウオーターだと言っ事らしかった。

また、これも先ほど教室に入ってきたばかりの時に聞いたことだ

が。

彼女はバスケットの選手として、ここ二橋学園に特待生で入学したらしく。その腰の位置が高い足だったり、指の長い手だったり、何よりも彼女の才能を誇示していた。

「ふふ、だって桜が綺麗じゃない……日本人なら、こういうのを静かに眺みたい時だってあるのよ？」

「そんな感覚、あたしにだってあるよ。伊達に日本で育ってないし、本当に桜が綺麗というだけで嬉しそうな声音で語る美夏に、木下も楽しそうに微笑を浮かべる。

やはり入学式を終えたばかりかつ、新入生としての始まりを実感し始めたからだろうか？

教室中の空気が、どこか浮ついた調子にあるのを誰もが感じていた。

そりゃそうだ、新しい仲間、新しい環境……ワクワクする事など、今は吐き捨てるほどにあるのだから。

すると、二人が他愛の無い会話で交流を深めている、そんな時であつた

ガラガラガラ

教室の一番前にある鉄製のドアが開けられる音が、不思議と浮ついた空気で騒がしい教室中に響いた。

その音に、誰もが視線と耳を傾ける……。

「お、全員席に着いてるな」

陽気な声と共に、カツカツとヒールで教室を歩く音が小気味良く鳴る。

教室中の視線を一心に集めながら、教卓へと歩を進めるのは、フオーマルなスーツに身を包んだ、背の高い女性。

吊り目気味なアーモンド形のハッキリとした瞳に、ほんのりと塗られた口紅が魅惑的なぶつくりとした柔らかい唇。少々癖毛が

強い長髪に、八頭身を体現した高い位置の腰や長い足。そしてそのピシリと伸ばされた背筋の所為で、更なる存在を強調している、ウエストとかなり反比例をした大きな胸。

また、黒のフォーマルなスーツの下に着ている白いワイシャツは、胸元がかなり開けられており、健全な男子学生の理性をスタボロに引き裂く程の谷間ゆめが、姿を晒していた……首元に着けられた小さなハートのネックレスが、これまた魅力的だ。

そんな完璧なまでのスタイルを持った女性が、段状に広がっているクラスメイト達を前に教卓に立った。

「はい！　まずは入学おめでとさん。色々新しい仲間と話したい気持ちはあるだろうけど、今はこちらに注目してくれ」

教卓に両手を突きながら、前へと気持ちを押し出す形でクラスメイト達に姉御肌全開の声音で話す女性。

「私はお前達にとつて、この学園で最初の担任となる大熊月美おおくまつきみつて言うんだ。これから何も無ければ一年間、よろしくお願いな！」

そう言つて、軽く頭だけを下げる大熊月美に、クラス中の生徒が一斉に一礼を返した。

「仰々しいのは苦手だから、お前達も緊張しないでいいぞ？　とにかく、今日は顔合わせ以外にやる事は特に無い。やるとしたら、学級委員とか決めたいところだけど、それもメンドイから後回しだ」

勝気でスタイルの良い女性でありながら、恰幅の良い雰囲気を出す大熊の姿勢に、生徒達もどこか楽しそうな先生だなという事を理解していた。

「だから今日はプリントだけ配つて、やる事は明日やる事にする！　誰か、プリント配るの手伝ってくれる奴はいないか？」

瞬間、クラスの男子生徒の大半が、まだ新入生というひよつこの分際では考えられないキレとスピードで、我こそはと手を挙げ始めた。

「お、良いね！やる気あるじゃん。まあ、何人か下心丸出しの奴もいるみたいけどさ」

ニヤニヤと意地悪に笑いながら、挙手をした男子生徒達を見渡す大熊。

すると、何人かの真面目そうな雰囲気を持つ男子生徒達が、ゆっくりと挙げていた手を下ろしていった。

「言つとくけど、こう見えても私は確りと相手を選んで付き合うタイプだから、まだお前達じゃ十年早いよ　それに高校生なら同年代と付き合ったほうが楽しいしね、そっちに努力の趣を置きな」

やはり教師というぐらいの年齢にもなれば、自分の容姿がどれぐらいのものか客観的に理解できているのか、その口調は自信に満ちたものであった。

「ただ、さっきも言つたけどやる気は買つてやる。大体下心程度で恥ずかしがる事なんて無いんだ、むしろそれを原動力にして動かないと若者らしくないしな。じゃあ、そこが一番前の男子、プリント配るの手伝つてくれ」

そう言つて、最前列ど真ん中の席に座っていた坊主頭の男子に指示を出す。

「はい！」

勢いのある返事とともに、指示を出された男子生徒が立ち上がった。

「お、良い返事じゃないか。お前は何部だ？」

「野球部です」

「ああ通りで……金本先生なら納得だわ」

大熊は他愛の無い会話を指示を出した生徒としながらも、持ってきていたプリントを三つに分けた。

「じゃあ、お前はこれを配つてくれ」

「はい！」

再び勢いのある返事と共に、差し出された一つのプリントの束を受け取る男子生徒。

どうやら大熊は二つの束を自分で配るようだ。

まあ、入学初日の生徒をいつまでも前に出しておくのは可哀想か

もしないという配慮からだろう。

そして、二人は分けたプリントを、それぞれクラスメイト全員に配り終えた。

ここからは、ただこれからの約一週間を事務的に伝えるだけだったので、閑話休題させていただく。

配布されたプリントを眺めつつ、高校初めてのHRを終えた美夏は。とりあえずこれから何をしようか考えていた。

先ほど、教卓でこれからの予定などを話す大熊の眼を盗んで送った、兄へのメールはまだ返事が来ていないし。学園にいる筈の兄を置いて、先に帰宅するというのもありえない。

どうせなら、入学祝いとして昼食だとか買い物だとか、一緒に外を歩いて回りたい。

しかし、返事が返ってこない事には動きようが無いので、美夏はまた手持ち無沙汰な感じを味わっていた。

他のクラスメイト達は、皆これから家族と食事だったり一緒に帰宅だったり……。または新しく出来た友人と遊びに行くだったり、それなりの賑わいを見せている。

そんな中でも、やはり美夏に声を掛ける男子生徒はいたし、新入生代表として挨拶をした事に興味を持つてくれた同性の者達もいた。だが男子など兄以外汚物としか考えていないこの妹に、薔薇色の高校生活を夢見た連中に摩くなどありえる筈も無く。そのこと如くが絶妙な当たり障りの無い断り方で撃沈していた……。もっとも、撃沈したと感じている男子などいなかった。それほど上手く断ったということだ。

また同性にも同じで「これから兄と予定があるから……」と、本当に申し訳なさそうに断っていた……。のだが、やはり格闘家といえども有名人を兄に持つという事には変わりなく、ミ―ハーな性質を

持つ彼女達から質問攻めに合うという出来事を味わった。

しかし、ここでも彼女の驚異的な能力が発揮され。

いかに兄であるあの“異性”が素晴らしいのか？

いかに、その兄に相応しい異性は自分以外には存在しないのか？
などの事を語ることを、唇を噛み千切りたいほどに我慢をしながら、いわゆる印象操作を行なった。

簡単に言ってしまうえば、興味を持った彼女達から、兄という存在をどれだけ薄れさせるか、どれだけ幻滅させるのかという事をしたのだ。

だが、恋に恋するのではなく、兄との恋愛を生涯をかけて熱望している彼女に。愛する兄を蔑む事など酷な事であり、結果中途半端な形に落ち着いてしまったことは彼女にとって誤算であった。

実際、半々の結果に持ち込んだこと自体、彼女の思いにとつては驚異的な数字だったのだが……。

まあ、その話題に上がった当の本人がイケメンというよりも男前に近い、若い女子高生には中々理解され辛い顔立ちをしていた所為もある事にはあったのも要因といえる。

「さつきは大変だったね」桐嶋さん？

「まあ、慣れてるからね。それ程でも無かったよ」

人当たりの良い陽気な声で、美夏に労いの言葉を送る木下。

今はHRも終わり、各自自由に下校が許されているため、木下は美夏の直ぐ横で机の上に腰を乗せて座っている。

しかし、それにしても背の高い娘だ……と見上げながらに思った美夏ではあったが、決して口にするのではなく、話を続けた。

「やっぱり中学でも有名だったの？ 桐嶋さんのお兄さんって」

「そうだね、TVに出た去年ぐらいから急につて感じかな？ もともと、雑誌とかでも取り上げられてたけど、やっぱりそこが一番大きかった気がする」

「へー、あたしも結構格闘技とか好きだから見るけど、お兄さんって本当に強いし良い体してるよね。初めて見たときは一つ上だって

全く気付かなかったぐらいだし」

「本人はそれを気にしてるみたいで、結構『今日年上の人に“年上でしょ？”って言われた』とか言ってるよ」

あれ……なんだか、この木下という同年代の娘と話していると、打算なしに自然と会話が出来る気がする。

もともと中学でも、こんな雰囲気娘の娘は沢山いて、結構仲良くやってたけど。やっぱり、サバサバとした性格の人と話すのは気が楽だ。

先の通り、美夏と言う新女子高生は、自身の兄に悪い虫を寄せ付けないために様々な小細工を弄してきていた。

しかし、これは例えば美夏を通して兄と接触を試みようとする企んでいる者や、同じく美夏という男が寄り付いてきそうな甘い蜜に集ってお零れを貰おうとする蛆虫以下の同性だった場合にしか行使されず。木下の様な、打算なしでこちらと仲良くなろうとしている者には機能しないのだ。

また美夏は、これまでの経験からそういった輩の見分け方を心得ているので、まず間違えるということはない。

故にこの時、不思議な高揚感を感じられる木下に対して、美夏は純粋に友人になりたいと考えた……が、それよりも先に木下の方が同じ事を考えていたようだ。

「外見の割りに面白い人なんだね。てか、桐嶋さんも何だかんだで面白い人だよな」

「え、なんで？」

「だって入学式終わったばかりだっていうのに、いきなり校門前にいたお兄さんに抱きつきに行くんだもん。あの時は流石にビックリしたね。桐嶋さんって、結構ブラコン入ってるって言われるでしょ？」

この面白がって問いかけてきた質問に、美夏は即答で『ブラコンじゃなくて愛しているのよ！』とかなんとか答えそうになっちゃったが、それはなんとか押し留めることが出来たようだ。

「うーん、確かに言われたりはするけど、私としては普通に接して

るだけなんだけどな……」

「あれは正直普通じゃないって……まあ、でも兄妹仲が良いって悪いことじゃないしね。桐嶋さんって他に兄弟いたりするの？」

「うん、小学生の妹が一人いるよ。私よりも、妹の方がお兄ちゃんにベツタリって感じかな？」

「へーそうなんだ。桐嶋さんの妹って事は、相当可愛いんでしょ」

「そうだね、今のところもう既に40人の男の子から告白されてるんじゃないかな？」

「40人!？」

なんだその魔性の女は！ 半端な数じゃないぞ小学生!？」

木下は、そのあまりに飛び抜けた数字に素で驚きの声を漏らしてしまふ。

「え、でもそれってホントなの？ ただ妹さんが言ってるってだけじゃないの？」

「うちの妹は、簡単にそういう事はバラさないからね、すっごい口が堅いし」

「じゃあ、なんで40人もいるって分かったの？」

「普通に机の中から出てきたんだよ、40人分のラブレターが」

その事実、更なる驚きの色に染まる木下の整った顔。

「なんでそんなに机の中に入れてたの？」

「なんだか、折角気持ちを伝えるため一生懸命に書かれたラブレターを捨てるのは悪いから、処分に困ってたんだって。それでドンドン溜まっちゃって、終いには勉強机の一つの引き出しを占領するくらいになっちゃったらしいよ」

「は……あたしならすぐに捨てちゃうから、あまり理解は出来ないけど。なるほどね、何となく桐嶋さんの妹さんがモテる理由が分かった気がする」

よく言えば純粋な良い子で、悪く言えばどこか抜けた子……。

まだ見ぬ相手の妹ではあったが、木下はその娘の事を“きつと将来は末恐ろしい女になるね”と勝手に本人が聞いたらちよつと困っ

てしまいそうな評価を下していた。

「まあ気配りも出来るし家事も出来るし勉強も運動だって人より出来ちゃう娘だからね。我が妹ながら誇らしい反面、もっと色んな面で楽に構えて欲しいって感じかな」

「新人生代表を務める桐嶋さんが、そこまで言うなら凄い娘なんだね。でもそうなると、お兄さんが色々黙ってないんじゃない？ほら、告白してきた子に対して脅迫めいたことするとかさ　なんだかあの人って、子育てとかしたら過保護っぽいイメージあるんだよね」

子育てというワードを、美夏は一瞬の内に脳内で“子作り”に交換させ妄想を膨らませた後。その様子を全く外見に出さず、直ぐに木下の方へと意識を向け直した。

まっこと、神業がかった思考の切り替えの持ち主である。

「ああ、それは確かにあるかも　お兄ちゃんって、この学園の近くにある道場で支部長をやってるんだけど。そこに門下生としている私の妹と同じ学校に通っている子に対して、遠回しに『妹と付き合いたいのなら、俺を倒さないとダメ』みたいな事を言ったときがあっつね……」

美夏は当時のことを楽しそうに語りだした……。

内容自体、シスコンを否定はしているが否定しきれなかった兄のエピソードだったのだが。

普段TVでしか美夏の兄を見たときの無かった木下にとっては、どこか新鮮というかイメージ通りの人というか……そんな有名人の新たな一面を発見した時の様な、少し嬉しい気分を味わえたのであった。

それから数十分後、他愛の無い会話をした二人は、いつの間にかお互いに下の名前で呼び合うような関係になっていた。

多分、二人はもともとそりが合う者同士だったのだろう。

出なければ、こんなに早く意気投合するということのも難しいというものだ。

だが、そんな新しい友人と会話をするという楽しい時間も、そろそろ終わりにしなくてはならないようであった。

「あ、もう13時回ってる……」

「え？ もうそんなに時間経ってたんだ。気付かなかったよ」

「私もだよ。じゃあ、今日はそろそろ帰ろうか？ 私、この後、お兄ちゃんと会わなきゃいけないから」

「そうだね。私も家の連中とご飯食へに行く約束してたし、そうしようか」

二人はそう言っただけで同意し合うと、互いに座っていた場所から立ち上がった。

やはり、高校一年の女子にしては背の高い美夏にとっても、木下藍という女子はデカク見える……しかし、スレンダーな体型のお陰で、特に威圧感などは感じられない。

むしろ、ウエストが55以下の美夏をもってしても、彼女のしなやかでアスリートの様な体型は綺麗だと思うし、とても魅力的に感じる。

おそらくこの娘も、色々な男子に好意を抱かれているのであろう。多分、それに気付いていないかもしれないが……。

先ほど配布されたプリントが入れた、殆ど空っぽの鞆を肩に掛けると。美夏と藍は共に教室から出る。

お互い御揃いの制服を着た、タイプは違えど見栄えのする者同士なので、ただ並んで歩いているだけでとても絵になる光景を作り出していた。

片や女性らしい膨らみや可愛らしさを持った、凹凸がハッキリとした体型のタイプに。片やボーイッシュな雰囲気を出しながらも、モデルと見間違えても可笑しくは無いスレンダーな体型をしたタイプ。

これだけでも、思春期の男児ならば小一時間程議論が行なえるというものだ。

二人は四階の階段を急ぐことも無く下りて行き、校舎の一年生専

用の出入り口である第三出入り口から、履いているものをローファ
ーに履き替えてから外へと出て行く。

ガラス張りの両開きのドアから外へと出ると、そこにはやはり地
面であるアスファルトとは対照的な桜の柔らかな色が出迎えてくれ
ていた。

また第三出入り口の近くには一年生専用の地下駐輪場があるのだ
が、美夏と藍には特に関係の無い施設だったので、二人は現代的な
エレベーターと地下駐輪場への坂道などは無視して学園の校門へと
足を進めていく。

春の風が、二人の髪やスカートを揺らしていく。

美夏は揺れる髪が顔の前に来るのが嫌なのか、顔の横の髪を片手
でちよつとだけ抑えながら歩いていく……その姿はどこかお嬢様と
いった雰囲気醸し出していた。

隣を歩く藍は肩に掛けるタイプの鞆を こちらの方が楽な

のか 片手で肩に担ぐようにして持ち、春風に晒される赤み
がかったボーイッシュなショートヘアなどは抑えるのも面倒なのか、
片目を瞑るだけで対処していた。

「なんだか午前中より風が強いね」

「こういう春風って気持ちは良いんだけど、たまに目に自分の髪と
か飛んできたゴミとかが入ってくるから鬱陶しいんだよね」

先程からそよ風のように吹くときもあれば、突然ブワッと目を細め
たくなる風も吹いている。

だがそんな事よりも、二人は先程一回だけ通ってきた二橋学園の
様々な施設が見られる広い道を、あっちへこっちへと好奇心の眼差
しを左右させながら歩いていた。

また、敷地内にも桜の木が所々にあるため、非常に視覚的にも喜
の感情を高めさせてくれるものであった。

そして、学園の校門へと辿り着いた二人の目に、少々信じ難い光
景が飛び込んでくる。

「ねえ、あれって……」

「うん、お兄ちゃんなんだろうけど……何やってるんだろ？」

校門の向こう側には、さっき入学式後に歩いた赤い煉瓦が敷き詰められた道の桜並木がある……だが、二人はその桜並木から“一人の男を背負って歩いてくる”、上をブレザーではなくワイシャツ一枚となった桐嶋竜蔵に視線を向けていた。

岩石の様な筋張った太腕と、その腕を後ろに回しているために広がっている大胸筋が非常に力強そうで、後ろに背負っている男を絶対に落さないだろうという安定感を回りに与えていた。

そしてやはり両脇に抱えている、背負っている男の足に挟まれた腹回りは、理想的な逆三角形を描くだけではなく、ワイシャツの上からだというのに六つの筋肉の塊の存在を強調させていた。

また竜蔵のブレザーは、背負っている男の肩に掛けられている。

「ごめんね、ちよつと行つて来る！」

「あ、待つてよ美夏！ 私も行くから！」

なんだか訳の分からない光景を眺めていた美夏と藍は、とりあえず既に校門を跨いだ竜蔵の下へと向かった。

「何してるの？ お兄ちゃん？」

「うん？ おゝ美夏か、待たせちゃったな」

状況がイマイチ理解できないため、案外普通に尋ねた美夏に、竜蔵がちよつと機嫌が良さそうな口調で答えた。

美夏が竜蔵の前に立つと、遅れて藍も駆け寄ってくる。

「うわ！ その人、顔怪我してるじゃないですか！」

駆け寄ってきた藍が開口一番、竜蔵のゴツゴツとした僧帽筋やら広背筋やらの背中に背負われた男を見て驚きの声を挙げる。

最初に駆け寄ってきた美夏はどうやら、兄以外の異性を視界に入るのも嫌がった所為で、今気付いた様であった。

「ああ、ちよつとコイツが暴れててね。言うこと聞かないから手っ取り早く済ませたら、こんななんだった」

「うわ……モ口鼻血出てるじゃないですか」

「まあ、もう止まって乾いちゃってるけどね。ところで、君は？」

「はい？」

金で染められた長髪のせいではなかなか確認し辛い、確かに竜蔵の言う通り、背負っている男の鼻血は止まっている。まあ、唇の方も数箇所の切り傷があるし、気を失ってもいたが。

だがそんな男を背負っていても普通に世間話でもしようとする雰

囲気の竜蔵に、一瞬藍は呆気にとられた顔をしたが。

「あ、木下藍きのしたあいです」

「背が高いね。何部に入るの？」

「一応、女バスに特待で……」

「へー凄いじゃん！ 肌の色とか髪の色とか、もしかしてハーフ？」

「あ、いえ、日本とアイルランドのクウォーターです」

アイルランドと聴いた瞬間、一瞬竜蔵は某有名プロレス団体に所属している白人の選手を思い浮かべたが、おそらく言っても伝わらないと思ったので自重した。

すると、二人の初対面の会話に美夏がどこか不機嫌な表情を割り込んできた。

「ところでさあ、後ろの人、早く保健室に運ばなくていいの？」

「ああそうだった、忘れてたわ」

「もう、確りしてよねお兄ちゃん」

「はは。まあ取り合えず、俺はコイツを運ばないといけないから、もう少しだけ待っててくれない？」

「待ってるのは良いけど、なるべく早くしてね？ もうお腹が空いて仕方が無いんだから」

「分かったよ、それじゃあ、また後でな？」

そう言っ、軽い笑みを浮かべながら美夏と藍を過ぎ去っていくとする竜蔵に。

藍が思い出したかのように口を開いた。

「そういえばお兄さん！ 確か、携帯で保健室の方に連絡すれば、直接専用の車とか出してくれるんじゃない？」

藍の言った事は、この広い二橋学園だけに限らず、学園都市の全

区画で取られている制度であり。

学園都市内に存在する全ての学校・学園には、生徒達の緊急を要する怪我や病気などが起こってしまった際に、すぐに保健室や病院へと運ぶための専用の足……つまり輸送車を用意する事を義務付けられているため、電話一本入れれば現場に走らせてきてくれるという非常に便利な制度がある。

だが実際には、緊急を要する境目が分からないために、大抵は保健室などではなく近くの大学病院などに搬送される事が多い。

藍が竜蔵に提案したのは、わざわざ広い敷地内を男一人背負って歩くのではなく、この専用の足を使っ^てはどうかという事であつたのだが。

「いや、一応これって“勧誘”も兼ねてるから、使う気はないね」「“勧誘”……ですか？」

その言葉に、藍は首を傾げざる負えない。

藍の仕草を見て、竜蔵は軽く微笑みながら「結構根性ある奴だったからさ、ラグビー部に引^つ張ろうと思っ^て」と短く説明をした。

竜蔵が所属する二橋学園ラグビー部とは。

学園都市内でも有数の強豪チームとして知られていて、毎年シーズンになると必ず県内の大会で決勝・準決勝には上がってくるチームなのだ。ちなみに竜蔵は、このチームのFLというポジションでレギュラーを張っている……空手の実力でも格闘技界最高峰の団体に所属し、ラグビーの強豪高でもレギュラーを張るとは、恐るべき身体能力と才能の持ち主である。

しかしここで、普通の思考の持ち主なら疑問に思うことがあるかもしれない。

そんな強豪高の部活に、どうみても素行の悪そうな新入生を無理やり入れるのは大丈夫なのかと？

だが……。

「なるほど、そういう事ですか」

もともと活発で男勝りな性格をしていた藍は、この短い説明だけ

で何かに納得した様であつた。

しかし後ろでは美夏が（早くお兄ちゃん来ないかな〜）と、眼中にない異性など気にする価値もないとも言つかのように、次に備えていた。

「でも、根性があるって言つてましたけど……お兄さん、その人と違つて全く怪我とかしてないですよね？」

納得はした事にはしたが、やはり何か引つかつたのか、藍が素朴な疑問をぶつける。

すると竜蔵が、軽く「ぷっ」と噴出した後、口を開いた。

「いやいや、一応俺もプロだからね？ 素人に怪我なんてしてちゃ、面子が保てないから」

「でも、根性があるって……」

さも当然の様に言う竜蔵に、少々驚く藍。

だが疑問が解けたのではないので、再び尋ねると。

「それはただ、コイツが手加減したとはいえ膝まともに蹴り喰らつて、ちよつとの間だけ立とうとしてからだよ」

「は、はあ……」

軽い調子で言う竜蔵に、若干引き気味の藍。

そりやそうだ……プロの格闘家が、素人の顔面に膝蹴りを入れたというのだから。

おそらく、背負っている男の背が竜蔵よりも高いため、首相撲からの膝蹴りだとは推測ができるが。それにしたって、エグイ技で仕留めたものだど、藍は胸中で考えていた。

「じゃあ、美夏待たせる訳にいかないし、俺は行くよ」

「はい、お気を付けて？」

「はは、じゃあね。美夏をよろしく頼むよ？」

そう言つて、ようやく竜蔵は校舎の方へと歩いていった。

美夏をよろしく頼む……つまり、状況的に入学式で妹が既に友人を作つたのだと推理したのであろう。

校舎の方へと向かつていく竜蔵を見送りながら、藍は後ろにいる

美夏へと振り返った。

「なんだか初めて話したけど、豪快？ いや、大雑把な人なんだね、美夏のお兄さんって」

藍の素直な感想に、兄が戻ってくるのを待つ気持ちに切り替えていた美夏は。

「え？ まあ確かに大雑把と言えば大雑把だけど。確りしてるところもあるんだよ？」

自身の兄の話をするだけで嬉しいのか？

表情にホクホクと暖かい微笑みを浮かべる美夏。

これを見て、藍は胸中で（ああ、やっぱりこの娘は相当なブラコンなんだな）と確信するのであった。

新しい環境、新しい友人（後書き）

一応、改訂前の時に書いていたキャラクター達のイメージ絵です。
ですが主人公である美夏は、また書き直そうと考えているため、
今回は載せていません。

いらなと思う方は、各々で好きにイメージしてください。

桐嶋竜蔵“美夏の兄”

> i 3 0 0 2 6 — 2 3 7 9 <

木下藍“高校で出来た友人”

> i 2 8 7 6 4 — 2 3 7 9 <

基本コピー用紙にシャーペンで書くド素人なので、この程度のレベルしか書けません。今後とも自分なりに納得の出来た絵が描けたら、勝手に載せたいと思っていますので、あしからず……。

『伊藤の空間』（前書き）

今回以降の更新は、私事の事情によりかなり遅れます。

よって、この話しは急いで仕上げたために小さなミスがそこかしこにあるかもしれません。

いつかちゃんと直そうと思います。

『伊藤の空間』

二橋学園から出ている学生バスを使って、本来のバス停とは違う目的地へと向かう美夏と竜蔵の二人。

あの後、背負っていた男を保健室に預けてきた竜蔵が妙に満足気な表情で戻ってきたときには、既に木下藍の姿は見えず、それを美夏に尋ねたところ。

「藍も、この後に予定があるみたいだったから、先に帰ったよ」

との事で、ようやく二人も学園から出たという訳であった。

バスの車内は、既に同じ学生の姿は見えず、美夏と竜蔵の貸しきり状態となっている。

学園にはまだ、生徒会などの生徒達が残っているが、どうやら二人はタイミングに恵まれたらしい。

故に、人がいない寂しい車内にある後部の二人掛けのシートだけを、美夏と竜蔵で埋めていた。

竜蔵の肩幅が広い所為で、先程からバスに揺られる度に、美夏の肩に兄の鍛え上げられた制服越しの三角筋が当たってくる……しかし、美夏には嫌そうな表情など一つも無い。

むしろ先程からニヤニヤと嬉しそうに微笑んでいるだけだ。

竜蔵自身、妹の入学式に出席できなかったことを後悔しているの
で、なにやら嬉しそうな彼女を見て悪い気はしない。ただ、なんで嬉しそうにしているのかが分からないのが問題なだけだ。

だが、そんな事は美夏自身理解している……兄にそんな甲斐性があれば、もっと浮ついた話がいくつあっても可笑しくは無いからだ。
「そういえば、新入生代表の挨拶はどうだったんだ？ 上手く出来たのか？」

「上手くもなにも、ただ昨日書いた挨拶の文章を暗記すればいいだけだったから、特に失敗したとかは無いけど？」

「暗記ね……俺じゃ無理だな。前に出て体動かすならともかく、何か言っただとか宣言するだとかは緊張しちゃうからな」

何と言う脳筋……という考えなど、兄を崇拜していると言っても過言ではない美夏には一切浮かぶ事は無い。

むしろ、そんな事を言う兄にたいして心の中で（お兄ちゃんが弱い部分を曝け出すなんて、ギャップ萌え！？ これはギャップ萌えなの？）などと興奮しているぐらいなのだから。

ちなみに、この興奮も外に出すことは無い……いくら愛しているといっても、相手に見せていいレベルとダメなレベルがあるという事を、美夏は一応弁えているからだ。

窓際に座っている美夏の横で、外の風景が流れるように過ぎ去っていく。

その間も、二人の他愛の無い会話は続き。

いつもとは違った目的地に到着したときに感じた時間の経過は、それはもう短いとを感じるものであった。

『次は〽二橋駅前〽二橋駅前で御座います』

バス内のアナウンスが、美夏と竜蔵の目的地であった場所の名前を流し始め。

これに反応した美夏が手馴れた手つきで“降りる”のボタンを押し、隣に座っている竜蔵に振り返った。

「ところで、行く場所とか決めてるの？」

ウキウキとした表情を隠そうともせずに、竜蔵を上目遣いで仰ぎ見る美夏。

我が妹ながら、それを身内ではなく異性に向けていれば何人の馬鹿が引つかかるのかと考えた竜蔵であったが。まあ、そんな事をしなくても既に選り取りみどりの状況なんだろうと、改めて妹の優れた容姿に感心を覚えた。

しかし、ここで困ったことが発生する……。

「いや、特には決めてない」

「えゝ！？ 自分から埋め合わせするって言ったのにつ！？」

「え、俺が考えなきゃいけなかったのか？」

「当たり前でしょ？ もう」

実はこの兄、入学祝をしようと欲したくせに、ノープランで街に繰り出そうとしていたのだ。

それに、頬を膨らませながら抗議の意思を示す妹。

確かに可愛らしい仕草ではあったが美夏の場合、それをするには少し大人っぽい雰囲気があり過ぎていたために、どこか滑稽に見える……まあ、グツと来るものが有るのには変わりはないが。

だが向けられている対象は身内である兄なために、全く持つて反応を示さない。

というより、ちょっと困った表情をしていた。

「あゝ……いや、今日はお前が行きたい所とかに行こうと思ってから」

「言い訳はいいよ。だけど、今度からは自分で誘ったんなら自分で行く場所を決めときなよ？」

「ああ、分かったよ」

竜蔵が美夏の指摘に不承不承と頷くと、どうやら丁度バスが目的地へと到着したようだ。

エアブレーキの音と共にバスはバス停の直ぐ横に止まり、入り口と出口の全ての扉を開放した。

「さて、行くぞ美夏」

「うん でも、ちゃんと今言ったことは覚えててよね？」

「はいはい」

もともと手荷物など持っていなかった制服姿の竜蔵は、美夏の荷物を代わりに持ちながら席を立ち、バスを降りていく。美夏も、スカートに皺が出来ないように座っていた状態から立ち上がり、バスのステップを軽やかな足取りで降りていった。

駅前のバス停という事で、そのロータリーに並んで立つ二人の

前に。二橋駅と大きな看板に書かれた、それなりに大きな現代風の駅が佇んでいた。

その駅には、これから利用しようという人々が行き交い、周りには美容院やら飲食店、携帯ショップなどといった様々な店が所狭しと構えており、非常に賑わった雰囲気醸し出している。

「で、とりあえず、まずは飯だろ？」

「そうだね、流石にお腹空いちやってるし」

「じゃあ、この辺だとどこにしようかな……」

学園都市の街並みというのは、それほど普通の街とは変わるところは無い。

変わるところといえば、その行き交う人々の殆どが学生というだけで、背の高いビルやゲームセンター、家電量販店など見つけようと思えばいくらでも普通の街と同じ箇所を見つけられる。

だが、これらの店舗や会社を経営しているのは確かに企業の人たちなのだが、その従業員の殆どは大学生やら学生達の親やら、はたまた学園都市が外から雇ってきた大人たちだったりと少々特殊な人選をしている。

まあ、この話はここまでにして、今は二人の方へとスポットライトを戻すことにしよう。

竜蔵は二橋駅付近で、とりあえず昼食を取れるようなところを記憶の中から掘り出していく……。

しかし出てくるのは牛丼屋だったりラーメン屋だったり、男が遊びがてらに軽く済ませるような所ばかり……流石に、妹の入学祝と銘打ったこの状況で、そんな所をチョイスするへマなど竜蔵はしない。

故に悩む……そして後悔する。

（俺って、本当に洒落っ気の無い遊びをしてたんだな……）

普段空手仲間だったラグビー部の連中とだったり、男臭い集まりでしか遊んでこなかった竜蔵にとって、これは仕方の無い事であつたが。手痛い状況に陥っているのもまた事実。

ニコやかに兄のチョイスを待つ妹の横で、眉間に皺を寄せながら唸って悩む竜蔵……。

傍から見れば、厳つい肉体をした男が眉間に指を当てながら渋い顔をしているという、どうみても怒っていきそうな空気を出していたので。周りを行き交う者達は美夏の優美な姿に見惚れた後、隣の兄の姿を見てすぐさま視線を反らすという条件反射を起こしていた。

すると、竜蔵の頭に一つの店の風景が浮かんだ……。

「そっぴゃあ、あの店ってまだ有ったっけかな？」

「うん？ あの店って？」

ポツリと呟いた竜蔵の言葉に、美夏がまた再び上目遣いで覗き込むようにして視線を向ける。

あざとい、なんてあざといんだ……と思うかもしれないが、兄に對してだけは、美夏は打算抜きで攻めている。まあ、それもそれで問題ではあるが。

「いや、中学の時に“鬼姫”って奴がいただろ？」

その問いかけに、美夏の声音がワントーン下がり、表情に至ってはジト目で竜蔵の事を見る様になっていた。

「いたね、そんな人も」

「そいつと一緒に遊びに行った時に、教えてもらった場所があるんだわ。そこならお前も満足できると思う」

「へー、一緒に遊びに行ったんだ（あのゴリラ女と）」

「ああ、そんなときはアイツもやつぱ女子だったんだなって考えを改めたな、流石に」

当時を思い出したのか、懐かしむように微笑みながら美夏に語る竜蔵であったが。

そろそろ美夏のテンションがダダ下がりなのに気付くべきだろう……まあ、身内という事で気にしてないという事もあるにはあるのだが。

「とりあえず、さっさと行くか。俺も腹減ってるし」

「そうだね、そっぴゃあ」

二人は各々違ったテンションの具合で、バス停がある駅前ロータリーから歩を進めた。

二人が向かったのは、駅周辺の大通りをちよつと進んだところにある横道に入つた場所だ。

そこにあつたのは、第一区に学校があつたり家があつたりする生徒達が良く遊びに来る。ちよつとしたガーデンングや、それに合わせた赤茶色の地面に、ウッドデッキなどでテラスを構えているカフェだったり立ち並ぶ、少しお洒落な繁華街であつた。

学園都市では車よりも交通手段がバスや電車、はたまた自転車が主流な訳だ。こういった駅周辺の繁華街といった地域には、全く持つて通行人達の邪魔になる車やらなんやらの進入は無い。あるとすれば、深夜や早朝に来る業者のトラックぐらいのものか。

故に駅に近い繁華街を行き交う人々には、そういった突然通路を塞がれるといった心配も無いため。普通の繁華街を歩くときよりもどこか安心した様子が見られる様な気がした。

まあ、あくまで見られる様な気がしたただけ……本当は、別段学園都市外で見られるものと変わりは無いと言えるかもしれない。だがまあ、そういった無用な時間を喰うといった心配が無いのは事実なのだ。

行き交う人々は殆ど学生……たまに社会人の様にスーツを着た人や、明らかに十代二十代ではない年齢の方々も見事出来るが。そういった人たちは、大抵近くのお店やオフィスから昼を求めて彷徨っている人達だと、ここでは相場が決まっている。

そんな大半が学生だらけの繁華街の道を、美夏と竜蔵は肩を並べあつて歩く。

「なんだか、皆こつちを見てるね　私達を恋人同士だと思つてるのかな？」

今にも油断をしたら思いっきり腕を組んでくるぐらいに、こちらの様子を伺いながら笑顔を向けてくる美夏に。竜蔵は少々うんざりとした表情をしながら。

「勘弁してくれよ……たださえ、部内でシスコンシスコン言われてんだからさ。それと、腕は組まないからな？ お前も、もう高校生だろ」

もし、こんな学生だらけといっても、更にその大半がカップルで構成されている空間で知っている奴らに見つかりでもしたら……桐嶋家の家族構成を知る者たちにとって、これほど弄り甲斐のあるネタは無いだろう。

ましてや本日付で、同じ高校に入学したのだ。

見つかってしまった時のリスクは想像だに出来ない。

「ぶっ！ 別に見られたって良いじゃん！ 兄妹同士なんだからさ！ 大体、年齢なんか関係ないじゃん！」

「お前は良いかも知れないけど、俺はやなの。分かってくれ、頼むから」

そう言いながら、右腕に絡もうとしてきた美夏のオデコを反対の左手で押さえる竜蔵。

視線は正面を向いたままで、もはや手馴れたように片手間でやるその光景は。これが二人が外を一緒に歩くときの常識なのだと教えてくれていた。

だが、周りにいる者達 主に男性陣 は納得がいかないようだ。

『あの野郎、あんなに可愛い子連れてるのに腕も組ませねえなんて

……』

『見せびらかしてるんだろ？ 気分わりい』

『あれ？ あれつてもしかして、桐嶋竜蔵じゃね？』

といった具合に、嫉妬だったりという様々な感情が男性陣の中では渦巻いていた。

しかし、ここにいるのは大半がカップルということを前記した筈

だ。

故に、美夏という十人いたら変な趣味の者がいない限り十人が美少女と答える女性に視線を奪われていた彼氏に、彼女による何かしらの制裁が其処かしこで行なわれていたのは言うまでも無い。

お昼時の時間も過ぎ、店からまた繁華街を回ろうとする若者達が出てきた事によって雑多とし始めた道を、いつも通りな感じで歩いていく二人……。

途中、美夏の嗅覚を刺激する、とても美味しそうなコーヒーの匂いがするオーブンテラスなカフェを見つけたりしたが。竜蔵が「コーヒーとかカフェオレとかじゃなくて、飯食いに行くんだろ？」と言ったために、美夏は渋々そのカフェを諦めるのであった……いつか、あの店には絶対に入ってやる。

しかし、いつ昼食に辿り着けるのか？

入学式が終わり、ちよつと新しく出来た友人と他愛の無い会話で時間を潰してしまい、お昼時を逃してしまったまでは良い、そんな事は良くある事で済む……だが、あれから既に一時間も経ったというのに、まだお昼にありつけないとはどういった事なのか？

流石の美夏も、さつきから何やら周りをキョロキョロとしている兄にビシッと行ってやらねばと思ったようで。

「お兄ちゃん？ 一体いつになったらお店に着くの？ もしかして迷ったとかじゃないよね？」

疑うような視線で、右隣を歩く竜蔵を見る。
が、どうにも反応が見られない……。

これは、もう一回言わねばダメかと考えたとき……。

「あ、あった」

「ほえ？」

竜蔵の声に、美夏も思わず呆けた声を出してしまう。

普段の美夏なら、こんな声は出さないのだが……やはり空腹や信頼できる者が近くににいる場合、気の緩みというのがどうしても出てしまうのだろう。

だが、今はそんな場合ではない。

「どこ！ お店どこ！？」

あまりの空腹に、竜蔵の視線を一生懸命に追う美夏。

「あそこだ。あの緑の店」

そういつて、ゴツゴツとした手の指で示す竜蔵……その指の先に、視線を向けてみると。

「おお、お兄ちゃんにしては結構お洒落な店が……」

美夏の視線の先に、一軒の緑を基調としたパスタの専門店が、他の飲食店と並んで店を構えていた。

店の窓付近には、視覚的に不快にならない程度の色とりどりの花が並べられ。他にも店の人が育てているのだらうと分かる花が、店先に並べられている花壇に植えられていた。

店の入り口前に置かれている緑の縁に黒いボードの看板に書かれた『祝入学記念メニュー1100円』の明らかに女性による手書きの文字は、年頃の美夏に好感を持たせ。他にも『春の新作メニュー・旬の魚介と春野菜を使用したペロンチーノ1000円』だった。『蛸のカルパッチョ680円だにゃ』だったり……非常に今のハングリー精神旺盛な美夏に対して挑戦的なメニューの数々が記されていた。

「あーもう我慢できないよー！ 早く入ろう！ ね！？」

「分かったから、いきなり手を引っ張るなよ」

もう我慢の限界だしする必要も無いと判断した美夏は、竜蔵の太い右腕が纏っているブレザーの袖を引っ張りながら、店の入り口へと走っていく。

そして美夏は、兄である竜蔵を引っ張りながら、その店の入り口の扉を開いた……すると。

カランカラン

『いらつしやいませ』

扉を開けると同時に、非常に落ち着いた店内の雰囲気と香り、そしてホール担当のウエイトレスの声が二人を出迎えた。

やはり店の外の雰囲気通り、中も濃い色の木材を使用した内装をしていて、非常に落ち着いた雰囲気を醸し出しており。カウンター式のキッチンでは、この店のシェフである二人の男性が衛生面に確りと気を遣ったユニフォームで手際よくパスタ料理を作っていた。

また、照明も明る過ぎず暗過ぎずで、どこか大人の店といった印象を初めて入った美夏に与えてくれている。しかも、客席も意図的に少なくしてある様で、店内の雰囲気だけではなく、実際にも騒がしくない程度の談笑が聞こえるシックで落ち着いた空間を作り出していた。

そんな中、最初に二人に気付いたウエイトレスの女性が近づいてきた。

「ようこそ『伊藤の空間』へ　二名様で宜しいでしょうか？」

「はい」

「ではご案内しますね。こちらにどうぞ」

店の名前で笑うものか……特に気にしていない美夏ならいざ知らず、竜蔵はこの『伊藤の空間』というネーミングセンスに吹き出す寸前だった。

そういえば前もこの店の名前で笑いそうになったつけかと、懐かしみながらも。

竜蔵は店内という事で、もはや諦めた美夏との腕組をしながら案内された席まで引つ張られていく。

「では、ごゆっくりどうぞ」

良く外からの日差しが当たる窓際の席に、美夏と竜蔵の二人を案内し座らせたウエイトレスは。メニューを黒いテーブルの中心に置いた後、そう言いながら一度深くお辞儀をし、二人から優美な足取

りで去っていった。

その間中、竜蔵はこの店のウェイトレスが着ている、フリルなどが目立つミニスカートの制服を眺めながら。着ている本人も中々に美人だったために、ついでにそっちも相手に嫌がられない程度にジツクリと見続けていた……。

「……お兄ちゃん？」

対面に座る妹の目が、こちらを蔑むように座っている。

「うん？ どうした？」

何事も無かったかのように美夏に視線を向け直し、中央に置かれたメニューを相手にも見えるようにテーブルの上で広げる竜蔵。

ああ、これは誤魔化す気だなと感じいた美夏は……。

「今のウェイトレスの人って、なんだか垢抜けた感じで綺麗だったよね」

全く持つて心の籠ってない贅辞……：なぜなら、自分の方が数倍美しく愛らしいと確信しているからだ。

「そうだな、多分大学生だろ？ 高校生って感じはしなかったし」

バイトかなと、美夏を見ながら尋ねるが、どうにも様子が可笑しいことに気付く。

何と言つか、表情が読めないのだ……。

機嫌が悪いのか？ と考えた竜蔵は。

「どうした？ いきなり静かになって」

「いいえ、別になってませんよ」

急にこちらから視線を外し、外の景色を覗き始めた美夏……。

ああ、これは何かやっちゃったかなと、長い付き合いで培った経験から竜蔵が察すると。

「水をお持ちいたしました」 ご注文はお決まりでしょうか？」

さきのウェイトレスが、水とお絞りを持つて再び二人の前に現れた。

フワツとしたショートヘアを茶色に染め、おっとりとした目と雰囲気はこちらに安心感を与えてくれて。まるで彼女のために詠た

かのような胸元の開いたフリルのミニスカ制服は、男性客の視線を一身に集めていた。

そして例に漏れず、竜蔵の視線も彼女が独占し始める……。

水やお絞りをテーブルに置く際に前屈みになるため、どうしても強調してしまう張りのある肌が魅力的な大きな胸に、竜蔵は鼻の下を伸ばしてしまう。

「あ、もう少し待ってもらえますか？」

そう言えばとオーダーを催促された事を思い出した竜蔵は、すぐさまメニューの方へと視線を向けなおす。

これはいくら本能的な反応だったとしても、妹の前でだらしない顔は出来ないと判断した竜蔵なりの行動だったのだが……。

「……スケベ」

(うつ……)

もはや頬杖を付きながら、顔は外に向け横目だけでメニューを見ている美夏に、小声で棘のある言葉を突き刺されてしまう竜蔵。

声音的に機嫌も悪ければ、態度もメニューに向けている視線も最悪な妹。

だが内面はというと……。

(ふふふ、お兄ちゃんが私の機嫌を伺ってる……ちょっと悪い気もするけど、私と一緒にいるのに他の女に目を奪われたお兄ちゃんが悪いんだから、もう少し楽しませてもらおうと)

折角の入学祝に主役の機嫌を悪くさせてしまったと罪悪感を感じている兄を、まるで弄ぶかのように楽しんで観察していた。

「じゃあ、俺は明太子の和風パスタで。その……お前はどする？」
しかし、そんな妹の内面など知らない竜蔵が、よそよそしく低姿勢で何をオーダーするか尋ねてくる。

一生懸命にこちらの機嫌を直そうとする兄の様子に改めてグツと来ながらも、美夏は努めて内面を外には出さずに面倒臭そうな態度で「じゃあ祝入学記念メニューと食後デザートでイチゴDXパフェ」と常時ニコやかなウエイトレスに注文した。

ちなみに、美夏が頼んだイチゴDXパフェとは、メニューに表記されている値段が4000を超えている。

「かしこまりました」ではオーダーを再確認しますね 明太子の和風パスタお一つ。祝入学記念メニューとイチゴDXパフェをそれぞれお一つで宜しいでしょうか？」

「はい、お願いします……」

メニューに載っている値段を暗算で合計した竜蔵は（ああ、これで俺の財布から諭吉が一枚旅立つわけだ）と、金は天下の回り物という世の理を悟り始めていた。

その様子を見て、美夏のS心が段々とボルテージを上げていく。（じゅるり……まずいわ。さっきまでの私の空腹を、お兄ちゃんの沈んだ表情が満たしていつてしまっている。これは、品が来るまで持つのかな？）

何度も言うが美夏という妹は、外見は至って平然を装っているが、内面はもはや眼が充血し涎も口端から漏れ出てしまうほどに興奮をしている。

すると、そんな外見だけは空気の悪い二人の様子を眺めていたウエイトレスさんが、何か気まずく思ったのか。二人の仲をフオーにするために口を開いた。

「今日は“彼女”さんの入学式だったんですか？ お二人とも制服みたいですね」

瞬間、美夏の表情が一気に綻ぶ。

当然だ、何せ兄妹でも親子でもなく“学生カップル”だと思われていたのだから。

こちらの空気を和ませようとニコやかに微笑んでいるウエイトレスさんに、美夏は緩みきった幸せそうな笑みを向けた

「はい」 そうなんです」

どう考えても嘘の肯定なのだが、事情を知らないウエイトレスさんにとっては、この反応は真実なのだと錯覚してしまう。

「良いですね、私もそういう入学を祝ってくれる人とか欲しかっ

たなゝ」

これまで営業のために丁寧な物腰だったウエイトレスさんが、妙に砕けた調子で美夏を羨ましがる。

おそらくこれが、女性店員と女性客が砕けあった時の様子なのだろうと、目の前で見ていた竜蔵は考えていたのだが……そうではない。

「あ、いえ。俺とコイツは別に……っ!？」

盛り上がる二人の間に入って、己と美夏が兄妹であると説明しようとした瞬間。

インテリア調の黒いテーブルの下で、竜蔵の右足が美夏のローファースを履いた左足の踵によって踏み潰された。

暗に『お兄ちゃんが悪いんだから、今は黙ってようね』と、目の前でウエイトレスさんと談笑している妹に警告された気分陥る竜蔵。

一瞬抗議の言葉を吐こうとした竜蔵であったが、確かに何が原因か分からないが、悪いのは自分なので、ここは黙ってしようと即座に決心するのであった。

本当に、こういった場面に滅法弱いなど、桐嶋家の男……桐嶋竜蔵は、己が弱点を再確認した。

「美味しいなこれ!」

「うん 確かに美味しいよ! こんな店を“鬼姫”さんが知ってたなんて意外だったなゝ」

二人がテーブルに並べられた、自分のメニューを食したときに思わず出てしまった素直な声。

その中にはどこか棘のある部分もあったが、特に他の女性の名前を態々出した妹、概ね味に関しては良好どころか絶賛の域に達していた。

「明太子と和風って書いてあったから、結構しょっぱいかとも思ってたけど。いい具合に醤油加減とかが効いてて、これは誰でも食えるな」

竜蔵がフォークだけで食っていた明太子の和風パスタは、もともと濃い明太子の色を刻み海苔やネギ・大葉などを散りばめて調和させた盛り付けがされており。茹でる際に塩を少々絡められたパスタの匂いと相まって、非常に食欲をそそる風味を醸し出していた。

そしてそれを食せば、バターと醤油が混ぜられた明太子の味が竜蔵の舌を満たしてくれる。

これは、濃い目の味付けが好きな竜蔵にとっては最高のメニューとなったことであろう。

「へー、ちよつとだけ私のと食べ比べしてみようよ」

そう言う美夏の前には、祝入学記念メニューとして特別に作られた品がテーブルの上に置かれていた。

一つはマグロの焼きカルパッチョという、オリーブ油で軽く焼かれたマグロが薄切りにされ、水菜・リーフレタス・マッシュルームと共に桜の花が書かれたお洒落なお皿に盛り付けられた料理で、横には薄切りにされたレモンが添えられている

そしてもう一つは、なんとまあパスタ専門店だからこそ出来たことなのか？

唐辛子とニンニクを入れたオリーブ油を味付けとして使用した、ちらし寿司の様な色合いのパスタ料理だ。また、パスタにはもともと、軽くマヨネーズを絡ませているために、本当にちらし寿司のご飯の代わりとしてパスタを使った様に見える。

「そうだな」

美夏の提案に、竜蔵はスツと自分が食べていた明太子の和風パスタを前に出す。

しかし、当の美夏はというと……。

「違うよお兄ちゃん」

「へ？」

何が違うのか……いきなり言われた竜蔵は、全く持つて目の前で悪戯に微笑んでいる妹の思惑が理解できていなかった。

だが、そんな竜蔵のキョトンとした表情を見て、美夏が甘えた様な声音で言葉を続けた。

「そのフオークで食べさせて？」

「ぶっ!？」

あゝんと、こちらに身を乗り出して口を開ける美夏に、竜蔵は思わず吹き出してしまう。

「何言つてんだよ……」

「だって、私のフオークにはもうオリーブ油とかマヨネーズだとかが着いちちゃってるし、混ぜるわけにはいかないじゃん明太子とは？

だから早く〜？」

喋るために戻した口を、再びあゝんと開き直す美夏。

さっきまでの不機嫌さはどうしたと呆れる竜蔵を他所に、目の前の妹は本当にウキウキとした表情で、こちらからパスタを口に運んでやるのを待っている。

どうしてこんな事を……と、頭を抱えそうになる竜蔵であったが。「彼氏さん彼氏さん、祝いの席なのですから、ここは“ズドン”と行っちゃいましょう!」

いつの間にいたのか、先程のウエイトレスが小声で囁くように、竜蔵に向けて謎のメールを送ってきていた……更に言えば、決して広くは無い店内でバレバレだというのに、近くにある他の席との仕切りに身を隠しながら、こちらの様子を伺っていた。

何をしてるんだ、この人はと呆れながらウエイトレスが隠れている仕切りに視線を送るが。こちらの様子を影ながらに伺っているウエイトレスは、何故か自信満々な表情で“いったれ”というニュアンスを込めたサムズアップをこちらに送ってきた。

心なしか、真剣な表情の割りに眼が興奮しているようで怖い。

「は・や・く？」

そして視線を正面に戻せば、眼を瞑った状態で来るのを待ってい

る妹の姿が……。

実際、この妹は身内としての鼻屑目に見ても可愛らしい綺麗な妹だ
と思う。

口を開いている事で強調される、オリブ油で艶やかになった唇
や歯並びの良い白い歯。精端な鼻つきや優美な細さと曲線を描いた
眉毛……また彼女が意外と自分のチャームポイントだと良く主張し
ている長い睫毛は、確りとカールを描いている。

これで、一切のメイクを使用していないというのが殊更に驚きだ。
何故メイクを高校生にもなって一切していないのかと言えば……
簡単に言えば、竜蔵が『やっぱ女の人はずっぴんが良いよな』と以
前に漏らしたことがあるのが原因だ。

「ファイトですよ！ 彼氏さん！！」

待機中の妹を困ったように眺めていれば、横から飛び込んでくる
巨乳ウエイトレスの鬱陶しい小声。

その仕切りの影に隠れているウエイトレスに気付いてか、周りの
客達もこちらの様子に気付いたようで……。

『ほら、あそこ見て見て！ 彼氏が照れちゃって初々しいわね』

『あの娘も綺麗な子だけど、彼氏もガタイ良すぎるだろ……何やつ
てる学生なんだ？』

『うわ、あの娘メチャメチャ美人じゃん！ 高校生なのに！』

『なに他の女に目えやってんのよ……後で、分かってるわよね？』
といった具合に、好き勝手に騒ぎ始めていた。

突然周囲からの生暖かい視線を向けられるようになった現状に、
竜蔵は居心地悪いと感じていたが……目の前で楽しそうに待ってい
る妹は、今日入学式だったのだ。

それをどうしても外せない事情で直接見に行けず、せめて祝いだ
けでもと誘った昼食。

更に言えば埋め合わせと謳った手前、これは罪滅ぼしでもあるの
だ……。

（仕方ないか……）

様々な葛藤の末、竜蔵は自身のフォークで明太子の和風パスタを絡めとり始めた。

量は丁度、美夏が一口で食べられる程度のもの……。

普段、絶対にこういった事はやらなかっただけに。竜蔵の行動を目の前で、薄目にしながら見ていた美夏は。

（え！ 嘘！？ 本当にやってくれるのっ！？ ど、どとどうしよう！ おふざけのつもりだったのに、いきなりこんなビッグサプライズにっ！！）

興奮のボルテージが最高潮に上がってしまい、注意しなければ今にも鼻息が荒くなってしまういそうなほど混乱していた。

とはいえ、折角のチャンス……ここは、必ずものにする！！

竜蔵がフォークに絡めすくい上げた、明太子のソースが確りと着けられたパスタの麺が、美夏の開けられた口へとゆっくりと運ばれていく……。

それを気配で感じ取った美夏は、もはや赤面している兄が直接口まで運んでくれるまで一切の動きを見せずに待ち続ける。

徐々に、徐々に近づいてくる美味しそうな匂いは、美夏の嗅覚を刺激して……遂に。

「あむ……」

その開いていた口へと運ばれた。

同時に艶かしく唇を閉じながら、もぐもぐとし始める美夏を赤面している竜蔵は見守る。

「ど、どうだ……？」

妹の口がつけられたフォークなど気にするような性格ではない竜蔵であったが、自身が美味しいといった品が相手にはどう感じるのかは気になる様だ。

すると、尋ねられた美夏は確りと口に含んでいたパスタを食した後。

再び悪戯な笑みを浮かべながら、竜蔵へと口を開いた。

「うん……一口じゃ分からなかったから、もう一回して」

たった一回だとしても、それで味を占めてしまった美夏が再び竜蔵に酷な事を言う……が、当の竜蔵は。

「調子に乗るな。もう絶対にやらないからな……」

必死に赤面している顔を直そうとしながら、極めて不貞腐れたように言い放った。

「えゝヤダ！ もう一回してよゝ！」

「絶対にやらない！ 俺はもう絶対にやらない……！」

甘えた声で抗議する美夏に対して、まるで自らに言い聞かせるように突っぱねる竜蔵。

こうなると、自身の兄は絶対に言うことを聞いてくれないと知っていた美夏は……。

「ぶー……ケチ」

「勝手に言ってるよ」

頬を膨らませながら引つ込む美夏に、視線も合わさずに返す恥かしがり屋な兄。

その様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼女さん彼女さん！」

「うん？」

そのバレバレにも関わらず小声で呼びかけてくるウエイトレスに、実はさつきから存在に気付いていた美夏が不思議そうに振り向くと、今度は彼女さんの番ですよ！ 彼氏さんの口に“ズドン”です！

「！」

「はっ！？ そうか！」

まるで天啓を得たとはかりに衝撃を受ける美夏であったが……。

「それも絶対にやらない！ 絶対にだぞ……！」

「えゝ別に私は気にしないから良いのに……」

先に竜蔵から釘を刺されてしまった。

しかし、この様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼氏さん、それはいくらなんでも根性なしというものですよ……」

普通、そんな可愛い娘から言われたら即決でOKを出す筈ですよ？
だというのに、それは余りにもチキンというものです」

やれやれ、これだから最近の男はと首を振りながら溜息まで吐く
ウエイトレス……。

一体お前は何様だという視線を、竜蔵が思いつきり送っていると。
「こら、仕事をサボって何をやっている！」

ゴスツ！ 「あぁっ！？」

突然、仕切りの影に隠れていたウエイトレスの頭頂部に、厳格そう
な顔をしたダンディズム剥き出しなナイスミドルが後ろから拳骨
を振り落とした。

鈍い音と共に、間抜けたウエイトレスの声が店内に響く。

その様子を、先程まで色々とピンチだった竜蔵と、原因である美
夏が眺めていると。

「申し訳御座いません、うちのウエイトレスがお客様方にご迷惑を
お掛けしたようで……」

巨乳ウエイトレスの頭頂部に拳骨を落した背の高い男性が、美夏
と竜蔵の二人に深々と頭を下げた。

「あ、いえいえ、お氣遣い無く……」

あまりにも突然、客前で拳骨を喰らわせるシーンを見た竜蔵が、
頭を下げた男ではなく拳骨を受けたウエイトレスの方へと視線を向
ける。

ウエイトレスは、痛そうに熱を持った頭頂部を両手で擦りながら
涙目になっていた……不覚にも可愛いと思ってしまったのは内緒だ。
竜蔵の言葉を受けて、深々と頭を下げていた背の高いダンディな
男が、顔をゆつくりと上げていく。

短く整えられた顎鬚に、確りとセットされた白髪混じりのオール
バック。鋭い眼光に筋の通った鼻や、程よい具合にある顔の皺……
それは微妙に骨ばった輪郭や彫りの深い顔の造形も相まって、非常
に味のある男という雰囲気醸し出していた。

またスタイルも良く、身に纏っているウエイトアの衣装が若い従

業員よりも様になっている。

そんなナイスミドルが、顔を上げると同時に竜蔵へと視線を合わせた。

「いえ、そういう訳にもいきません。お客様にご迷惑をお掛けしたのは事実ですので、私から確りと、この娘には言い付けておきますので」

「あゝ別に良いですよ。そちらのウエイトレスさんも、悪気があつてやっていた訳じゃないんですし」

むしろ結果的に見れば、何故か機嫌の悪かった妹の機嫌を直すことが出来たのだ。

お礼を言うのは、逆にコツチのほうだと竜蔵は続けようとしたのだが……。

「お客様のお気遣いは大変嬉しいのですが、何分、このウエイトレスはこれが初めてではないのです」

「あちゃゝ……」

既に痛みでへたり込んでいるウエイトレスに二人で視線を向けると。

「いたたゝ……つて、え？」

痛む頭を押さえながら、ウエイトレスが何を話しているんだといった表情で、竜蔵と背の高い男の顔を交互に見た。

すると、背の高い男が口を開いた。

「お前は先に裏に行っている。話しは後です」

その怒気の含まれた静かな予告に、ウエイトレスは何やら小動物の様に涙目になりながら。

「えゝ！ 私はお客様の仲を更に進展させようと……『裏に行っている』……はあい」

必死に抗議をしようとしたのだが、それはダンディな男の低く魅力的な声の一言で封殺されてしまった。

するとウエイトレスがゆっくりと立ち上がり、しょぼくれた様子でトボトボと裏へと消えていく。

それを見送った後、ダンディな男が再び美夏と竜蔵の二人に向き直った。

「改めて本当に申し訳御座いませんでした。先程申し上げたとおり、確りと私の方から言い聞かせておきますので」

「いえ、そんなに気にしてないですし……むしろ、少しだけ助けてもらった感じもするので」

「ええ、私も楽しかったですし……」

ダンディな男の誠意ある謝罪に、流石にここまで謝られても二人は逆に恐縮してしまう。

「そうですか、では、その言葉も添えて確りと言いつけておきます」

そんな二人の様子を見てか、ダンディな男は突然これまで厳しそ
うだった表情をニツコリと綻ばせた。

美夏と竜蔵は、その途端に雰囲気を変えた男に呆氣に取られる……。

ペースが分からない、まさにこの一言に尽きた。
すると、ダンディな男がそのまま言葉を続ける。

「ご安心ください、あのウェイトレスが真面目にお客様方に対して
接していたことは、確りと理解はしていますので」

そう言ったダンディな男に、竜蔵がホッとした表情で尋ねる。

「じゃあ怒るにしても、そんなに厳しくしないであげてください」

「はっはっは！ 大丈夫です、私は怒るにしても厳しい方ではない
ので」

「お願いします」

「どうぞお任せ下さい」

ペースは独特なものがあるが、話してみれば普通のおじさんだと
感じた竜蔵は。若干男に対して砕けた様子を見せ始めた。

流石に、あまり人見知りをしない竜蔵ではあっても、いきないの
第一印象が怒っていたときのものでは、ちょっとだけ萎縮してしま
うと言うことだ。

そこはプロの格闘家と言っても、まだ子供ということだろうか……。

竜蔵と男が向き合っていると、美夏が何か気になったのか、男に向かつて口を開いた。

「あの、アナタはこの店長さんですか？」

その問いかけに、男は竜蔵から美夏に視線を移しながら。

「はい、ここ『伊藤の空間』の店長は私です。どうして分かったのですか？ 名札などは着けていないのですが……」

「なんとなく雰囲気で聞いただけです。なんだか他の方とは違った感じがしたので」

「ははは、なかなか鋭い恋人さんですね？」

茶化す様な声音で、竜蔵に聞く男。

竜蔵は、それに対して何を当たり前なといった表情で答えた。

「まあ、他の人は若い方ばかりですし」

一見すれば失礼な物言いだが、ダンディな男は特に気にした様子も無かった。

「確かに、ここ学園都市に飲食店を構えているのは若い専門学校の方々か、私の様な枯れた男ぐらいなものですからね」

自虐的ではなく、これは正に本当のことだ。

学園都市に住んでいる人間の中で確かに“大人”という年齢層は決して少なくは無いが、基本都市の年齢層は学生が多いために、現場で働いている者達の殆どはアルバイトの学生が占めているのだ。

それはごく当たり前なことだ、例外といえば大学生や専門学校生達が研究や現場研修として店を構える、または経営するなどといった時の事……または一部の天才と呼ばれる者達がいた時だけだ。

よって、逆に経営者や管理職などといった重役を担うポジションには、やはり“大人”が就く事になるのが当たり前なのだ。

「そんな枯れたなんて、十分姿勢も良いですし若々しいじゃないですか」

お世辞ではなく本音でフォローをする竜蔵。

流石に、目の前で店長が本当のことを喋っていたとしても、自虐の入ったネタを混ぜてきたら若者としてフオローをしなければならぬ。

そのフオローを素直に受け止めたのか、店長の男はコホンと咳払いをした後。

「ありがとうございます。一応こう見えても、昔は武術の方を嗜んでおりましたので」

「へえ、どんな武術なんですか？」

これに食いついたのは再び竜蔵だ。

まあ、格闘家としては当然の反応か……。

しかし、男は武道でも格闘技でもなく“武術”といった。

これに気付かない筈が無い竜蔵の相手を知りたいといった好奇心は、徐々に高まってきていた。

だが、店長の男は興味を持ち始めた竜蔵に対して、どこか恐縮した様に答えた。

「いえいえ、おそらく言ったとしてもマイナー過ぎてご存じないと思いますので……」

「そんな事いわずに、気になるので名前だけでも教えてくださいよ」
若干置き去りになっている美夏が、表情を不機嫌そうにしますが、興味は店長の男へと向いている竜蔵にとっては関係の無い話だ……
後々、また大変な事になりそうで怖いが。

「そうですね……では、恐縮ですが」

「はい、どうぞ」

「伊賀流徒手格闘という、古武術から派生した流派の武術なのですが……ご存知でしょうか？」

先程から促してはいたが。

もちろん、本人自身がマイナーと言っただけあって。

「すみません、やっぱり分からないです」

竜蔵は知る由もなかった様だ。

しかし、店長の男は結局知らなかった竜蔵に対して、別に気にし

た様子も見せず。

「いえいえ、これを聞いた他の皆さんも同じ反応をしていましたので、別に謝ることもありませんよ」

はっはっはと笑いながら、竜蔵に気にするなと言う店長の男。

すると、その店長の男が、今気付いたかのように、竜蔵に向けて小声で声を発した。

「そつえば、間違っていたのなら失礼なのですが……もしかして格闘家の桐嶋竜蔵さんですよ？」

周りに聞こえない様に気遣いをしているのか、耳打ち出来るぐらいに近い距離で尋ねられた竜蔵。

しかし、別に周りにバレようと気にするタイプでない竜蔵は、特に間も置かずに答えを返した。

「はい、そうですよ。良く自分の顔なんて覚えてましたね？」

「やはりそうでしたか……いえ、顔もそうなのですが。やはり肉体の方で気付いたのと、以前他の女性の方といらっしやった時にお見かけた時がありましたので」

間違えなくて良かったというより、本当に嬉しそうに微笑む店長の男。

それに“他の女性の方”というワードで気まずそうな表情をした竜蔵。

「はは、あの時ですか」

だが、本人も店長の男も、そのワードには特には触れずに当時の事を思い出していた。

と、ここで店長の男が、なにやら突然気まずそうにし始める……。

何となく仕草で店長の様子が可笑しいのを察知した竜蔵は。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ。その〴〵大変図々しいお願いを、桐嶋さんに申し上げたのですが……」

「はい、なんでしよう？」

妙に畏まった口調に、竜蔵は不思議そうにしていると。

「うちの店……というより、学園都市の大半の飲食店には外の飲食店とは違って、その……いわゆる、有名人のサイン色紙というものが飾られてないのです」

ここまで聞けば、このダンディな店長が何を言いたいのか竜蔵でも分かるというものだ。

「ああ、なるほど、そういう事ですか。良いですよ別に？」

「本当ですか!？」

竜蔵の許可を得た瞬間、店長の表情がパツと明るくなる。

年齢も中年を過ぎていそうな感じがする渋いおじさんではあるが、こういう時は誰だつて子供の様な笑顔をするものだ。

もちろん、相手がおじさんといえども、ここまで喜んでくれれば竜蔵も悪い気はしない。

というより、サインを身内以外から求められただけで、かなり嬉しいものがあるのだが……。

「ええ全然構わないですよ」

そんなこんな嬉しさからか、竜蔵が上機嫌で微笑みながら店長の男の再確認に返事を返す。

すると店長の男は。

「なら、今すぐに色紙とペンを持ってきますので。料理をぐゅっくり堪能しながらお待ち下さいね!」

「は、はあ……」

目の色を変え、異常なまでに張り切った様子の店長の男に、上機嫌だった竜蔵の機嫌が一瞬で引き気味にされる……。

しかし、そんな竜蔵などお構い無しに、許可を得た店長はそくさと裏へと消えていく。

「サイン書くんだ」

その兄と店長の男のやり取りを、かなり置いてけぼりな状態で眺めていた美夏が意外そうに言葉を吐いた。

妹の言葉に、若干面を喰らった状態の竜蔵が視線を向けなおすと。「まあ、断る理由も無いしな」

「ふ〜ん……妹の入学祝いの最中なのに？ 頼まれたからって書いて書いちゃうんだ。入学祝いの最中の妹を置いてけぼりにしたの？」

やはり気に障っていたのか、棘のある口調で美夏が竜蔵を再び攻め始める。

これにまた何も言えなくなる竜蔵……本当に、こういった事には滅法弱いようであった。

その様子を見て、美夏が今日何度目か分からない悪戯な笑みを浮かべると。

「悪いと思ってるなら、罰として、食後に来るイチゴDXパフェと一緒に食べることに」

という、また周囲から生暖かい視線を向けられそうな事を言い始めた。

だがまあ、この程度なら、さっきの恥かしさと比べればと腹を括るうとした矢先……。

「もちろん“同じスプーン”でね」

竜蔵はこの瞬間、人生で初めて妹に本気で頭を下げるのであった。

えらい目に合った……。

『伊藤の空間』から会計を済ませて出てきた竜蔵が、一番最初に思い浮かべた言葉だ。

あの後、イチゴDXパフェを同じスプーンで食べるという恥辱の極みを味わわずには済んだのだが。

またいつの間にかに復帰していたのか、あの巨乳ウェイトレスが再び美夏と今度は店長まで煽りだし。まさかまさかの“店内公開食べ合わせいっこ？”という、もし知人が見ていたのなら、そいつを撲殺しなくてはなくなるイベントを強制されたのだ。

店内では生暖かい視線を送っていた他の客たちも、なぜかいつの

間にか美夏と巨乳ウエイトレスの味方となり、こちらを煽る始末……そして、更に最悪だったのが、食べさせ終わったあと、皆から謎の拍手や指笛を貰う最中起きた、店長の『サインくれよ』のコール。もともと竜蔵の外見を見て、もしかしたらと思っていた客もいたようで、その時は本当に恥かしくて死ねると思ったぐらいであった……。

これがもし、妹などではなく本当の彼女だったのならと考える竜蔵。

しかし、それはそれでかなり恥かしいものがあると気付く竜蔵。どっちにしたって、恥をかくのは変わらないと気付いた竜蔵。救われない……本当に救われない。

また、この時の竜蔵は知る由も無いが、店長が悪乗りして取った美夏とのツーショット写真が。あの店に飾られることとなった竜蔵のサインと共に飾られているという事が、近いうちに起こる事になる。

まあ当分、竜蔵は『伊藤の空間』という敵か味方が分からない空間には近づかないと思うが。

そんなこんなで現在、お腹を満たした二人は再び繁華街を練り歩いている。

目的は入学祝のプレゼント……。

竜蔵はとりあえずマグカップでも買ってやろうかと考えていたようだが、それは美夏の『ヤダ、ペアリングが良い』という理不尽な要求により却下された。

だが流石に妹とペアリングなどするつもりはない竜蔵は、店にいた瞬間に自分が気に入ったアクセサリを購入して、有無も言わずに手渡す算段を企てていた。

すると、そんな時であった……。

ドン 「きゃっ！」

さっきまでの赤茶色の地面ではなく、白い煉瓦が敷き詰められた人通りの多い道を二人で歩いていると。突然、竜蔵の左胸に、丸眼鏡と三つ編みお下げが特徴的な昭和チックな少女がぶつかってきた。「あ、おい！」

鍛え上げられた厚い胸板にぶつかり、弾かれるように転びそうになる少女の手を、竜蔵が咄嗟の反応で伸ばした左手で掴み取る。

それにより、少女の華奢な体が地面に倒れるという事態は回避されたようだ。

「あ、ありがとうございます……」

ぶつかって倒れそうになった事に相当驚いたのか？

少女が狼狽しているかのように、手を取り引っ張ってくれた竜蔵を見上げる。だが、一応お礼は言えるようであった。

「いや、こつちもすみません……って、あれ？」

転びそうになった少女の手を取ったまま、竜蔵が何かに気付いたようだ。

（やばい、同じ制服だ……）

そう、なんとたまたま妹の入学祝いのために訪れていた繁華街で、同じ学校の生徒とまさかの遭遇を果たしてしまったのだ。

更に言えば、この丸眼鏡に三つ編みお下げが特徴的な少女を、竜蔵はどこかで見たことがある……。

それがどこかと思い出そうとしていると。

「あの、すみません！ 私、急いでますので！」

「あ、ちよつと！」

突然、少女が焦った雰囲気で竜蔵の手を振り払い、そのままどこかへと走り去ってしまった。

その後姿を見送った竜蔵は。

（なんだ？ てか、外見の割りに足が速えな）

と、脳内でクエッションマークを浮かべながら、そんな事を呟いていた。

「なに？　いまの人……同じ学校だったみたいだけど、態度悪過ぎない？」

これまでの様子を隣で黙って見ていた美夏が、悪態を付くように先の少女に対して嫌悪感を示す。

まあ、この妹の場合、兄に手を合法的に握られた事に対して嫉妬を覚えているだけなのだが。

「さあ？　まあ怪我が無かっただけでも良いんじゃない？」

機嫌の悪い美夏は流しながら、竜蔵は再び視線を歩いている方向へと戻す。

するとそこで、なにやら違和感を感じた。

正確に言えば、ブレザーの左胸にある二橋学園の校章が刺繍された胸ポケットに、何か紙切れの様なものが入っているのだ。

それを、めげずに腕を組もうとしている美夏をあしらいながら、右の手で取り出し広げてみると。

「ッ!？」

「うん？　どうしたの、お兄ちゃん？」

紙切れの開かれた場所を見た瞬間に表情を一変させた竜蔵に、美夏がようやく気付いたのか、不思議そうな声音で尋ねてくる……。

だが、竜蔵の表情の変化は、すぐに収まってしまったようだ。

「いや、なんでもない……とりあえず急ちあきごう。下手したら“千秋”がへそを曲げる」

「え？　あ、待つてよお兄ちゃん」

突然先を急ぐために、歩くペースを上げた兄に、美夏が“そんな事無いのにな”と思いつながらも付いていく……。

今さっき竜蔵が開いた紙切れは、既に左の胸ポケットという元の場所に収められている。

その紙切れに書かれていた内容とは……。

『明日の放課後、学園の屋上で待っています。来なかった場合、
“今日起こったことを包み隠さずに、新聞部の方々へリークします”』。

もちろん“執行部”の話も含めて……」

同じ執行部の“忍者”より、待ってますよ」

『伊藤の空間』（後書き）

絵を描こうとしたけど無理でした。

幕間 尖った青春の変化（前書き）

入学式後に起きた事件の話です。

幕間 尖った青春の変化

目が覚めたのは、夕日が殆ど沈んだ時間だった……。

俺が仰ぐ天井には、おそらく取り替えたばかりの蛍光灯の明かりが眩いばかりの白光を放っていた。

その光に目を細めつつも、俺はある事に気付く……。

（ここ、どこだ……？）

何故だか朦朧とする意識の中で、突然襲ってきた顔面の痛み……心なしか、首の方にも鞭打ちを起こしたときの様な痛みが走っている。

俺は、この痛みに堪らず、天井を仰いでいた状態から起き上がるうとするも。

「あ……」

起き上がるうとした途中で、目の前の視界がぼんやりと霞がかり、俺の上半身を再び寝た覚えの無い、純白のシートがしかれたベットの引き戻していく……いや、落ちていったといった方が正しいのかもしれない。

ギシ と、ベットのスプリングが、衝撃を吸収する音が聞こえた。

すると、ベットの周りを囲んでいたカーテンの向こう側で、なにやらシルエツ的にスタイルの良い女が、座っていた椅子から立ち上がるのが見えた。

そしてそのまま、俺が寝ているベットと外を仕切っているカーテンが無遠慮に開けられる。

「あら、ようやくお目覚めね。おはようって時間じゃないのは分かるかな？」

カーテンの向こう側から現れたのは、白衣を袖を通さずに肩に羽織った、一人の落ち着いた雰囲気を持つ女だった。

お洒落というよりも邪魔にならないように、緑がかった黒髪を頂
辺りで一つに括り。緩やかな曲線を描いた細眉や、口紅が薄く塗ら
れた唇……そしてその、柔らかそうな唇の下には小さなホクロが彼
女の大人な魅力を不思議と引き立たせていた。

また、小顔を強調するかのような八頭身に纏った、胸元の開いた
ピンクのワイシャツや、ストッキングの上に履かれた黒いタイトス
カートは、何故だか意識を朦朧とさせる俺にすら、性的な興奮を覚
えさせる。

「あ、あう……」

そんな美女といつても過言ではない女に、言葉を帰そうとするが
上手く口が動いてくれない……それに血の味もする。

多分、口の何箇所かを切ってしまっているのであろう。

「無理しないの。君は脳震盪を起こして運ばれてきたんだから、大
人しくしてなさい」

舌も口も言うことの聞いてくれない俺に、白衣の女が呆れた様に
前髪を掻き揚げる。

露となった毛穴一つ見えなさそうな額は、多分俺好みなんだが……
……いかんせん、視界がまだ霞がかっているから殆ど確認できない。

正直、今の状況を全く理解できないために、俺は仕方なく女の言
うことを聞く事にした。

「そう、保健室に一人で来れなかった人は、大人しく寝てるのが一
番なんだから」

いや、そこは病院に運んだ方が良いんじゃないかと思うが、ここ
は黙っておくのが吉だろう。

大人しく身を寝ているベットに預けると、後頭部に良く日干しさ
れた枕の暖かい感触が伝わってきた。

このまま目を瞑れば、また一眠りできそうな心地よさだ。

「あ、あのう……」

そうすると、喋ることだけに意識が集中出来たのか、ようやくま
ともな言葉を発せられるようになる……まあ、まだこれが限界とい

う所なのだが。

「うん？ どうしたのかな……」って、聞きたいところだけど」

俺の搾り出すように出された言葉に、女はアーモンド形の目を優しくに細めながら。

「今は本当に無理はしないこと、喋るのが難しいのなら黙って寝て
ること。用件なら、私がちゃんと伝えてあげるから」

手のかかる子供をあやす様な声音で、暗に何もするなと言ってきた。

だが確かに、今の俺は何故か起き上がることも喋ることも、頭が
クラクラしてまともに出来ない。

すると、ベットの前に立っている女は。履いているサンダル音を
ゆったりとした歩調で鳴らしながら、俺が寝ているベットの横に
移動した。

「君をここに運んできてくれた先輩から、預かっている物があるの」
そう言って、女はベットの傍に置いてあった丸椅子の上にある、
一枚の紙を手に取り、俺に差し出した。

俺は、その差し出された一枚の紙を、なんとか動いた右手で受け
取る……。

「その先輩からは、君が起きたら直ぐに読ませてくれって頼まれて
たからね。ちゃんと渡したわよ？」

頼まれたことを完了したぞと、確認を取ってくる女に、俺は特に
何も言わずに。右手に持った紙に書かれた文章に目をやった。

相変わらず、モヤのかかった様に見づらい視界だったが、まあ何
とか文字は読み取ることが出来た。

その紙に書かれた文面は……。

『来るか来ないかは、お前が決めるんだぞ？』

たった、これだけの文章に記された言葉 だけど俺は。

この時だけは不思議と、朦朧とする意識の中で、ある事だけはハ

ツキリと思い出せていた。

それは、空いている左手に残っている、とても力強い感触……。手を両側から強い力で圧迫されたような、そんな感触……。

俺はここまで感じて、ようやく何故こんな所で寝ていたのかを思い出した。

退屈な入学式……多目的ホールの壇上で、新入生代表として何かを喋っている、レベルの高い女子と。それに負けず劣らずな容姿をした生徒会長とかいう先輩以外に、何の興味も持てない入学式。

それを証明するかのように、男……御堂勇輝（みどうゆうき）は「あゝあゝ」などという大欠伸を、惜しげもなく座り心地の良いシートで披露していた。席は多目的ホールの生徒側の、丁度真ん中辺り……周りに座る者達は。

その御堂のふんぞり返って座っている、ふてぶてしい態度に嫌悪感を抱きつつも、何も言えないでいた。

（マジでつまんね……てか、先公も何も注意しねえのかよ）
あまり綺麗とはいえない、明らかに染めたと分かるボサボサな金髪頭。

別に、この程度なら　二橋学園では珍しいが　あま
り珍しくも無い荒れた生徒なのだが。

男の身長は185cmと、高一になりたてと言っ割には長身で、しかも新調された制服越しにでも分かる程度には、程よく肉付けされた体格をしていた。

そのせいか、周りにいる生徒達は皆、入学早々に厄介ごとに巻き込まれたくないがために、この態度のデカイ男子生徒を無視していた。

（ホント、これなら早く目当ての奴と喧嘩して、退学貰ったほうが良いかもしれねえな）

顔こそは整っていて、輪郭も細い青年なのだが。いかんせん、鋭い眼光と細い眉毛を携えた状態で無表情なために、御堂が何を考えているかなど周囲には到底理解できない事であった。

故に、余計不気味に感じる周囲の生徒達。

それを見て、更に退屈な気分になる御堂……。

御堂勇輝にとって、二橋学園の入学式は。

こういった調子で、そのまま終わりを迎えてしまった。

入学式も終わり、周りの進入生達が自分の新しい教室へと向かう最中。

御堂だけは、多目的ホールの席に腰掛けたまま、微動だにしないまま……。

それを不審に思った教職員が、男数人構成で御堂のもとへと近寄ってくる。

「おい、もう入学式は終わったぞ！ 教室に戻れ！」

「私は終始、君を見ていたが。なんだあの態度は！？ 他の生徒達にはもちろん、ここに居る全員に不快な思いをさせていたんだぞ！ 分かってるのか！？」

口々に、やかましい説教を捲くし立てる数人の教職員達……。

だが御堂は、全く持って聞く耳を持たない。

「おい、なめてんのか？」

その態度に、血の気の多い一人の男性教職員が遂に我慢の限界を向かえ、御堂の胸倉を掴み、捻り挙げる。

男性教職員は、武道系の出身だったのか？

185cmもある座っている状態の御堂を、軽々と片手で持ち上げてしまった。

だが、それでも無表情な御堂……。

それが、再び癪に障ったのか、男性教職員が声を張り上げようとすると。

「いいんですか？ 俺ん家、ここの学園の理事長と仲が良くいんですけど？」

すると、声を張り上げようとしていた男性教職員の表情がピタリと止まった……。

それはそうだ、自分の雇い主と仲の良い家の息子かもしれない生徒に、もしかしたら勢いで行っていたかもしれないのだから。

しかし、ここで引いてしまったら、この生徒は一生自分の事を軽く見ると考えた男性教職員は。もう関係ないとばかりに、再び声を張り上げ『どうかなさいましたか？ 先生方？』られなかった。

突然聞こえてきた、澄んだ女性の声に皆が振り向けば……そこに、豊かな栗色の長髪と、いつもニコやかにしている朗らかな美顔が特徴的な女生徒、二橋姫樹^{ふたつばしひめき}生徒会長の姿があった。

その存在感は、一触即発な雰囲気だった、この現場を、一瞬で治められてしまいそう……そんな、不思議な安心感を持たせるものがあった。

「姫樹か、いやなに、ただ久しぶりに生意気な新生が入ってきただけだ」

御堂の襟首を片手で捻り挙げた体勢のまま、体格の良い男性教職員は、後ろにいる姫樹に、そう告げた。

だが、その言葉に姫樹は……。

「この学園は……というより、第一区から三区までにある殆どの学舎は皆。生徒自身が殆どの自治管理を任されています」

「うん？ 何が言いたいんだ？」

突然、学園の基本方針を口に出し始めた姫樹に、男性教職員は頭に“？”を浮かべる。

しかし姫樹は、そんな教職員など無視して話を続ける。

「ですので、こういった些細なトラブルも学園の生徒が解決すべきなのです……これは、学園のほぼ全ての懸案事項、または生徒間に存在する問題の解決までに至るまでの決定権が生徒会長である私や、それを支えてくれる他のメンバーや委員会にある事からも領け

ることです」

表情こそは朗らかな微笑みを浮かべてはいるが、完全に教職員達に対して遠まわしに『さがれ』と言っている様に思える、姫樹の言葉。

本来なら教職員達は、この姫樹の言葉にも反応しなければならぬのだが……。

「……そうか、なら勝手にしろ」

そう言っ、男性教職員は簡単に御堂を下ろしてしまった。

するとそのまま、ソロソロと散っていく教職員達。

まるで、言葉通りに皆“勝手にしろ”とでも言っているかのようになり具合に、当事者である御堂も面を喰らってしまう。

そんな御堂の、無表情からあまり変わっていない驚きの顔を見ながら、姫樹が口を開く。

「それで？　まずは何故、アナタは終始同じ態度を取っていたのか？　それを聞きたいのだけれど……話してくれるかしら？」

凹凸のあるスタイルや、落ち着いた雰囲気のある顔は、とても大人びているのに。なぜか子供っぽい仕草で、コテンと困った表情をしながら首を傾げる姫樹。

その仕草は彼女の、のほほんとした雰囲気も相まって、非常に男心を擽るものがあつたのだが。

今、たとえ他人からくだらないと言われても、明確な目的がある者にとつては、何の感情の起伏も起きなかった。

「……別に、俺は入学式に来たわけじゃねえから」

「あら？　なら、何でここに居るの？」

ポケットに両手をつっ込みながら、面倒臭そうに言う御堂に、姫樹が訪ねる。

そりゃ高校の入学式なのに、それに来たわけじゃないと言われれば、誰だつて疑問に思うことだろう。

もしかしたら、余程の理由があるのかもしれない。

だが、出てきた答えは……。

「アンタ、生徒会長なんだろう？　しかも、ここでは結構偉い感じだし」

「ええ、一応去年から任されているわ。それがどうしたの？」

「偉いんだったら、ここに一人ぐらい誰か連れて来れるんだろ？」

「……話が見えないわ。もっと具体的に言ってくれないと」

右頬に掌を添えながら、眉を顰める姫樹……

「俺が言いてえのは、ここで一番喧嘩の強い奴を連れて来いって事だ」

その言葉で、ようやく理解できたのか。

姫樹が胸中で（あゝなるほどね）と手を叩く。

目の前の様な風貌をした、血気盛んな若者が。この学園で一番強い奴を連れて来いと言ったら、彼しかないだろうと目星が付いたからだ。

実際、姫樹自身は本当に彼が“この学園で一番なのかを断言できない”が……おそらく、これで良いのだろうと判断が出来た。

故に。

「そういう事なら、私に任せて頂戴」

「……は？」

なにやら楽しそうに微笑みながら、やたら乗り気な様子の生徒会長に。

まさか要求が通ると思ってはいなかった御堂が、間抜けた声を漏らしてしまう。

本来なら、このまま居座ったり、必要なら近くの先公が男子生徒をぶん殴って騒ぎを起こし、目的の人物を呼び込もうとしていたのだが……。

どうやら、目の前の抜けていそうな割には腹黒そうな生徒会長のお陰で、余計な手間は省けたようであった。

「アナタが呼んで来て欲しいと言っている子を、私が連れてきてあげます。そうすれば、アナタも満足が行くのでしょうか？」

「……ああ」

御堂の返事を聞くと、姫樹の微笑みが一層明るさを増す……。

それは見るものが見れば、本当に嬉しくて微笑んだのか？ もしくは何か企みが出来て微笑んでいるのか？ どちらか判断出来るものだった。

「じゃあ、皆。後の片付けは、手伝いの生徒や先生方にお任せして、私達は明日の健康診断や奨学金申請などに必要な書類を確認してきましょう」

姫樹はそう言っ、ここ多目的ホールに施されていた入学式専用の装飾などを片付けている、他の生徒会メンバーに声をかけた。すると、生徒会のメンバー達は、いま手に着けていた作業に確りと折り合いをつけてから、ゾロゾロと何事も無かったかのような足取りで、姫樹の後ろに控え始めた。

それを確認すると、姫樹は改めてポケットに両手を突っ込んでいる御堂に視線を向ける。

「必ずアナタが呼んで来て欲しいと思っている子を連れてくるから、ちゃんと待っているように。分かった？」

まるで親気取りの物言いに、御堂は鬱陶しそうな表情を露にするも、一応の同意を示すために「ああ」とだけ返事を帰した。

姫樹は、それをニツコリと微笑んだ後に確認すると。後ろに控えていた生徒会メンバーを引き連れて、多目的ホールを後にしようとする……。

だが、多目的ホールの出入り口である、現在は開けっ放しになっている両開きのドアの前で。姫樹は、あまり高くは無い階段の段差を上ることで揺らしていた、緩やかなウェーブのかかった栗色の豊かな髪をピタリと止めながら、後ろを振り返った。

視線を向けたのは、やはり多目的ホールの中央で、いまだこちらを鋭い眼光で眺めている御堂にだ。

目と目が、自然と合わさる……。

しかし、振り返った姫樹と目を合わせた御堂は、無意識の内に、一筋の冷や汗を右頬に流していた。

微笑んでいる……それも、不気味に、不敵に、大胆に。

更に言えば、さっきまで閉じていた“ブレッシャー 紅い瞳”が、妙な圧力を御堂に与えていた。

そして、何かなんだか分からないといったふうに物怖じする御堂に、底冷えするぐらいに美しくも冷たい微笑みを向けながら、姫樹がゆつくりと口を開いた。

「一応、新人生のアナタには忠告をしておくけど……」

さっきまでと変わらぬ、決して声は張っていない和やかな声音……だが、不思議と距離の開いた御堂の耳には届いていた。

「殺られる前に殺ること。それがアナタが、これから私が連れてくるであろう人物に対して、唯一出来る事……分かったかしら？」

彼女の薄く開かれた瞼の先にある眼を見れば、これがハッターでも過大された表現でもないことぐらい、中学上りの御堂でも理解できる……。

それだけ、これから連れて来ると言っている奴に、相当な自信が有るのだろう。

なら、俺の目当ての奴が来る可能性が一段と高まった。

故に引かない……今さっきまでしていた物怖じも、鳴りを潜めた。「上等だよ」

何故なら、もともと“そいつ”と喧嘩をするために、こんな退屈なところに来たのだから……。

多目的ホールの中心で待つこと数十分……。

別段、御堂自身は待つことに苦痛は感じない。

むしろ今は、目当ての奴が来ることを、今か今かと待ち侘びているぐらいなのだ。

苦痛なんて、感じるはずも無い……。

多目的ホールの中央の席に座りながら、周囲を見渡せば。既に殆

どの後片付けが終わり、仕事の終わった奴から多目的ホールを出て行くといった所まで進んでいた。
すると、そんな時であった。

「あ、桐嶋」

この一言で、目的の人物を待っていた御堂にとっては十分であった。

聞こえてきたのは、多目的ホールの出入り口付近。

中央の席に座っていた御堂は、まるで獲物を目の前でお預けされ続けた狼の様に、席から立ち上がり、切れ長の鋭い眼光を、多目的ホールの出入り口へと向けた。

普段、何を考えているのか分からない無気力な表情をしている彼にとつて、非常に珍しい挙動と顔つきであった。

「なんだ？ 会長の言ってたことと違うな」

多目的ホールに堂々と入ってきた男は、こちらに向けられる御堂の凄みの効いたガン付けを楽しそうに受け止めながら。思っていた状況と違うことに、多少残念な声音で呟いた。

「会長の言ってたことって？」

最初に多目的ホールへと入ってきた男に気付いた男子生徒が、不思議そうに疑問を投げかける。

すると、男は。

「いや、ここで入学早々暴れてる奴がいるって聞いたから、止めてくれて頼まれて来たんだけど……静かなもんだね」

「まあ、実際さっきまで暴れる寸前だったけどな……」

睨み付けてくる御堂に対して、わざわざ真っ向から視線をぶつける男は。そう相手を挑発するかのような態度で、最初に入ってきたのに気付いた男子生徒と会話をしていた。

だが、それも、もう終わり……。

「帰る途中だったのか？」

「ああ、入学式の片付けも、俺の分は終わったしな。だけどまあ、ちよっと残る事にするわ」

「悪いね、帰るの邪魔して」

「そうでもないだろ？　だって、合法的にプロの喧嘩を見られるんだからさ」

男と話をしていた男子生徒は、どうやら中々に血の気の多い部類の人間だったようだ。

しかし、竜蔵の表情には、その男子生徒の期待には答えられないといった色が伺えた。

別に、勝つ自信が無いというわけではない……。

「喧嘩になれば良いんだけどね……多分、無理だろ」

ただ単に、相手の実力が、自分には到底及ぶものではないと確信していたから。

それだけ答えると、竜蔵は期待の眼差しで、こちらを見ている男子生徒から離れていく。

一步……また一步が、確実に中央の通路に既に出てきていた御堂の前へと近づいていた。

近づいてくる男……目当ての男であった、桐嶋竜蔵が近づいてくる度に。

御堂には、嫌にでも気づく事があった。

（なんだ……これ）

背丈自体は、御堂のそれよりも10？以上低いことが分かる。だが、そんな背丈のハンデなぞ、帳消しにするどころか相手に“自分よりも大きい”と錯覚させるほどの肉体が、ブレザーの制服越しですら存在を強調させていた。

厚く、そして太い……傍目からは、理想的な逆三角形を描いた均整の取れている肉体に見えても、よく見れば、外に露出している筋ばった首の筋肉や、もはや拳の形状が鈍器の様に膨れ上がった手が、桐嶋竜蔵という男の計り知れなさを物語っている。

どうすれば勝てるのか？

などという次元ではなく、どうすれば無事に済ませられるのかと、考えることしか出来なくなる。

御堂は、この時。

己がこれまで通ってきた、不良^{ヤンキー}たちの世界が、どれだけ狭かったのかを知る。

TVは見ない方だ……だから、コイツが今まで、どんな奴らと戦ってきたのなんて知る由も無い。

だが、これだけは分かる。

俺らがいる不良の世界での圧力^{プレッシャー}が赤子に見えるぐらいに、奴らがいる格闘家の世界の圧力^{プレッシャー}は甘くは無く、ただ相対せただけで凄いことなのだという事が。

「どうした新人生？ 俺に何かあるんだろ？」

こちらの内心を見抜いているのか、小馬鹿にした笑みを浮かべながら、俺に問いかけてくる。

既に俺の背中は、嫌な汗でワイシャツを濡らしている……。

目線は立っている場所の段差が違うとはいえ、背の低い奴を見る高さ、さほど変わりはない。

しかし、奴が段差を降りるために肩を揺らしながら歩いてくる度に、その大きさを見誤りそうになる。

そして、遂に奴と俺の距離が、大体、二・三步で手が届く間合いとなる。

御堂は、この相手と距離を認識した瞬間に、これから始める事に對しての気構えを一気に組み直した。

瞬間、さっきまでの何もされていないのに押し込まれていた空気は一掃されるが、感じる圧力^{プレッシャー}に変化は無い。

むしろ、間合いを認識してしまった事によって、相手が何から出てくるのかという考えが浮かぶようになってしまい、余計に圧力を感じる。

すると、一向に口を開かない御堂に痺れを切らしたのか？

竜蔵が、また一歩間合いを歩くだけで詰め、そこで立ち止まった。

「おい？ 黙ってちゃ分からないだろ。何か言おうぜ、なあ？」

相も変わらず、こちらを挑発するかのような喧嘩腰。

やっている事自体は、その辺の同年代と変わらない……だが、こ

ちらを挑発するだけの説得力が、目の前の男にはあった。

近くで見れば、頑丈そうな顔立ちをしている割にパーツは整っており、眼はギラギラと好戦的な雰囲気醸し出しながら、こちらを見つめている。

多分、こういった魅力は女よりも男のほうが分かりやすいのだろうと、御堂は無意識のうちに考えていた。

だが、挑発してくる相手に、いつまでも啖呵も切らずに立ち尽くしているなど、今まで過ごしてきた世界では有りえない事……中には、啖呵すら切らずに、無言で殴りかかってくる“キレてる”奴もいることにはいるが、生憎、御堂はそういうタイプではない。

「やっぱり、アンタが来たか……」

もともと、竜蔵自身が目的であったと、暗に語る口調。

それに、当の本人は眉間に皺を寄せ、疑問気に御堂を見る。

「やっぱり来たか……？ ああ、なるほどな」

突然、何かに納得したかのようにしている竜蔵を見て、今度は御堂が分からないといった表情をする。

しかし、これに竜蔵は答えてはくれない……当たり前だ、いくら疑問に感じたからといって、御堂が問いたださずとはしなかったからだ。

まあ、竜蔵がそういった雰囲気を出したのは。ただ単に、会長である姫樹の言葉に、若干の“嘘”が含まれていたことに気付いただけなのだが。

すると、今のやり取りで、相手が会話を続ける気が無いと理解した竜蔵の纏う空気がガラリと変わる。

「さて、“やる”んだろ？ 来いよ」

何の脈絡も無い誘い……これが、もしも異性との会話なら少々魅惑的な意味が含まれているのであろうが、生憎と相手は野郎だ。

しかも見た目以上に、喧嘩が好きに見える。

なら、竜蔵が発した言葉の意味を正しく理解出来たのであろう。

二人の醸し出す空気が、一気に周囲にすらも危機感を煽るものへ

と様変わりする。

これから何が起きるのか？ 二人は何をしようとしているのか？
それが、今からこの光景を見る者だとしても理解できる空気。
もう、喋る口も、ガンの付け合いも必要ない。
ただ、殴り合うのみ

最初に突っかけたのは、御堂……いや、意外にも竜蔵の方からであつた。

来いよと言つたにも関わらず、そんなものは関係ないと。御堂が重心を前に傾けると同時に、段差から流れるように降り、間合いを詰めた竜蔵。

（速ッ！）

自身が地面を蹴り出すよりも早く、間合いを完璧に詰めて来た相手に、御堂が驚嘆を覚えながら表情を強張らせる。

相手は重心こそ、安定させるために腰を落しているが。本質を見れば、後ろ足である右足の踵は地面には着いておらず、膝はバネを何時でも利かせられるように、脱力して少しだけ曲げられているために、フットワークの軽そうな足の構えを取っていた。

だが、問題はそこではなく。

御堂が目についたのは、完全に両腕を下ろした状態の無防備で、
間合いを詰めてきたことにある。

それを、驚きはしたが逃す御堂ではない。

伊達に喧嘩馴れしていない御堂は、突っ込んできた竜蔵の、意図的にがら空きとなっている顔面に向けて、右腕を少しだけ振りかぶった後に出した、ストレートとも言えない、荒っぽい突きを放つ。
身長差10？以上あるために、上から振り落とされる要領で、突っ込んできた竜蔵の顔面に迫る、御堂の右拳……だが、それは竜蔵が目線は相手に固定したまま、上半身だけを前に屈めるだけで空を切ることとなる。

ダッキング、ボクシングの基本技術の一つだ。

ただただ、全身の力と体重を素人なりのやり方で乗せた御堂のオバーフック気味の右拳は、空を切った途端。御堂もろとも、重心を少しだけ前に引っ張り出してしまふ。

体勢が、出したパンチに持ってかれたのだ。

これは当然の事で、大抵の突きというのは、前足である足を確りと置くことにより。相手に効かせるために突いた際、どうしても前へと傾いてしまう重心を抑えることが出来るのだ。

今の御堂には、それが無く。ただ突っ込んできた相手を迎え撃つために殴ろうとしてしまったために、重心を前に傾けてしまったのだ。

一般人同士なら、勢いだけで大抵は勝てるために、それで良いのかも知れない……だが、相手が悪すぎた。

こちらに空振った勢いそのままに、御堂が前に出てくる。

見る限り、次に御堂が打撃を放つ場合は、一旦間合いを取らないと上手く打てそうに無い。

瞬間、ダッキング状態だった竜蔵の上半身が跳ね上がる。

同時に、御堂の首下を通り抜け、後頭部の所で竜蔵の両手がクラツチされた。

拙い……と感じた瞬間、御堂が背中の中全背筋群と首の筋肉を総動員させて、背筋を反らそうとするが。

ガクン と、俄かには信じられない程の力で、御堂の上半身が一瞬のうちに下へと引き付けられてしまふ。

紺色のカーペットが、御堂の視界に移る。

頭を完全に下げられた……。

気付いた瞬間に、御堂が顔を守ろうと両手を動かすが。

グシャッ！！

それよりも先に、竜蔵の右膝が、御堂の顔面……正に真正面に突き刺さった。

「きゃッ!?」「うわッ!」「エグ!」

あまりの生々しい打撃音に、周囲に居た生徒達が思わず声を出してしまう。

御堂の視点からは分からなかったが、竜蔵がやったのは、ただ単に首相撲からの上段右膝という、至ってシンプルな技。

しかし、その首相撲は竜蔵の太い両腕と、鍛え上げられた背筋力により、相手の顔を無理やりにも引き込むなどといった強引な手段を取ることを可能とし。右膝に至っては、地面を爪先まで使って蹴り出し、腰を前に突き出した、全身を上手く使った容赦の無いもので。正に天を貫く膝といっても過言ではなかった。

しかも、首相撲の引き込みによって生まれた勢いのせいで、この右膝は若干のカウンター性も含めており。その威力は、御堂の意識を刈り取るだけではなく、唇に裂傷を作る事や、鼻から大量の血を吹き出させるには十分すぎる程のものであった。

竜蔵の右膝による一撃を受けた御堂が、そのまま前のめりで多目的ホルルのカーペットに倒れこむ。

倒れこんだときの御堂の全身には、既に力は感じられなかった。しばし、静寂がこの場を包む……。

まるで土下座をするかのように倒れ付している御堂を、竜蔵が注意深げに見下ろす。

もう終わっている……そう理解していても、自然とそれをやってしまっただけは、やはり住む世界が違うと感じさせる。

幸い、竜蔵の右膝や衣服には、御堂の返り血は付いておらず、綺麗なものだ。

代わりに、紺色のカーペットに、御堂の鼻から出た粘液混じりの血が染み込み始めた。

すると、そこで動きがあった。

「あ……あ……」

なんと、地面に頬を擦り付けている御堂が、僅かながらも口を動かしたではないか。

瞬間、竜蔵の眼が鋭くなるも、それも直ぐに収まる……どう考え

ても、今の御堂には10の間に立ち上がるなど不可能だからだ。
実際、路上でも、こんなになつてしまった相手に追撃することなど、余程の加減の効かない奴で無いとする事は無い。

故に竜蔵は、警戒心のために取っていた、意識下の構えを自然に解く。

これにより、勝敗はあまりにも呆気なく決した事になる。

別に、このまま竜蔵は御堂を放って置いて、多目的ホールを後にしたって良い。

だが竜蔵は、完全に落ちそうになっている意識の中で、こちらに何かを言おうとしている御堂に耳を傾ける。

「ま……まてや……こら」

おそらく、御堂の視界の中は殆ど竜蔵を捉えることは出来ていないだろう。

しかし、いまだ眼ではなく心に、折れていない闘争心が伺えた。

文字通り一撃で、文字通り5秒とかからない秒殺で、軽く一蹴されたにも関わらず、まだ闘う気がある事に、流石の竜蔵も驚きを見せた……同時に、面白い奴だとも思った。

故に竜蔵は、その場で膝をカーペットに着けた。

「終つてない、か……意外に、根性は有るんだな？」

「あ……う……」

そろそろ、意識も完全に沈んでしまつたろうに……。

だが、御堂は土下座の体勢でカーペットにひれ伏したまま、なんとか動こうとしている。

それを見ていた竜蔵が、突然御堂の両肩を両手で掴んだ。

そして己が立ち上がると同時に、完全に体に力が入っていない御堂を軽々と立たせる。

足元だけを見ればフラフラだ……だが、竜蔵が掴み、支えることによって御堂は頭をグラグラとさせながらも何とか立っている。

正直、傍目から見れば危ない状況だ。

しかし、止めれるものが居ないのも事実だ。

すると、無理やり立ち上がらせた御堂と改めて視線を合わせた竜蔵が、相手に語りかける様に口を開いた。

「お前、ラグビーをやってみないか？」

瞬間、周囲にいた者達全員がポカンとした顔をする。

当然、御堂もと言いたい所だが、生憎、彼は表情を作れるほど、まだ回復してはいない。

「別に、すぐに答えを出さなくても良い。取り合えず、今の状態じゃキツイかもしれないが、俺に誘われたって事を覚えていれば、それでいい」

竜蔵は言いながら、今度は御堂の左手を、同じ左手で無理やり掴み取る。

握手だ。

「俺は桐嶋竜蔵、この学園のラグビー部に所属してる二年だ。今は左手同士だが、お前が本気でラグビーに来るのなら、右手同士で握手しよう」

やっている事は馬鹿げているが、本人の表情は真剣そのものだ……本気で、御堂を勧誘している事が、それだけで周りにも伝わるほどに。

そして竜蔵は、今度はそのまま御堂を器用に担ぎ上げ、背中へと背負うようにした。

おんぶだ……それも、自分より背の高い者を。

「じゃあ、保健室に行くぞ」

そう言って、竜蔵はこれまでの事が何事も無かったかのように、多目的ホールを後にする。

残された者達は、皆啞然として、既に意識が飛んでいた御堂を拉致していく竜蔵の後姿を眺めていた。

実際、御堂が薄っすらとはあるが覚えているのは、左手で無理

やり握手させられた所までだ。

なんで、左手なのか？

それは、今の御堂には全く理解出来ない。

だが、なんとなく“あの人”にとっては特別なことなのであろうと、理解は出来た。

入学式後の事を薄っすらと思い出していたとしても、まだ頭はグラグラだ。

視界が、時たま霞がかかる事がある。

既に、無理をして動こうという気力は無くなっていた。

今は、動けるようになるまで、まだ傍に立っている白衣の女の言葉に甘えることにしよう。

そんな事を考えていると、また彼の瞼が眠ろうとする……。別に、抵抗する必要も無い。

すると、御堂は再び、この部屋のベッドで瞼を閉じ、眠りに付いた……。

それを、隣で見下ろしていた女。

二橋学園養護教諭の岡崎胡桃おかざきくるみは、仕方が無いといった表情で、眠りに付いた御堂にかけてあった布団を、優しくかけ直した。

同時に、その御堂の右手にあった紙切れを、スツと取り出す。預かった時も、そうであつたが。

改めて読んでみると、また笑みが零れそうになる。

「ふふ、あの子も随分と変わったわね……」

まるで懐かしむ様に、大人の女性らしい魅惑的な微笑みを浮かべながら、岡崎胡桃は呟く。

あの子は変わった、本当に変わった……。

胸中で手の掛かった子供の成長を喜びながら、胡桃は眠っている御堂から離れ、ベッドを仕切っていたカーテンを閉める。

動き出す二人

「軽率ですね」

まだ日も昇ったばかりといった時間。

二橋学園のとある一室で、そんな相手の行いを冷たく咎める様な、女子高生にしては色気のある少々低い声が響いた。

部屋にある、天井に埋め込み式の照明は明かりを点けられておらず。

その代わりに、早朝の淡い春の日差しが部屋を少しだけ明るくしていた。

「なにが、でしょうか？ 私には身に覚えがありません」

部屋の隅……窓際の横に長いロッカーの上で、ゆったりと座りながら早朝の窓の外を眺めている女生徒が。丁寧な言葉遣いの割りに、ひょうひょうとした態度で答える。

部屋の扉付近で立っていた、最初に声を発した女生徒には、それが気に喰わなかったのか？

一瞬、その皺一つ無い白く綺麗な眉間に、歪みを見せた……が、すぐにそれは成りを潜める。

「昨日の夕暮れ時の事です。一体、何を考えているのですか？ 確か、“彼”は執行部の“手伝い”だった筈です。なのに、わざわざ自らの正体を晒そうなどと……本気なのですか？」

執行部の手伝い……この学園には、その様な役職を持った生徒は一人しかいない。

いや、正確に言えば、既に 既成事実として 存在はしていない。

おそらく、扉の方に立っている女性は、それを知らなかったのである。

故に、窓のすぐ下に設置してある、横に長いロッカーの上に座つ

ていた女生徒は。相手を嗜める様に、その事実を教えてあげる事にした。

「それは古い情報ですね」

「はい？」

「もう既に、“彼”は昨日付けで執行部のメンバーに入っています……まあ、まだ非公式という形ですが。昨日の会長の様子からすると、今日にでも呼び出して、正式な手続きを彼に踏ませる事でしよう」

窓際に座っている女生徒の言うことに納得がなかったのか。

扉付近に立っている女生徒が、信じられないといった様子で声を張り上げる。

「馬鹿な！ 本当に“彼”を正式な執行部のメンバーに入れるというのですか！？ 手伝いだけならまだしも、機密性の高い執行部の仕事を、“彼”の様な人間がこなせるとは思えません！！」

まだ早朝だというのに、こちらに向かって紛糾しだした相手に対して。

「“彼”の実力……というより、実践的な能力の高さはご存知でしょうに。それを評価すれば、彼の執行部入りは当然だと思えますが？」

窓際の女生徒は特に気にした様子も無く、ただ淡々と事実を述べるようにして、自分の考えを相手に伝えた。

しかし、やはり納得がいかないのか。

「それは所詮、ただのゴロツキ相手の荒事に限った話です。私達の仕事には、本当の武術家が相手だったり、武装した者が相手の時だってあるのかもしれないですよ？ それを“見世物”としてしか闘うことの出来ない者に……」

その、ここにはいない相手を見下しているような主張に……。

「なら、アナタは“彼”に勝てるというのですか？」

窓際の女生徒が、掛けていた丸眼鏡のレンズを、昇ったばかりの日差しに反射させながら口を挟んだ。

眼鏡の奥に見える瞳は、微かに鋭い圧力を、こちらに放っている。
ブレッシャー

「……今は、そういった話ではありません。“彼”が本当の執行部の仕事をこなせるかどうか？　です」

言葉通り、今の議題はそこではないと言ったのだが。

窓際の女生徒は、それをどこか含みのある声音で。

「答えられない……と。では、私なりに解釈するとしましょう」
自己完結する事にしたのだが。

「どういう意味でしょうか？」

どうやら、扉付近に立っている女生徒には、その窓際の相手の態度が挑発にしか捉えられなかったようだ。

それを見た、丸眼鏡の女生徒は、口端を嬉しそうに吊り上げてしまつのを我慢しながら、胸中で悪戯に微笑んだ。

「どういう意味、ですか？　それは、私の解釈をアナタに伝えろという事でしょうか？」

わざとらしく、分かっているのがバレバレな芝居掛かった仕草と表情に、扉付近で立っている女生徒の鋭い目が、ますます鋭さを増していく。

下手をすれば、今の彼女の間に合いに入っただけで、何かに切られたと錯覚してしまいそうな程の威圧感と存在感が周囲に漏れ出る。

ただ立っているだけで、これなのだ……凜とした雰囲気を持つ彼女が、普通の女子高生などではない事を窺わせていた。

しかし、そんな怒気に近い感情を向けられたとしても、丸眼鏡の女生徒の表情どころか纏う空気も揺るぐ気配が無い。まるで、目の前で異常なまでの緊迫した間合いを一人で形成した女生徒が、取るに足らない実力だとも言つかのよう。

「フフ。この程度で感情を昂ぶらせてしまつのですか……意外に短気なのは、昔からという事なのでしょう」

「……」

相手を茶化す様に、天井を仰ぎながら懐かしみ始めた女生徒を、もう一人の女生徒は油断無く見つめる……睨みつけるではなく、無

駄な感情、無駄な力、無駄な考えを一切削ぎ落とした、冷静な瞳。それは、どこか研ぎ澄まされた刃物を彷彿させるような、鋭く、妖艶な印象を持たせる切れ長の目で。異性が見たとしたのならば、その一点にしか興味を示さなくなってしまういそ^{こわくてき}うな、そんな蠱惑的で危険な魅力を宿していた。

しかし

「ですが」

この程度のもものでは

「それがアナタの魅力でもあるのですよ？」

「ッ！？」

窓際に座っていた女生徒を、尻込みさせるどころか、“こちらの懷に潜り込ませなくする”事すら出来なかった。

いつの間にか自身の目の前に、三つ編みのお下げと丸眼鏡が特徴的な女生徒が、“仕方ない”といった表情で苦笑しながら立っていた。

いつロッカーから腰を離したのか？ いつ、この部屋の地面に足をつけたのか？ いつ、こちらに間合いを詰める踏み込みを行なったのか……その全てを捉えられなかった、理解できなかった女生徒の表情が強張る。

「そんなに驚かないで下さい。分かっていた事でしょうに？」

「……」

「もしかして、何も出来ずに間合いを侵されてしまった事が、そんなに悔しいのですか？」

首を傾げながら、拙いことをしたかなと、相手を心配した表情で訪ねるが。

一向に、返事が返ってくる気配が無い。

「フフ、やはりアナタは可愛いですね。そうやってすぐに拗ねたり悔しがったり、昔から素直な娘でした」

言いながら、丸眼鏡の女生徒は。既に顔を緩め、冷めた無表情へと変えた彼女の右頬を、左手で撫でる。

目の前で彼女を見ると、細く整った輪郭や、筋の通った小さな鼻、柔らかな唇に、先に述べた刃物を彷彿とさせる様な、切れ長でこわくてき、
蠱惑的な瞳が、有無を言わさぬ美しさを備えており。清らかな、それ
れでいて凛々しい顔立ちをしている。

髪型は眉毛辺りで切り揃えられた前髪に、腰まで伸びた真つ直ぐな黒髪をしていて。

また、背も168?と女性にしては高く。キュツと締まった、柳腰と称しても過言ではない、高い位置にある腰やくびれに。見事反比例するかのように存在を強調させている、上向きの形の良い胸が、女性的な魅力を更に引き立たせていた。

「特に私は、勝負事に負けてしまったときのアナタが好きですね…」

…」

言いながら丸眼鏡の女生徒は、目の前の触れ難い美しさを持つ女性の頬から、撫でていた手を相手の後頭部に回して、今度はきめ細かな彼女の髪を梳く様にして撫で始めた。

「一見気にしてないような冷たい表情を作って、内心では泣き出したいぐらいに悔やんでいる。今も、そうなのでしょうか？」

頭半分、背の低い位置から訪ねてくる丸眼鏡の女生徒。

しかし、好きなように撫でられている方は、その言葉を無視する。そんな態度を、愛しむ様に、丸眼鏡の女生徒は更に体を寄せる。

もう、さっきまでの緊迫した間合いは、完全に瓦解していた。

すると、不意に丸眼鏡の女生徒が、後頭部の髪を梳くように撫でていた手を離し、その華奢な体も同時に離す。

いつの間にか、丸眼鏡の女生徒の表情が、こちらを愛しむものから、真剣なものへと変わっていた。

「無反応で詰まらないですね」

「……」

本当に詰まらなそうな溜息を一つ付きながら、目の前の相手を見つめる。

が、反応は無い……ただ、こちらに睨みつけるような視線を向け

ているだけだ。

おそらく、さっきのは凶星だったのであろうと、丸眼鏡の女生徒は当たりを付けた。

「では、私なりの解釈……もとい、見解を教えましょう。まず、アナタでは“彼”には勝てません、もちろん私にもです」

「ッ!？」

瞬間、こちらを睨みつけていた目が、更に強張る。

「私が、“見世物”である“彼”には勝てない?」

納得がいかない、腑に落ちないなどではなく、“ありえない”といった声音。

「相手を刀で、いかに効率よく、いかに確実に殺傷できるかを突き詰めた武術と。“彼”の現実的ではない、試合でしか役に立たない格闘技……比べるまでも無いと思いますが」

“彼”という人物と、己が修煉している“もの”の違いを、当たり前といった様子で語る女生徒に。

相対している女生徒の苦笑が漏れ出した。

「そうですか。いかに効率よく、いかに確実に……ですか」

「なにが可笑しいのですか？」

明らかに、こちらの事を嘲笑っている相手に、切れ長な目を鋭く細める。

しかし、そんな視線などお構いなしに、相手は突きつける様に言い放つ。

「では、先の状況や、今のこの状況で。アナタは何回、私に殺されたと思いますか？」

「……」

「だんまり、ですか……アナタなら分からない筈が無いのですがね」
相手から答えが返ってこなかった事を、残念そうにする丸眼鏡の女生徒。

だが、それから一拍の間を置いて、相手の女生徒が口を開いた。
「……三回です」

「いいえ、ハズレです。正確には五回ですね」

「……」

即答で、紡ぎ出した答えを否定された女生徒は、唇を悔しそうに噛み締めながら表情を俯かせる……。

それは暗に、この女生徒自身が、丸眼鏡の女生徒の答えに反論は無い、正しいと認めた瞬間であった。

その様子を、真剣な表情で見つめる丸眼鏡の女生徒は。別に気にすることではないと、相手を慰める様な口調で言葉を続けた。

「私の言うことを理解できただけでも、アナタは進歩していますよ」
「……」

「ですが、これは相手が私ではなく“彼”だったとしても、殆ど同じ結果が出たことでしょう」

「そんな事！ 有り得る筈がありません！」

これには納得が出来なかったのか、俯かせていた表情を“バツ！”と上げると同時に、怒気を露にした。が、丸眼鏡の女生徒は冷静だ。

「まず、アナタは今、肝心な得物を持っていません。これでは言われても仕方の無い事でしょうに」

「ですが、私にも一応、無手の心得があります！！」

「一応のレベルで、“彼”に対抗出来るとでも？ でしたら、一度試してみると良いでしょう。“彼”なら喜んで受けるのでは無いでしょうか？ そうですね、丁度良い機会です、柔よく剛を制すを体現してみるのも悪くないのでは？ まあ、もつとも、“彼”の身体能力や鍛え上げられた肉体を、アナタの“一応のレベル”で抑えられるのかは保障しかねますが」

「……くっ」

奥歯で苦虫を噛み潰したかの様に、丸眼鏡の女生徒の言葉から引き下がる。

実際、理解は出来ている筈だったのだが、自分の修練している武術を馬鹿にされたようで頭に來てしまったのであろう……。

「そして、もう一つ……」

「……？」

「“彼”なら、アナタが無駄なことを喋っている、悔やんでいる間に。既に仕掛けている筈ですからね……今まで見てきて、彼が荒事に関わっている時は、様式美や空気など有って無きようなものでしたから。それは相手が自身より格下だろうが何だろうが、変わらなかった事の一つです」

冷静に、相手の習性を理解した上で、仮想を語る彼女の言には、不思議な説得力というものがあつた。

それに……と、続ける。

「アナタの立場が、私になつたとしても、結果は同じかもしれません」

「それは……」

「有り得ない……いえ、有り得ます。まず、体格差は言わずもがな、実際のスピードは“彼”の方が早いと、私は考えていますから」
己の実力を知るものは、相手の実力も考慮した上で、イメージトレーニングを行なえる。

これは、どんな格闘技だろうがスポーツだろうが同じこと。

なぜなら自分のスピードやパワー、もしくはステップの歩幅や入り込みの速さやら……これらを知らない限り。例えば自分よりも格上の選手を想定してイメージをした場合でも、自身の実力を考慮しないで、いや、出来ないで、都合の良い試合運びしか想定しなくなってしまうからだ。

自身のスピードに相手は反応できる、自身のパワーや攻撃の仕掛け方は相手に通用する。そういった事を少しでも理解していると、またイメージトレーニングの“現実味”は増し、効率の良い有意義な、かつ、“甘くない”試合を想定できるようになる。

故に、相手を過小評価も過大評価もしくなくなり、中立な立場で実力を判断できるのだ。

それを心得ているらしい丸眼鏡の女生徒は、まだ信じられないと

いった表情をしている、目の前の女生徒に至って真面目な声音で視線を向け続ける。

「これは、自身と“彼”を客観的に評価しての考えです。そんなに驚いた表情をしないでください……本当に合っているのか、自信がなくなってしまうじゃないですか」

「いえ……私はアナタの言うことでしたら、大抵は信じられます。ですが、こればかりは」

「フフ、そこまで信頼されると照れてしまいますね」

ほのかに紅く染まった右頬を、ポリポリと恥ずかしそうに人差し指で触れる……かなり芝居がかった仕草をする丸眼鏡の女生徒に、対峙している方かというと。

「あ、当たり前です……私は、アナタに育てられたと言っても、過言ではないぐらいに、お世話になっているのですから」

こちらにも、恥ずかしそうに顔を赤面させながら、その芝居がかった仕草を真に受けていた。

彼女の反応に、改めて

背もスタイルも負けてはいるが

可愛いと思った丸眼鏡の女生徒は。もうちょっと遊んでみようかなとも考えたが、そろそろ時間も迫っていたので、話を切り上げるために×に入った。

「ですが、安心してください。確かに身体能力では、圧倒的に“彼”の方が上でしょうが、こちらは真正面から闘うつもりはありませんから」

「真正面から闘わない、ですか？」

相手を真心から安心させるための、優しい口調。

それは、真に丸眼鏡の女生徒が、相手の女生徒を愛しているかの様な暖かさが籠っていた……が、それは次には不敵な表情と共に、一変する。

「はい、私は何者か……それを忘れていないのですか、“さえ”
島刀子”さん？」

冴島刀子と、丸眼鏡の女生徒に呼ばれた者は。

その彼女の絶対的な自信が内包された表情を見て、ようやく落ち着いた表情をした。

「なるほど……そういえば、そうでしたね。木佐貫家第八代目女忍筆頭目“木佐貫千代女”先輩？」

傍目から聞けば、何を訳の分らないことをと感ずるかもしれない。

女忍……一般的に“くの一”とも呼ばれる、遙か昔に消えた名称。現在では、創作物などで登場したり、日本を勘違いした外国人観光客が、おふざけ程度に探している、そんな程度の言葉だ。

しかし、この場にいる二人は、そんな現実味の無い名称を、大真面目に受け入れていた。

冴島という女生徒に、木佐貫千代女と呼ばれた丸眼鏡の女生徒が、そろそろ話しも切り上げようと、視線を冴島から外しながら扉の前まで歩いていく。

「少し、今回の私の目的とは違った話になってしまいました。これで納得してくれましたか？」

扉の前で、視線も向けずに、背中越しで問いかける木佐貫……。

暗に、もう口は出すなといったニュアンスも感じられたが。

冴島は、それを無視する。

「千代女さんが、そう仰るのなら納得はします。ですが、一つだけ「はい？」

さっきまでの怒気を含んでいた声音とは、違った真剣みのある言葉。

それに、何かあるのかと振り返った木佐貫は。そこで、冴島刀子という洗礼された、凛々しく清らかな容姿を持つ女性の、本当の自信に満ちた表情というものを見る。

「“彼”……桐嶋竜蔵という男を、私に“試させて”下さい」

胸元に片手を添え、真に訴えかけてくる彼女の表情に、木佐貫は一度、軽い溜息を吐くと。

「良いでしょう。ですが、それは私の用件が終った後にして下さい

ね？」

それだけ言つて、木佐貫千代女は嬉しそうに微笑みながら、この部屋を出た。

すると、途端に静寂に包まれる室内……まあ、いるのが一人だけになったから当たり前だが。

だが、しかし。

そこに一人残った、冴島刀子という女生徒の胸中には。室内を包む静寂とは真反対の、剥き出しの対抗心が芽生えていた。

（千代女さんに、あそこまで言わせる男か……楽しみというよりは、負けられないな、絶対に）

心で、そう決心をつけると。

冴島刀子は、学園内で所属している部活の朝練に参加するために、この部屋を後にした。

二橋学園の健康診断とは、まあ例に漏れず、皆体操着に着替えた後。

視力・聴力・身長・座高・体重などといった他に、心電図や後日の尿検査までを測定する。

また、その際に体の上からのサイズも測るため。この日の朝のために絶え間ぬ努力を三日間ぐらい限定で続けてきた女子の生徒達がいる。

そして現在、それら三日間限定で絶え間ぬ努力を続けてきた他の女子生徒達を、まるで嘲笑うかのような記録を残した者が、学園の保健室にいた。

「ウエスト……ご、54cmですって」

メジャーを持つ手を小刻みに震わせながら、敗北感と懐疑心の入り混じった表情で、信じられないと言葉を漏らす養護教諭、岡崎胡桃……。

目の前には、水分の吸収率と発散率が高められた体育着の上を捲った、黒髪の美少女が佇んでいた。

「あの、岡崎先生？」

「う、嘘よ……だって、この娘のバストは87？もあつたのよ？
ありえるわけがない。そうよ、ありえるわけが……」

ぶつぶつと言いながら胡桃は、再び細いメジャーを目の前の美少女のウエストに巻きつける。

しかし、結果は変わらない……。

「そ、そんな……」

張りのある、透き通るような若々しい白い肌に、薄っすらと見える、お腹の筋……女性だけではなく男性ですら理想としか浮かべられない、奇跡のくびれが目の前で岡崎胡桃に、現実^{リアル}の厳しさを教えていた。

それはもう、口惜しいや悔しいなどを通り越して、崇めたくなってしまう様な気持ちになるほどだ。

奇跡のくびれを持つ女生徒の後ろでは、既に同じクラス的女子達から、どよめきの声が上がっている。

「岡崎先生、次の人も控えているので、早く最後の方も計ってくださいませんか？」

一向に現実を認めようとしない胡桃に向けて、目の前の女生徒が困ったように声をかける。

すると、それによりやく目を覚ましたのか。

「え、あ！ うん、ごめんなさいね、じゃあ最後も計っちゃうから

……」

言いながら、胡桃は彼女のウエストに巻いていたメジャーを、今度は上とは違って下着姿になっているヒップの方へと下ろしていく。そして、胡桃は再びの絶望と、女としての敗北感を味わうのであった。

満足気な表情で鼻歌まで歌いながら、次の測定場所にまで移動をしているのは。

先程、新入生以外では大人の色気と悩ましいボディが有名な養護教諭、岡崎胡桃を絶望のどん底にまで突き落とした美少女。

その美少女は、長く真っ直ぐな黒真珠を思わせる髪と、女子高生らしい可愛らしい瞳や、細く整った輪郭が特徴的で。尚且つ、その体操着越しからでも十二分に確認できる、メリハリのある膨らみが、異性の視線を釘付けにしていた。

彼女がご機嫌な様子で、手に持っているのは健康診断の記入プリントだ。

体重・身長・スリーサイズ共に、そんじょそこらのモデルでは太刀打ちできない数値を叩き出しており、また先に述べたとおり、あの場にいた殆どの女生徒に劣等感を通り越した絶望感を与えていた。そして、その名前の欄には、桐嶋美夏きりしま みなつと記載されていた。

つまり、廊下を歩いているだけで、周囲の視線を釘付けにしていた美少女とは。

あの兄妹である竜蔵が大好きで堪らない妹であった……。

「ふっふん」

「ご機嫌だね」

美夏が両手で覆うようにして、胸の前で記入プリントを大事そうに抱えていると、

隣を歩いていた木下藍が、きのしたあいこちらを少し沈んだ様子で尋ねてきた。それに、花が咲きそうなくらいの微笑みを浮かべた美夏が、“分かる？”と言ったふうに振り向く。

「だってえ、私が予想してた以上に成長していたんだもん」
「へー」

本人には悪気は無いのは分かるのだが、どうしても棒読みで白けた視線を向けてしまう。

そんな藍は、花も恥らう女子高校生だ。

「良いね、自分が思ったとおり成長できてさ……」

「何言ってるの？ 藍だって、平均から見れば完全に嫌味を言えるレベルよ？」

高身長な筈なのに、表情に影が差し込むほど沈んでいる藍を見て、美夏が首を傾げる。

「へん……どうせ、それも“背の高い女”とか言われて、馬鹿にされるんだ」

へそを曲げたというよりも、不貞腐れ始めたと言った方が適当な藍の豹変ぶりを見て。

美夏は（あゝ、変なスイッチ入れちゃったかも）と、何に後悔したら良いのか分からないが、とりあえず後悔をしていた。

しかし、彼女のしなやかかつ機能的な肢体を見る限り。そんな馬鹿にしたほうが痛い目を見そうな、スレンダーな美しさがある……正直、美夏自身、彼女が持つそういった魅力には勝てないと踏んでいるぐらいなのだ。

何を落ち込む必要があるのか？ むしろ、その態度が周囲に劣等感や嫉妬を芽生えさせるのではないかとも思う。

「背が高いからって言っても、世界のモデルの人とか見ると、たまたに180cmの人とかいるし、そんなに落ち込むことも無いんじゃないかな？ 実際、ウエストだってヒップだって負けてないんですよ？」

故に美夏は、事実に基づいた、彼女の正当な評価を自分なりの見解で伝えることで、慰めようとしたのだが……。

「でも、胸は負けてる……」

（あゝ……）

悲しそうに呟く藍に、美夏は返す言葉を見失ってしまった……。確かに、彼女の胸は小さくはある……だが、それは平均と比べたら大差は無い。

しかし、それは胸が出ているからとかいう次元の話ではない。ただ単に、藍の“ももとの胸囲”が、それぐらいあったというだけの事。

つまり、簡単に言ってしまうえば、彼女の胸は小さいということなのだ。

そんな胸の小さな藍が、今度は恨めしそうに美夏の大きくて形の良い胸に視線を向ける。

「世の中って、どうしてこうも格差があるんだろう。不公平だよな」「いや、それを言うのだったら、藍がやってる女バスだって同じ事なんじゃないの？」

「確かにそうだけどさ……納得いかないじゃん、こう、女として」「藍は別に女性としてダメって訳じゃないと思うんだけどな。顔だって、凛々しい感じの美人って雰囲気だし。もと自信持ちだよ」

もはや沈み続ける藍を、いかに慰めるかという難題になってしまった、この状況。

そこでふと、美夏は良い案を思いついた。

まあ、これは木下藍という、ボーイッシュな雰囲気を持ちながらも、確りと女性らしい凛々しさと清純を持った人物だからこそ、通用する手段なのだが。

しかし、思い立ったが吉日……この際、条件ありの手段だろうが何だろうが選んでられない。

自身の思いついた案を執行しようと美夏は、まだ他の新入生達が次の診断のためにゾロゾロと歩いている廊下に目を配らせた。

そして、目的のものを見つけたと共に声をかける。

「ねえ、竹島君……だっけ？　ちよつと良いかな？」

「えっ!？」

美夏が声をかけた“もの”……それは、同じ1年A組の男子生徒だ。

ちなみに、なぜ“もの”なのか？

それはただ単に、美夏が“兄以外の異性を人として見ていないからだ”。

しかし、そんな美夏の事情などは知らない、声をかけられた男子生徒は。新入生代表挨拶の時や、現在の状況下でも一番目立つ、十

人が十人、美少女だと断言できる程の容姿をした美夏に。声をかけられただけではなく、名前も覚えてもらっていた事に、内心で小躍りしてしまいそうな程に胸を昂ぶらせていた。

「あのさ、素直な意見を聞かせてね？」

腰に片手を当てながら、人差し指を立て、相手に“これは重要だよ？”といった、あざといジェスチャーを取った美夏の仕草に。思春期真っ盛りの初心な男子生徒は、思わず顔を赤らめながら「お、おう！」と微妙に男らしい返事を返した。

おそらく、優美な容姿や纏う雰囲気とは違った、美夏の気さくな態度に。オドオドと動揺をしてしまったら、舐められてしまうかもしれない、変な誤解が彼の脳裏に浮かんたのであろう……まあ、彼女は舐めるところか、兄以外の異性などゴミ程にも思っていないのだが。

しかし、それと、高校での友人一号である藍を慰めるのとは話が別だ。

今は、どんなに兄以外の異性と話すのが面倒でも、優先すべきは友人なのだから。

「じゃあ、聞くね？」

「おう！ い、いつでも良いぞ……」

「よろしい、良い心がけだね……」

あまりの動揺で、米神に一筋の汗を垂らす男。

周囲では、その美夏に声をかけられた男に対する嫉妬心が芽生えていたが、美夏にとっては全く興味のないことだ。

故に、美夏は男子生徒に、何の気兼ねもなく尋ねる。

「竹島君は、木下さん。藍の事、素直に可愛いと思う？」

「……え？」

受け取り様によつては、印象の悪い問いかけなのだが。

それは、美夏の嫌味のない声音や仕草、または微妙に心配している様な表情のお陰で、不思議と感じはしなかった。むしろ、友人思いの好意的な印象が持てたぐらいだ。

そして、美夏の問いに、男子生徒は全く持つて迷いなく答える。
視線はもちろん、テンションのダダ下がっていた藍に向けながらだ。

「いや、普通に可愛いってか、美人だと思うけど？」

「ひゃいつ!？」

男子生徒に見つめられた状態で、そんな事を言われてしまった藍は。

これまでの暗い表情が嘘だと思えるぐらいに顔を紅潮させ、素っ頓狂な声を思わず出してしまふ。

「ほら言ったじゃない、藍は誰から見ても可愛いし美人な女の子なんだから、自信を持ちなつて」

「い、いや。そ、そそそんなこと! い、いきなり言われたって……」

あまりの驚きに歩いていた足を止めてしまった藍は。

こちらに嬉しそうな表情で、“言ったとおりでしょ”といった視線を向けてくる美夏に、声を萎ませてしまふ……。

昨日、今日と見てきて、彼女に活発で男勝りな印象を持っていた美夏は。この恥ずかしそうに顔を赤らめながら萎んでいく友人を見て、ちよつと面白いと感じてしまった。

故に、この面白さをもつと感じたいと思つてしまった美夏は。

「一人じゃ納得してくれないんだ……じゃあ、他の男の子にも聞いてみよつか!」

「ちよ!？ ちよつと待つてよ美夏!」

「え、あれ？ 俺つて、これだけ？」

もはや涙目になりながら、暴走しようとする美夏を止めようと、藍は走り出した彼女を追い始めた……幸い、この追いかけっこのお陰で、美夏が他の男子に声をかける事はなかったが。

(何この娘! あたしが本気出しても追いつけないなんて!?)

チラホラという人の障害物を巧みなステップで避けながら走る二人。

だが、背も高く、足も前を走る美夏よりも長いはずの藍が、どうしても彼女の流れるような走りに追いつけない。

外見に似合わないピッチ（脚の回転数）やストライド（歩幅）もそうなのだが。

彼女の走りは、足を素早く入れ替えるたびに、腰まで伸びたストレートの黒髪が舞い、また、その大きく形の良い胸も揺れるために、周囲にいた男子生徒達の視線を釘付けにしていた。

しかし、そんな視線など関係ないといったふうに、美夏の表情には本当に楽しそうな笑顔が浮かんでいた……まあ、後ろを走る藍は、止まったら再び恥ずかしい思いをしてしまうので、若干の涙目を浮かべていたのだが。

だが暫くすると、突然、美夏の表情に笑顔はなくなる。

同時に、その動かしていた脚もゆっくりと止め始めた。

急に逃げなくなった友人に、何かかと思つた藍は、そのまま止まつた友人の隣までペースを落としながら歩を進める。

「……急に、どうしたの？」

美夏の隣へと歩いてきた藍が、その相手の顔を覗き込む。

瞬間、藍の背筋に嫌な悪寒が走つた……。

「み、美夏？ 何か怖いよ？」

「え、何が？」

藍の震えた声音に反応こそするが、美夏は向けている視線を外そうとはしない。

表情は正に無表情……それも、精気というより感情を感じさせない、お面の様な無表情。

目は見開いたまま、ずっとある一点を凝視している。

流石に、この整つた顔立ちをした美少女が、一切の感情を感じさせない表情をしている光景に、恐怖を感じたのか。藍が美夏の放つ空気から逃れるように、彼女が向けていた視線の先を追う。

すると、そこには本校舎と別の建物を繋ぐ渡り廊下があった。

この渡り廊下は、本校舎と別の建物の一階同士を繋いでいるため

に、外履さえあれば外に直接出れるよう、何箇所か出入り口のような所が見受けられた。

だが、美夏が視線を向けているのは、そんなどうでも良い所ではない。

視線の先には、彼女の兄である桐嶋竜蔵と“一緒に”隣を歩いている一人の女生徒がいたのだ。

ちなみに、他にも彼の友人らしき者達も近くに数人ほいたのだが、どうやら彼女には見えていないようであった……恋は盲目などという言葉では、全く持って片付けられない現象だ。

「ちよつとごめんね、藍。私、行かなきゃ」

そう言つて、至つて当たり前の様に兄がいる方へと行こうとする美夏を。

ガシ 藍が肩を掴む事で止めた。

「どうしたの、藍？」

「いや、行くのは別に構わないんだけど、まずはその“誰だろうと構わず虫の様に殺してしまいそうな眼”は止めてくれ。本気で恐いつてか、これは誰だつて止めざる負えなくなる」

静かな、それでいて透き通る様な声音で振り向いた美夏に、藍が額に汗を浮かばせながら言う。

「え？ 私、そんな眼なんてしてないよ」

カクンと、まるで人形の首が折れたかのように首を傾げる美夏。

不気味だ……また、それをやっている本人が、人形の様に造形の確りした顔立ちをしているから、余計に不気味だ。

だが、ここで彼女を野放しにしてしまうと、渡り廊下の途中で友人達と楽しげに談笑している彼女自身のお兄さんや、その周りの人たちに、確実に危害が及んでしまう。

まさか、この虫も殺さないような可憐な少女が、そんな事をするとは思えないが、一応念のためだ。

「とりあえずさ、早く次の診断に行こうよ、ね！ お兄さんと話すなら、また後でも良いじゃん！」

「え、あ、ちよつと藍!？」

藍は捲くし立てるようにしながら、美夏の肩から手を離し、今度はその右手を取って渡り廊下から離れていく。

そのあまりの唐突さに、抵抗する術もなく引つ張られていく美夏は。

「藍、放して! 私は、お兄ちゃんのところに行かなきゃいけないの!」

「今は診断の方が先でしょ? 終ったら、それだけ早く帰れるんだからさ! 協力し合おうよ、ね!」

宥める言葉こそ、それっぽいものがあるのだが。相手の手を引つ張って、強引に歩いていく様は有無を言わさぬ……というより、どこか必死に見えた。

動き出す二人（後書き）

またイメージ絵です。

冴島刀子

> i 3 2 0 9 3 — 2 3 7 9 <

桐嶋美夏（ちよつと写りが悪かったやつです）

> i 3 2 1 0 3 — 2 3 7 9 <

カミングアウトに爆弾発言（前書き）

今回、下手ながらも描いた挿絵があります。

お見苦しいかもしれませんが、ご覧になっていただけると幸いです。

行間というものを、少しでも意識して書いてみました。

まだ見づらいという方がいらっしゃったら、気軽に意見を下さい。

それは直接、私の成長にも繋がるので。

カミングアウトに爆弾発言

新入生の健康診断は、特に問題も無く、順調に全生徒の診断を終えた。

ただ、一部の生徒……というより、木下藍にとっては、大変面倒臭い行事だったという事を、ここに一応記して置こうと思う

理由は高校での最初の友人が、何やら人を殺しかねない雰囲気で、その友人の身内である兄の所へ歩こうとしていたのを阻止していたからであるが……まあ、それも暫くすると落ち着きを取り戻してくれた。

が、それは一時の安寧だった様で。

それから事あるごとに、友人はその身内である兄を見つける度、突入を繰り返し。

男友達で集団を作っていたのなら何事も無く済んだのだが。そこに一人でも女性がいると、また人を殺しかねない顔で歩み寄ろうとしてしまうので、何度も木下藍が必死に友人を引きずるという光景が見受けられた。

ただ数としては、そこまで繰り返した訳でもなかったので、助かったといえは助かったのだが。

何故このような事になるのか？ 理由が全く分からない状

況で、同じ事を繰り返していくのは辛いものがあつた様だ。

故に現在。

友人の原因不明の暴走に振り回された木下藍は、教室の自分の席の机の上で、ダラーっと疲れた様子で突っ伏していた。

彼女らの教室は、新入生の中でも成績優秀・中学時代に課外活動や校外活動などで高い成績を収めた者達が集められた1年A組。つまり、新入生内でのエリートを寄せ集めたような学級だ。

しかし、いくらエリートだと言っても、所詮高校生は高校生……周囲では、終った健康診断や、昨日やっていたTV番組、はたまに既に学園の部活に入部している者達の話題で、ガヤガヤと騒がしい限りであった。

そんな中でも、名前順的に藍の前に席を置いている人物の周りでは。

入学早々、“可愛い彼女をゲットして他の男子達に優越感を感じられる薔薇色の学園生活”を夢見た、ちよつと軽そうな男子や、明らかにまだこういった事に慣れていないデビューしたての男子が集まっていた。

この光景を、突つ伏した状態で一段上の机から眺めていた藍……。中には、藍の眼から見ても（あ、ちよつと格好いいかも）だとか（へへ真っ直ぐで優しそうな奴じゃん）だとか、そういった高評価の者達もいたのだが……。

その尽くを、美夏は小悪魔よろしくの当たり障り無い対応と微笑みで退けていた。

故に、退けられた男達の顔に無念の文字は無い……。あるのは、無意味な希望を持たされた哀れな顔だけだ。

真に恐ろしい娘である。

しかし、そうなると藍には疑問に思う事がある。

（しかし、ホントにお兄さん以外に興味とか示さないよね……この娘）

昨日の入学式での一幕。

新しい教室へと移動する際に、校門前で周りの目も憚らず、身内である兄の胸に飛び込み。そして傍から見ても恥ずかしいぐらいに甘えていた様子を藍は思い出していた。

それに今日も今日とて、次の診断がある場所に移動している最中

に、偶然その兄に会って、毎度お馴染みの如く駆け寄る、または飛び込んで行こうとする……。

おまけに、その兄が他の女子生徒と仲よさげに歩いているだけで、不機嫌そうな顔。というより、人を殺しかねない危険な色を感じさせる表情になるのだ。

まだ何となくではあるが、藍はこの前の席に座っている友人の事を、ただのブラコンでは無いのではと感じ始めていた……まあ、まだ感じ始めた程度ではあるが。

「ねえ、どうしたの。そんなボクとしちゃってさ？」

「え？ ああ、うん」

思いの他、考える事に意識を向け過ぎていたのか。

いつの間にやら、件の友人、美夏がこちらに、椅子の背もたれに右ひじを乗せながら振り返っていた。

その機嫌の良さそうな声に、意識を思考の世界から引き戻された藍は、どこかまだ呆けたような返事を帰す。

しかし、あんなにもこちらに迷惑というより、労働力をかけておいて。どうしてそこまで機嫌よくいられるのであろうか？

藍は、そんな疲労により荒み始めた心によって生まれてしまった負の感情に、何の躊躇いも無く身を任せる事にした。

まだ出会って二日目の相手に、中々の度胸、思い切った性格である。

「いや、ちよつと疲れちゃってね……主に、あたしの前にいる困ったブラコン娘のせいだ」

言いながら、一段下に座る美夏に、意地悪な視線を落とす。

「えっと、ホントにどうしたの？」

その視線の意味するものが分からなかったのか、美夏が困ったように聞き返す。

「……分からないの？」

聞き返された藍は、結構自分なりに皮肉を込めたつもりだったの

に、本当に分からなかったのかと、信じられないといった表情をする。

それに藍自身、一瞬可愛いと思ってしまっ仕草で小首を傾げる美夏……。

だが、いくら何でも、あれだけの苦勞をこちらに強いておいて（止めなければ拙いという義務感に駆られて）、全く自身の落ち度に気付いていない彼女を見て、藍の苛立ちが徐々に増していく。

故に彼女は、もう回りくどい言い回しなど捨てて、直接的な表現をぶつけてやると決意した。

「美夏さあ……本当に気付いてないなら、結構危ないかもよ？」

「え？」

「診断の最中にさ、何度か移動があっただけ。その度に、美夏はお兄さんを見つけては突っ込んだりしてたじゃん？ しかも、お兄さんの近くに他の女の人がいようものなら、すごい危ない顔してたんだよ？」

「……」

藍の直接的な指摘に、美夏は表情に苦笑いを浮かべながら固まってしまう。

おそらくさっきまでの自らの行動を、記憶の底から引き揚げているのである。

そんな彼女の様子を見て、藍はようやく（あ、やっと反省する気になったかな）と安心していただのだが……。

「藍？」

「うん？ やつと、謝る気になってくれたかな」

記憶の引き揚げを終えたのか、美夏がまだ体操着姿の居住まいを正して、藍に視線を向けた。

藍は『おし、話を聞いてやろう』と、机に突っ伏していた体制から、椅子の背もたれに体を預けた、どこか偉そうに踏ん返り返った態度で美夏の言葉を待つ。

しかし、出てきた答えは……。

「ごめん、ちょっと私には何がいけないのか分からないよ……」
「はあ!？」

本当にすまなそうにしながら発せられた、彼女の信じられない言葉に。藍が思わず驚きの声をあげてしまう。

危つく、椅子から転げ落ちそうなくらいだった。

「そ、そんなに驚く事なの？」

キョトンと、こちらのリアクションに戸惑う美夏。

そんな彼女に、藍はこちらがキョトンとしたいわと、心の中でツッコミを入れながら。

「だって、どう考えたって私が見てきたどの兄妹よりもスキンシップというか、接し方が悪いけど異常なんだよ？ 公衆の面前で飛び付いたり、お兄さんが他の先輩達と話している最中に、また飛び込んだり……終いには、さっきも言ったけど、他の女子生徒を殺しかねない眼をしてたんだよ？」

「えゝそんなの藍の気のせいじゃないの？」

「違う！ 絶対に違う！！ だってあたし、証拠に写メも撮ったもん！」

そう言いながら、藍は美夏同様、いまだ着ていた体操着の短パンのポケットから、自身のタッチパネル式の携帯電話を取り出した。

「ほら、見てみなよ！」

取り出したタッチパネル式の携帯電話を、手馴れた様子で操作しながら、藍はすぐに証拠である写真を美夏に見せた。

向けられたディスプレイを、『まさか、そんなことは無いでしょ』といった態度で確認した美夏は。

「……嘘」

あまりの事に、そう呟く事しか出来なかった。

藍が、こちらにかざしたディスプレイに写っていたのは、能面の様に表情を凍らせた状態で、その普段はハッキリと見開かれた可愛いらしい、長い睫毛がチャームポイントの瞳には全くの精気が感じられない、日本古来のホラー映画を髣髴とさせる、自身の色白な顔で

あつた。

> i32260 — 2379 <

怖い、というより信じられない……。

この写真を見せられた美夏は、自身がしていた表情に自ら恐怖した……。

そこでふと、写真を見せられていた美夏が気付く。

「あれ？ これ、光の反射じゃない…… よね？」

「え？」

美夏のどこか震えた様子の口調に、藍が向けていたディスプレイを、自身に向け直す。

だが戻したものの、目の前の友人が正直何に怯えているのか理解できていなかった藍は、暫くディスプレイと睨めつことを続けていたのだが。

「……なに？ この丸く光ってるのは？」

藍の表情が、気味の悪いものでも見たというふうに変む。

二人が見たもの……それは、写真に写っていた美夏のすぐ傍にあった、白く丸い発光体。

始めはただディスプレイが光を反射させているだけかと思っていた。だが、よく見てみると、角度をどんなに変えようと、写真に写っている白い発光体は消えやしない……。

流石に気味が悪いと思ったのか、藍はすぐさまその写真のデータを消去する。

「何だったんだろう……多分、ただの偶然だったと思うんだけど」自身が写っていた写真に、謎の現象が起きていた事に、気持ちの悪い思いを感じた美夏は。まるで自らに訴えかけるように推測を述べた。

「そ、そうだよ！ ただ単に、光が変な感じで写り込んでただけだって、きっとそうだって！」

こちらにも、この不思議な現象を偶然で片付けたいのか。誤魔化すように、わざとらしい笑みを浮かべている……ただ、その笑みはどこか引きつった様子であったが。

一刻も早く、こんな訳の分からない事は忘れたい。

そう考えた二人は、無理やりの話題転換を試みた。

「えつと……あ！　そういえば美夏の身体測定の結果って、結局どんな感じだったの？　あたし、ウエストの事しか聞こえなかったからさー！」

「そ、そうね！　えーと、その……こ、ここじゃあ言いづらいから、耳貸してくれるかな？」

藍の思い出したかのような言葉に、美夏が恥ずかしそうにしながら周りを見回した後、椅子から腰を上げて、藍の耳元に口を近づけた。

普段なら、どんなに嬉しい結果が出ていたとしても、こんな軽々しく情報を晒すような事はしないのだが。おそらく、今しがたの気味の悪い雰囲気、早く払拭したかったのであろう。

だからこそ、藍の言葉通りに、自身のスリーサイズを小声で伝えたのだが……。

「……なんだけど。うん？　どうしたの？」

伝え終え、相手の耳から口をゆっくりと離れた瞬間。

なにやら藍の様子が不穏なものへと変わっていくのが、美夏にも確認が出来た。

具体的に言えば、彫りの深い目は影に隠れ、机に付いた両手の手の甲には力が入っているのか、数本の血管の筋が浮き出ている……更には、その女性にしては筋肉質であるが、意外と華奢な印象もある両肩がプルプルと、何かに打ちひしがれている様に震えている。

何事か……と、美夏が疑問に思った刹那。

「だああああッ！……！」

「きゃッ！？」

突然、藍が狂ったように……いや、狂った。

座っていた席から怒涛の勢いで立ち上がり、一つ下の段の美夏だけではなく、教室中のクラスメイト達すら驚かす大声を鳴り響かせた藍。

周囲からは、何かといった視線を浴びせられる……が、今の藍にそんな事を気にする余裕は無かった。

「ほ、本当にどうしたの!？」

「うるさい!! この非国民め!!」

「非国民!？」

「あたしはね、このJapanという国を、侘び寂のある本当に謙虚で美しい国だと今まで信じて来たんだ!! だけどね、美夏。アントアの体は、その古き良き侘び寂の精神を忘れた、非国民以外の何者でもない!! 返せ! あたしの好きだったJapanを返せ!!」

もはや涙目になって、美夏に指を突きつけながら、己が思いをぶちまける藍。どうやら相当、彼我の戦力差が絶望的であったのである。

それに、少しの間、訳が分からないといったふうに引いていたものの。

「ここまで言われるいわれも無いと、美夏が反論しようと口を開こうとすると……。」

「そうよ! 桐嶋さんは、もう少し“無意識な主張”を控えるべきだよ!!」

「持っている者と持たざる者の差が、どれだけのものか知るべき!!」

「大体、トップに比べて、あのアンダーは羨ま……いや、反則だと思っ!!」

「桐嶋さんのスタイルは、“校則で規制すべきレベル”!! そうしないと、私達の立場が……」

周囲のクラスメイト達から、悲痛とも称せる格差の撤廃運動が起り始めた。主に、健康診断の際に保健室にいた女子達から。

そのあまりの勢いに、流石に当たり障りの無い付き合いが得意な美夏でも気圧されてしまう。

一体、何が起こっているのかと、突然の事だったために思考が混乱してしまう美夏。

しかし、尚も彼女達の格差撤廃運動は怒涛の勢いを見せる。

『桐嶋さん！ どうやったたら、そこまでのプロポーションになれるのか、私達に情報を開示して！！ でないと、あまりにも……』

『泣かないで！ 泣いたら、私達は一生、この格差に屈しなければならぬのよ！！ 今は最後まで立ち続けて、勝利を？ぎ取るの！』

何をどうすれば勝利を？ぎ取れる事になるのか？

今の彼女達に、そんな事は些細な疑問の様で。

既に美夏の席の周りには、無数の血の涙 に見えるだけ

を流した女子達が集まっていた。

「ちょ、ちよつと。皆、落ち着いて……」

もはや苦笑いどころか、本当に困った表情をしながら彼女達を宥めようとする美夏だった。

「落ち着いてなんかいられる訳が無い！！ 大体、いくら高校生だからといって、まだ中学から卒業したばかりだっていうのに、どうしてそんなに立派に育ってしまったんだ！？ この学園での最初の友人から御願いだ！ どうやったたら、そんなになれるんだい！？」

自身の席の後ろから、もはや言葉遣いがグチャグチャになり始めて来た、学園での最初の友人からの涙混じりの悲鳴が耳に届いた。

それに連られるかの様に、他方向からも、また同じような言葉が飛んてくる。

一体、この状況は、どうすれば収まるのか……今の美夏には、全くといって良いほどに手立てが無かった。

しかし、そこで美夏がふと、何かを悟り始めた……。

なぜ、体の発育が良いだけで、ここまで言われなくてはならないのか

なぜ、皆にもそれぞれ魅力的な部分があるのに、そこばかりに拘

るのか

大体、この体を自由にしているのは、敬愛する兄だけなのに

そうだ、兄だけなのだ……なのになぜ、皆が皆、自分が負けたみたいと言っているのか？

私はもともと、兄以外の異性には興味も無いし、勝負をする気もないのに……。

そう、はなっから勝負をする気も無いのだ……。

なのに、なぜ？

あまりに不条理な立場に立たされてしまった美夏は、これらの思考が一気に脳裏を過ぎった瞬間。

バンツ！！ 「落ち着いてって言ってるじゃない！！！！」

自身の机を両掌で思いつき叩き、怒気の混じった口調で、騒ぐ皆を一瞬で黙らせた。

ちなみに、この間中ずっと男子達は、関わり合いになりたくないと無視を決め込んでいた者と。もしかしたら、すっかり美夏のスリサイズが聞けるかもしれないと、聞く耳を立てていた者の二種類に分けられていた。

また、聞く耳を立てていた者に至っては、美夏が机を思いつき叩いた瞬間、ビクンと体を跳ねさせていた。

そんな外野の状況など知らない美夏は、先程悟った事を踏まえながらの反論を静かに開始する。

「皆が言いたい事は分かるには分かるけど、それは私にはどうしようもない事なの……聞かれても私は、これまで真剣に打ち込んだ新体操以外、人と違った事をした事が無いから何も言えないし知らない」

シンと静まり返った教室内で、美夏の真剣な言葉が続けられる……内容は、この際どっかに置いておく事にする。

「それに、どうして皆、そんなに自分を下に見ているの？ 私から見れば、皆だって其々魅力的な部分があるし、十分に可愛いと思うよ？」

この美夏の真心からの言葉に、クラス中の男子達がウンウンと頷く……。

実際、確かにこの一年A組の女子レベルは高い。

それは美夏を筆頭に、藍や他の女子生徒達を見ても、誰しもが認める事であろう。

おそらく、あと一瞬間もすれば一学年中に広まり、様子を見に来る男子生徒たちも現れる筈だ。

そして何より、美夏の全く嫌味でない真摯な声音が、クラス中の生徒達に、それを認識させるだけの説得力を生んでいた。

美夏の表情に、少しの変化が現れた……。

これまで少しかだけ怒っていた表情から、どこかいつも通りの柔らかい表情に変わっていたのだ。

多分、皆がようやく自分の話を聞いてくれて、安心して始めたのであろう。

だが、ここからが本題なのだ。

これを言ってしまうえば、まだ入学二日目であつたが、そろそろ鬱陶しくなってきた男子達の浮ついた誘いを遠ざける事が出来るかもしれない。

そして、彼女達の負け犬根性も、元に戻せるかもしれない。

そう考えた美夏は、表情を柔らかいものから真剣なものへと変え、口をゆっくりと開いた。

「大体、立場とか格差とか、屈しなきゃならないとか……皆、ちょっと勘違いしてるよ」

この意味深な言葉に、教室中の皆が頭に“？”を浮かべ始める。

だが、美夏は止めようとはしない。

これは、色々と面倒が起きる前に、皆に向けてハッキリとさせておかねばならない事だからだ。

ハッキリさせておけば、自身の知らないところで変な嫉妬だとかを買わずに済むし。なにより、美夏自身、ここでハッキリと宣言しておきたいのだ。

故に、彼女は微妙に本音を言ってしまったては拙いところはオブラートに包んで、その言葉を口にする。

私、この学園にちゃんと好きな人いるから。
だから、その人以外見る気は無いもの

瞬間、教室中の男子が言い知れぬ危機感にざわめき立ち。女子達は得意というより大好物な恋話が突然舞い込んできた事に、さっきまでの血走った雰囲気など何処吹く風で、嬉々とした表情をしながら、ある意味爆弾発言をした美夏に先を促そうと言い寄ってきた。

『え！ え！？ ホントに？ 誰なの！？ 同級生？ それとも先輩で！？』

『どんな人？ ねえ、他には絶対に言わないから！』

『芸能人でいえば、誰に似た感じ？ それだけでも良いから教えてよ！ 自分でいったんならさ』

本当に、さっきまでの空気は何だったのか？

もはや、クラス中の恋に恋する“才能ある”乙女達の中に。同じく恋をしている美夏を敵視している者などいなかった。

その様子を目の前で当てられている美夏は、やっぱり女の子は恋愛をしなきゃダメな生き物なのだと、謎の考えに至っていた……が、話を続けなければ、また同じような轍を踏むそうだったので、さっきとは違った意味で迫り来る彼女達に、気持ちの面で向き直った。

「えっと……じゃあ、絶対に他のクラスとかに漏らさないって約束するなら、学年だけは教えるよ」

瞬間、周囲でこちらを囲んでいた女子達が。まるでバリケードの様に固まり始め、美夏の声に耳を傾けた……どうやら、開示される

情報が先輩か同級生だけでも、盛り上がりたければ良いといった感じのようだ。

その様子を確認した美夏は、座った体勢から身を屈めて、なるべく外に声が漏れないよう、ヒソヒソとした声音で口を開いた。

「学年は一つ上……『もう一声』……それで、クラスはABCの内のどれか『もう一声！ でないと、また騒ぐよ？』……じゃあ名前とか以外なら聞くけど？」

一年A組の女子達は、奇跡とも言えるチームワークで。これらの耳打ちにも似た小声でのやり取りを、皆に確りと共有させていた。

『じゃあ、どんな感じっていうか、どんな雰囲気の人かってだけでも教えてよ？』

「そうだね……背は私より少し高いぐらいだけど、かなり強そうな感じの人かな。だけど、それでいて優しくそんな雰囲気がある人」

正直、これだけの情報で何が特定できると言うわけでもない。

だが、彼女達は皆一様に嬉しそうな表情で『頑張つて』だとか『誰か分かったなら、応援するよ』だとか、暖かい声援を、好きな人がいると公言した美夏に送っていた。

この時、美夏は。

このクラスの女子達はもしかしたら、乗りだけで生きているのかもしれないと、本気で思ったとか。

しかし、そんなクラスの女子達が騒いでいる中。美夏の席の後ろに座っていた木下藍は、どこか考えに耽っているような表情をしていた。

（美夏より背が少し高くて、かなり強そうな感じの人って……）

もしかして……と、考えが浮かびそうになるも、藍はそれを胸中で頭を振りながら否定する。

まさか、そんな事はあるわけが無い。

いくらなんでも、常識を一応は弁えている彼女が、そんな事を考えているわけが無い。

“どんなに仲が良さそうでも”、それだけは無い……。

これらの否定は、藍の思考の中だけで繰り返される、決して外には漏れないもの……。

故に、この時の藍は、なんの確証も得ぬまま、巡らせていた思考を一旦止めるのであった。

全学年の健康診断も、何事も無く無事に終わり。

現在は様々な生徒達が部活や委員会活動、または帰宅と……それぞれの放課後を過ごす時間帯となっていた。

所々から聞こえる、学園の時間から開放された生徒達の会話。そのどれもが、どこか嬉しさを帯びたものであり。また部活動に向かう者達からも、嫌々といった声音ではあったが、本質はやつと好きな事に取り組める時間が来たといった様な気持ちが伝わってくるものであった。

そんな中を、部活の仲間達には『呼び出しをくらったから少し遅れる』とだけ伝えていた、ラグビー部所属の桐嶋竜蔵が歩いていく歩き、到着した場所は本校舎の四階……その屋上へと出られる扉の前。

正確には、四階の階層から一つ上がった所にある、薄暗い空間。さっきまで聞こえていた生徒達の活気が、不思議と耳から遠のいていく。

だが竜蔵の表情には変化は見られない……ずっと、ここに来るまでと同じ、少々眉間に皺のよった機嫌が悪そうな仏頂面だ。

なぜかと言われれば、昨日の脅迫とも取れる文章が書かれた、一枚の紙切れが原因であろう。

内容は、来なければ昨日、竜蔵のプライベートで起こった事や、執行部の事をバラすといったもの。

正直、昨日の Pasta 専門店での出来事も誰にも知られたくは無いが、それより執行部の事を外部にバラすといった内容の方が、竜蔵

には少しだけ看過できないものであった。

二橋学園の執行部……まだ昨日までの竜蔵は、名目上“手伝い”といった立場に無理やり就かされていただけに過ぎないが、その存在がどれだけ重要なのか、一応は理解できている。

執行部の重要性。

それは、この学園都市という街には“警察が存在していない”という事に起因している……いや、正確には警察官・自衛官・消防隊員などを学生のうちから目指している者達が通う専門学校があり、それらが実習・研修科目として、街の至る所に設置された交番を使つて、警察に似たような治安維持活動はしているのだが。

学園都市の執行部とは、これらの活動とは違ったものを重点的に担当しているのだ。

それは、この街に来る外部からの脅威への対応……もつとハツキリと言つてしまえば、学園都市の創設者である二橋家に連なる名家に対して、様々な仕事を弄してくる相手に、学園内で対応・解決していく組織である。

この様々な仕事を弄される二橋家や、他の名家とは一体のどのようなものなのか？

それ自体は竜蔵は把握していない……が、何故か竜蔵の所属する日本最大の勢力と門下生を誇る空手団体“真道会館”しんどうかいかんの館長や。日本だけではなく世界からも注目されている格闘技団体『JUDGE』を取り仕切っている人物から、直接に『彼らの言つとおり、執行部の活動に参加しておけ』と指示を出されているのだ。

いくら竜蔵でも、自身が所属する団体のトップから指示を出されるのは断る事は出来ない……それに、これだけの格闘技という限られた枠ではあるが　大きな勢力が、参加しておけと推してくるのだ。ただの金持ちな家柄という訳でもなさそうだと、竜蔵は考えている。

また、竜蔵がこれまで執行部の“手伝い”として割り当てられていた仕事も。仕事を弄してくる相手が、よく陽動として使う街でチ

ームを組んでいるチンピラなどが相手だったのだ。所詮は手先で捨て駒として利用されていた者達、情報を吐かせようにも、出来ない事を竜蔵は既に学んでいる。

これらの事を踏まえて言えば、竜蔵は実は執行部の事を良くは理解していない……が、その“手伝い”として使っている者にすら情報を与えてくれない事から、影に包まれた組織、悪く言えば碌な組織でない事は理解しているつもりだ。

後は、この執行部という胡散臭くて碌でも無さそうな組織では、“暴力”といった行為が“プロの格闘家”でもある竜蔵でも、何の問題も無く許されてしまうという危ない傾向もあると言う事だけだろうか。

故に、限られた知識ではあるが、竜蔵はこのようなきな臭いにも程がある組織の公表を良しとはしない。

もし公表されてしまったら、そこに所属させられた竜蔵自身、色々と立場的に拙いものがあるから、という理由もあるが

そして現在。

竜蔵は、そんな学園でも全くといっていいほど知られていない組織の人間から、直接呼び出しを受けている。

今までは二橋学園の生徒会長である、二橋姫樹からの命令もといお願いで色々やり取りはしていたが、執行部のメンバーと直接顔を会わすのは今回が初めてのことだ。

また、昨日胸ポケットに入られていた紙切れに書かれた、“忍者”という既に廃れてしまった名称が、竜蔵に更なる警戒……ではなく、懐疑心を与えていた。

だが、これから学園でもきな臭い組織の相手と対面するのだ、警戒はし過ぎても問題にはならないだろう。

そう考えた竜蔵は、慎重に……いや、普段通り何も考えずに、目の前の鉄製扉のドアノブを回した。

瞬間、開かれた扉の隙間から、屋上特有の強い風が入り込んでく

る。

無風の状態から、突然全身にちよつとした圧力を感じるほどの風を浴びた竜蔵であったが。少しだけ目を細めるといふ行為以外、特に何もリアクションは取らなかった。

そして、竜蔵がいた薄暗い空間と屋上を仕切っていた鉄製扉が、完全に開かれる。

鉄製扉を開いた竜蔵の視界には、まだ昼が少し過ぎた辺りの日中の日差しが照りつけた、屋上の風景が広がっていた。

特に何の変哲もない、大型の給水タンクと空調装置であるコンプレッサー以外、何も置いていない、寂しくもどこか落ち着けそうな場所。それが、二橋学園の屋上だ。

周囲の囲いは背の高いフェンスで仕切られている……そして、そこに一人の女子生徒の姿があった。

女子生徒は、屋上へと出てきた竜蔵の正面に位置するフェンスの前で、こちらを向きながら静かに立っている。

屋上風に吹かれ、揺られる彼女の黒髪であったが。当の彼女自身が、それを気にした様子は見せず、ただ風に吹かれるままに長い三つ編みの黒髪を揺らしている。

特徴的な大きな丸眼鏡や、少し控えめな背丈に華奢な体つき……そこだけ見れば、ただの目立ちそうにない“普通っぽい”女子高生で済ませられるのだが。

どうやら、竜蔵の目には違った少々印象に映っている様であった。（良い立ち方だな……重心が確りと足の裏が安定した中心になっている）

もはや職業病に近い観察眼。

竜蔵は彼女の立ち姿を見た瞬間に、そんなところから見始めた……。すると、向こうもそんな竜蔵に気付いていた様で。

「こんにちわ。こうやって二人で話すのは、初めてですね」

風に揺られていた黒髪を押さえながら、眼鏡越しにこちらに視線を向けてくる三つ編み少女。

彼女は確か、以前入学式後に校門前で、生徒会長の姫樹の後ろに控えていた生徒会メンバーの一人だ。

名前は、木佐貫千代女といったか……竜蔵は彼女の容姿や声を確認すると、記憶の中から彼女について知っているだけの情報を引っ張り出していた。

「アンタが？」

記憶を引っ張り出した竜蔵の短い問い。

だが、どうやらこれだけで通じた様で。

「はい、昨日はお楽しみだったみたいです」

本来なら皮肉混じりの微笑みで、竜蔵をからかえる様な台詞なのだが。彼女の顔に、表情という表情はなく、全くの興味を感じさせない無表情であった。

「人のプライベートを覗いておいて、なんの悪びれも無しか……」

「ええ、私は良く趣味が悪いと言われるので」

「自分で言うかね、普通」

他愛の無い会話を続けながら、竜蔵は屋上の地面を歩き、彼女の前まで来た。

間合いにして、約4歩分の距離。

あと一歩進めば、まあギリギリ仕掛けられる程度の距離だが、竜蔵はそれ以上の歩を進めなかった。

それに、始めて彼女が感心したような表情をする。

「流石です、やはり気付きましたか」

抑揚の無い賞賛に、竜蔵は鬱陶しそうにしながら。

「よしてくれ。こんなので褒められても、何の自慢にもならないから」

「いえ、相手が隠している手を感じて察知し、それを警戒しながら、なるべく安全な間合いで進む脚を止めておく……普通の人間では、こうはいきませんから」

「そうか？ こういう事は、結構その辺のチンピラでもたまに出来る事だぞ？」

「路上^{リアル}な実戦で得た感、ということですか。これは、私達武術に精通する人間とは違ったものですね。素直に興味深いです」

感心……しているのだろうか？

だが、彼女。

木佐貫千代女は、竜蔵と対面しながらも、制服であるブレザーの懷から、一本の“クナイ”を取り出すと。そのまま自身と竜蔵が立っている、ちょうど中間辺りに、それを放り投げた。

簡単に得物である 物珍し過ぎて、別の意味で驚いたが

“クナイ”を捨てた彼女を見て。

竜蔵はその行動から、おそらく自分は試されたのであろうと当たりを付けていた。

自身よりも遥かに弱そうな相手に、それをされたという苛立ちを覚えながら。

「すみません。やはりお気に触りましたか」

あまり気にしては無さそうな物言い……だが竜蔵は、苛立ちこそ覚えてはいたものの、これを無視する。

「俺も待たせてる身だから、単刀直入に聞くけど。何の用だ？ いや、そういうば先輩だったな。何の用ですか？」

「今更、私の事を先輩と見なくても良いのですよ？」

「分かった、なら早く教えるよ。こっちも忙しいんだ」

先の冷静な危機探知や状況判断能力を、自然と披露していた者とは思えない、どこか落ち着きの無い言動。

だが、相手方の木佐貫も、竜蔵がそういった男である事は理解しているようで。

「そうですね、こういった事は、やはり早めに済ませた方が良いでしょうし」

「……」

もはや聞きの体勢に入ってしまった竜蔵に、少しだけ微笑みなが

ら、木佐貫は本題に入った。

「アナタの言うとおり、単刀直入に申します……まあ、もともとはアナタの正式な執行部入部に、歓迎を込めた挨拶をするという事が用事でもあったのですが」

「……」

「今のアナタの感覚や立ち居振る舞いを見て、事情が変わりました」
相手の言葉を聴いてはいるが、どこか不機嫌な表情の竜蔵に対して、木佐貫千代女は一拍の間を置いた後に……。

私と子作りをしませんか？

「ブーッ!？」

そんな、うら若き、花も恥らう女子高生が直接口にするとは俄かに信じ難い爆弾発言を、目の前の竜蔵にしたのだ……。

同時に、この場にはいない竜蔵の妹が、一瞬だけ言い知れぬ悪寒を感じていたのは、言うまでも無い。

経験の差

私と子作りをしませんか？

「ブーッ!？」

あまりに率直、あまりに突拍子も無くストレートな表現で発せられた言葉に。

屋上風が微妙に鬱陶しい、この場で竜蔵は思わず吹き出してしまった……。

結構、先程まで彼なりに真面目に凄む、というより威圧しながら急かしていただけに、これは少し情けない反応になってしまった。が、いきなり何の脈絡も無く、こんな事を言われてしまえば、誰だって吹き出すというもの。

「な、何言い出すんだよ！ お前!！」

狼狽する自身を隠す事も無く、とんでもない爆弾発言をした相手

木佐貫千代女きさぬき ちよめに声を張り上げる竜蔵。

しかし、当の本人は全く気にした様子も見せずに。

「だから、私と子作りを……」

「分かってるよ！ 俺が聞きたいのは、どうしてさっきまでの流れで、そこに行き着くのかだ!？」

頭のネジが、一本どころか全て吹き飛んでいるのではないかと口にしそうになるも、それは流石に自重した。

「流れも何も、あれを含めたのが、今回の私の目的です」

「えー……」

しれっと言う木佐貫、もはや反応するのも馬鹿らしくなった竜蔵だが、彼女はそんな竜蔵など放っておいて、話を進めてしまう。

「執行部への正式入部など、もともと会長が計画していた事です。私にとってはあまり関係の無いものなのです」

初耳だが、なんとなくそれは理解していた……。

もともと、竜蔵が執行部の手伝いをやらされていた理由は、彼自身が起こした問題による罰だったのだが。最初に『お咎め無しの代わり』として強制させられた時から、薄々こうなるのではないかと感じていたのだ。

故に、ここには驚きはしなかったが。

「私に関係……というより私の家、木佐貫家に大きく関わる事が。今しがた私がアナタに尋ねた、“子作り”という訳なのですが……ついて来れていますか？」

「いや、全然……てか、ついて行く気も無い」

「そうですか」

もう何かなんやら分からなくなったと、考える事、話を聴く事すらも放棄し始めた竜蔵に。

木佐貫は、どこか寂しそうな声音で相槌を打つ。

だが、どうやら彼女には引けない理由があるようだ。

「でしたら、アナタはそのままいてください」

「？」

言いながら、木佐貫は竜蔵の傍まで歩み寄っていく。

目の前で足を止めた木佐貫は、竜蔵の身長よりも10?以上小さくて華奢な体型だった。

しかし、優美な曲線を描く背筋や、竜蔵が第一印象で感じた、軸の確りした立ち方が、彼女の存在感を外見以上に高めている。

心なしか、彼女の方から竜蔵の鼻孔に甘い香りが、風に乗って流れてきていた。

どうやら、丸眼鏡に三つ編みといった地味な外見の割りに、女性らしい所には氣遣っているようであった。

すると、目の前でこちらに視線を合わせていた木佐貫が、おもむろに膝を折り、身を屈める……。

それも、“竜蔵の社会の窓を開けながら”

「おい」

「こう見えても、私は“床上手”で有名なのです。必ずやアナタを

満足させた上で、目的を果たさせてもらいますので、暫くの間、大人しく……」

何やら開けた社会の窓に、木佐貫が手をつ突つ込もうとしたところで、竜蔵が彼女の頭を上から掴んで引き離す。

あ……と残念そうにポツリと漏らしながら、頭を竜蔵に掴まれた木佐貫。

それを、無表情のまま見下ろす竜蔵。

「どうかしましたか？　もしや、こういった事には興味が無いと？」

「興味が有る無いの前に、ありえないだろ？　なあ？　いきなり屋上で人の社会の窓開くとか」

「いえ、私独自の調べでは。こういった誰もいない屋上で、男女が二人になった場合は。大抵が“合体”するという記録が……」

「どこでどう調べれば、そんな所に行きつくんだ？　ド田舎のヤンキーでも無しに、普通はそうはいかないぞ？　てか、なんだ？　お前にとつて、屋上つてのはラブホテルと一緒にみたいなものなのか？」

「おやおや、社会の窓は開けても、どうやら心の窓は……」

「上手くもねえし、勝手に開いたのはそっちだろ」

怒鳴りたい気持ちを抑えながら、先程から謎の行動しかしてこない木佐貫の頭を、竜蔵は放した。

すると、膝を曲げ屈んでいた状態から、ペタンと後ろに尻餅を付いてしまう木佐貫。

同時に、何かのチャンスだと感じたのか？

わざとらしく脚を崩し、上から見下ろしてくる竜蔵に履いているスカートの中身を見せ付ける。

しかし、竜蔵はそれを冷めた目で見下ろす。

「これも効果が無いと……ふむ。ここまで私の“セックスアピール”が通じないとなると。もしやアナタは……」

「そこまであざといパンチラじゃあ、誰だつて冷めた目で見るわ。大体、さつきからなんなんだ？　お前、本当に大丈夫か？」

側頭部を右の人差し指でトントンと叩くジェスチャーで、相手の

正気を疑う竜蔵。

しかし、木佐貫にはどこも堪えたところが無く。

「同性愛者という可能性を否定したとなると……もしや！ 私自身に、桐嶋さんを欲情させる魅力が足りない！？」

世紀の大発見でもしたかのように、一人で盛り上がり始める彼女に、竜蔵は逆に冷静な表情で、うんざりとする。

一体、目の前の執行部を名乗る女は、何がしたいのか？

まさか、本当にナニがしたいだけなのか？

なら、据え膳食わぬは男の恥として、今から頂いても良いかもしれない。

だが生憎と、竜蔵はそういった軽率な行動を取る人間ではないのだ。

「なあ？ いい加減、ふざけるのは止めてくれないか？ こっちだって、部活の連中に遅れるって断ってまで来てるんだぞ？ 本題に早く入ってくれ、頼むから」

心の底から早くしてくれと……まるで懇願するかのように、頭をボリボリと掻きながら言うが。

どうやら、この懇願は相手にとっては別に意味を成さなかった様で。

「いえ、ですから、私の目的は執行部としての挨拶や歓迎などではなく。アナタとの子作りですと、先程に言っただけですが？」

「それが意味分からねえって言っただけだろ！？ ちゃんと伝わってるのか俺の話は？」

しれっと当然の如く言う彼女に、竜蔵は遂に怒鳴り声を上げてしまふ。

普通の女性ならば、竜蔵の様な風貌の男に怒鳴られれば、身動きの一つでもする筈なのだが……そういった可愛らしい動きは一切見られない。

むしろ、冷静な眼差しで、こちらを見上げているだけだ。

その様子に、竜蔵はまともに取り合うのも馬鹿馬鹿しく思ったの

か。

制服の胸ポケットから、昨日渡された一枚の紙を取り出す。

「はあ……とりあえず、ここに書かれた通り、俺はちゃんと屋上に来たんだ。約束は守ってくれるんだな？」

取り出した紙を広げながら、地面に座っている相手に書かれている文章を見せる竜蔵。

「ええ、それはもちろん。というより、もとから執行部の情報を表沙汰にするつもりはありません。してしまったのなら、私が二橋家の方々に消されてしまいますからね……おっと、今は他の人に漏らさないでくださいね？」

わざとらしい……いや、絶対にわざとだと分かる彼女の仕草に、竜蔵は再びゲンナリとする。

知っていてもしょうがない事だが、知ってしまったては拙い感じの情報……。

二橋家ということは、あの生徒会長、二橋姫樹の実家の事であるう。

だが、ここでその様なことを追求しても、仕方の無い事は理解している。

そう考えた竜蔵は、相手に見せていた紙を、その辺に捨てると。もう用はないと言外に語りながら、彼女に背を向けた。

「だったら、俺は部活に戻るぞ？ アンタの目的とやらは、何を当たってくれ。俺はパスだよ」

相手に背を向けながら、右手をフラフラと上げて揺らす。

そしてそのまま、竜蔵は屋上から出るために、歩を進め始めた……が。

そう急がないで下さい、まだアナタにはいてもらわないと困ります 「ッ！？」

突然、自身が振り返ったことで、後ろにいた筈の木佐貫千代女がいつ移動したのか？　いつ、こちらに振り返っていたのか？　それすらも、分からないぐらいの動きで、竜蔵の目の前に立ち塞がっていた。

彼女の佇まいに、一切の乱れは感じられない。

という事は、今の現象は彼女にとって、ごく当たり前の事だったのか？

様々な推測が頭の中で駆け巡るが、それよりも早く、竜蔵は彼女との間合いを本能としか表せられない反応速度で取っていた。

距離にして、さつきよりは近い3歩半。

その気になれば、中段蹴り（ミドルキック）を、ステップ込みで蹴り込める距離だ。

だが、まだ竜蔵は相手に危害を加えようと、そのために構えを取ろうともしていない。

ただの自然体で、また木佐貫と向きあっていた。

「良い反応ですが、とりあえず、まだ私の話し……もとい、こちらの用件は終わってはいません」

「……」

先程と変わらぬ、冷静な声音に竜蔵は沈黙で帰す。

どうやら自然体ではあるが、完全に警戒し始めてしまったようであつた。

お前は自然界に住む動物か、というツツコミが、木佐貫と喉下まで這い上がってきていたが、彼女はそんなキャラではないため、あえなく消沈していた。

「まあ、用件とは言っても、先程の様な性交渉をするつもりはありませんので……（いずれは、必ず“して”もらいますが）」

最後のほうは聞き取れなかったが、どうやらもう、子作りだとかふざけた事は抜かさないらしい。

それを信じた竜蔵であつたが、まだ警戒心を解こうとはしない。まず、プロでもある自身の前に、全く持つて確認できないほどの

入りで現れたのだ。

警戒をするなという方が無理な話した。

だが、そんな竜蔵などは他所に、木佐貫は徐に屋上の出入り口の方へと視線を向けた。

「そろそろ出てきたらどうですか！ さっきから恥ずかしがって出て来れないのは丸分かりですよ！」

どこかやる気を感じられない、間延びした呼びかけをする木佐貫。おそらく、この出入り口である鉄扉の向こう側にも聞こえるように、彼女なりに声を張っているのだろうが……いかんせん、やはりどこか覇気に欠けるところがある。

しかし、どうやら鉄扉の向こうには声が届いていたようで。

ギイ……。

屋上風を押しのかけて、屋上の出入り口である鉄扉が開かれる。

しかし、開かれた部分は僅かな隙間だけ。

まだ、扉を開けた人物は確認できない。

「そんなに心配しなくても、別に“行為に及んでいる訳ではないです”」。彼との交渉も決裂してしまったので、早く出てきてください」

まるで相手を諭すように、扉の向こう側へと声を掛け続ける木佐貫。

すると、彼女の説得が功を奏したのか、重い鉄扉がゆっくりと開かれた。

「お前は……」

重い鉄扉を開いて出てきた人物に、竜蔵は思わず声を漏らしてしまっ……。

「これから桐嶋さんには、彼女と闘って頂きます。いわゆる、実技試験の様な感じですね。私達、執行部からの腕試しという訳です」

竜蔵と扉から出てきた人物の視線の邪魔にならないように、横に

身を引きながら、木佐貫が説明をする。

竜蔵の視線の先……そこには、開いたドアノブを放したばかりの、木刀を持った一人の女子生徒が立っていた。

昼過ぎの日差しを煌びやかに反射する、黒曜石を思わせる長く真っ直ぐな黒髪に。研ぎ澄まされた刃物の印象を持つ、切れ長な目……細く整った輪郭や、透き通るような白い肌。

また、体型も華奢に見えるが、なかなか凹凸の有る、スレンダーかつ女性的な膨らみも確りと持った、モデルの様な体型なのだが、それよりも、竜蔵には彼女の出で立ち、とりわけ木佐貫と同じように安定した背筋や重心に目を奪われていた。

正直、かなりの美人……竜蔵は彼女を見た瞬間、胸中でそう呟かざる負えなかった。

しかし、竜蔵は彼女の事を別に知らなかったわけではない。

「さなじま 冴島刀子か……まさか、二年で一番有名な女子が、執行部に関わってたなんてな。意外通り越して、ビックリだわ」

竜蔵に名を呼ばれた女子生徒、冴島刀子は。

そんな意外そうな声音で、こちらを見ている竜蔵に、同じく視線を向けながら。

屋上のコンクリートの地面を、一步一步、静かに、されど優雅に歩んでいく。

その間も、一切の軸のブレを感じさせない……明らかに、意識をした歩き方をしていると、竜蔵は当たりを付けていた。

「まあ彼女は私と同じく、二橋家に仕える分家の一つで、冴島家の長女ですから。当たり前と言えば当たり前なんですけどね。知らないかったのなら仕方ないですが」

冴島と木佐貫を挟んで向き合う中。竜蔵はずっと、彼女の目に視線を向け続けていた。

（こう見ると、抜き身の刀みてえな女だな……）

冴島刀子という女性に対して、竜蔵が浮かべた第一印象がこれだ。事実、彼女が醸し出す、独特な張り詰めた雰囲気は、どこか日本

刀の様な魅惑的な印象がある。

そう考えると、竜蔵が思い浮かべた第一印象は、間違いではないのかもしれない。

だが、竜蔵が彼女の目を見続けていると。突然、彼女が顔を赤らめながら、恥ずかしそうに視線を外し始めた。

「うん？　どうかしたのですか？」

それに、不思議そうに反応する木佐貫。

竜蔵もまた、（なんだ？）と疑問に思っていたのだが……。

「いえ、その……. なんと言いますか」

言いながら、ゆつくりと原因であるものに指を示す冴島。

二人は、その今にも爆発してしまいそうな程に恥ずかしがっている彼女が指し示した場所に、目を向ける。

そこは、竜蔵の下半身……. とりわけ、先程から開きっぱなしであった社会の窓であった。

「あ、すみません。閉めるのを忘れていました」

開けっ放しの社会の窓を確認した木佐貫は、まるで何事も無かったかのように竜蔵のズボンのファスナーを上げる。

まるで少しだけ閉め忘れていた窓を、自分が一番最初に気付いたから閉めますといった動きであった。

「おい」

「はい、なんででしょうか？」

冴島に指摘された部分を直し、再び横に身を引こうとしていた彼女に。竜蔵があまり抑揚の無い低い声音で、彼女を呼び止めた。

心なしに、眉間にかなりの皺が寄っている。

「さっきから、なんで俺の股間を、そうやって平気で触れるわけ？」

「おや？　おかしいですね……. 男性の方は、よっぽどの容姿をしていない限り、異性に股間を弄られて嫌な思いはしないと認識していたのですが」

「……」

おかしいのはアンタだと、思いつきりツツコミを入れたところ

であつたが。不思議と、竜蔵は彼女に冷めた視線しか送れなかった……相当、彼女の奇行に参っているのであらう。

すると、これまで黙っていた冴島が、ようやく真つ赤だった顔を治して口を開いた。

「そ、それで千代女さん。用件の方は、本当にもう良いのですね？」
木佐貫の用件……端的に言えば、竜蔵との子作りを、この場で始めようとした、あの奇行。

どうやら冴島は、事前にその事を知らされていなかったのか。消え入りそうな声で、しれっとした表情の木佐貫に尋ねた。

「ええ、どうやら桐嶋さんは、私では不服の様子でしたので“今日のところ”は引き下がる事にします」

「貴様！ 千代女さんの、どこが不服だと言うのだ！」
「えー」

木佐貫の答えを聞いた瞬間、冴島の表情が一気に強張り、竜蔵に木刀の切っ先を向け始めた。

もしかしたら、ただの悪乗りなのではないかと疑うほどの変わり身の早さに、竜蔵は今回何度目か分からない、うんざりとした表情と声を漏らす。

「落ち着いてください、刀子さん。私は別に気にしていませんから」
まあまあと、相手を宥めようとする木佐貫。

その表情は、どこか楽しげに見えた……絶対に、冴島刀子という人物の反応を予測しての発言だったと、この木佐貫の対応を通して、竜蔵は当たりを付けていた。

だがまあ、そろそろ話を付けなくては、竜蔵も部活に行けなくなってくる可能性が有る。

故に竜蔵は、この流れる空気を無視して、話をさっさと進める事にした。

「あゝ……何でも良いけど、冴島さん？ 俺と“やりたい”の？
だったら、早くしてくれ。俺にも部活があるんだ」

やりたいのかと聞いてはいるが、既に構え……というより、冴島

に向けている視線に、明確な圧力が籠フレッシャーっている竜蔵。

それに気付いたのか、冴島の方も、持っていた木刀を、両手で持ち、右足を前にした正眼の構えを取った。

二人の雰囲気の変化を感じ取った木佐貫が。彼らが形成し始めた間合いから、静かに外れていく。

さっきまでの空気が嘘の様に、屋上に吹く風だけが、この場の音を支配していた。

切っ先を竜蔵の喉下に向けた、正眼の構えを取っている冴島に対して。

竜蔵は、今にもポケットに手でも突っ込んでしまいかねない、自然体で相對している……ただし、体に通った軸や、相手の眉間を射抜くような視線が、ただの自然体でない事を物語っている。

すると、冴島が、この硬直状態を和らげるかのように、正眼の切っ先を、ゆらりと地面に斜めで向け始めた。

下段……いや、そこから更に木刀が流れるように移動し。前足だった右が下がり、今度は左足を前に置いた、木刀を立てるように横で構えた、“八相”を取り始める。

真っ直ぐに伸ばされた背筋に、スカートのお陰で露出している、スラリとした長い脚が、異性である竜蔵の目を奪わせる……が、それと同時に、沈み過ぎず、浮き過ぎずの重心と、油断の無い研ぎ澄まされた緊張感が、彼女をただの女だと思わせない警戒心を抱かせていた。

間合いは半歩分開いたが、辺りの空気を張り詰めさせる緊迫感、更に上がった様な気がする。

だが、それでも構えという構えを取ろうとしない竜蔵に、ようやく冴島が口を開いた。

「どうした？ 早くやろうと言ったのは、君の方からだろう」

静かに、凜とした姿勢で“八相”の構えを取る冴島から発せられた、挑発とも取れる言葉に竜蔵は。

「……ふん」

一度、軽く鼻で溜息を付いた後……。

「？」

突然、保っていた緊張感を、自ら解き、軸や重心も意識していた自然体すらも、同時に解いてしまった。

これに、訝しげな視線を向ける冴島……。

そして更に、竜蔵の不可解な行動が続く。

（おや？）

「……何の真似かな？」

なんと、竜蔵が冴島と形成していた間合いから、何の躊躇も無く出て。後ろのフェンスのところまで、勝手に歩いて行ってしまった。フェンスの前に来ると、竜蔵は上着のブレザーを脱ぎながら、再び冴島の方に振り返った。

竜蔵の視線の先で冴島は、先程まで取っていた構えを、一度解いていた。

その様子を見て、ようやく竜蔵が口を開く。

「ほら、こっちまで来いよ。ここなら、俺はバックステップも取らないし、馬鹿みたいに逃げ出す事も無いぞ？」

屋上のグリーンのフェンスを背にしながら、竜蔵は冴島に向けて、挑発とも取れる言葉を投げかける。

瞬間、冴島の眉間が歪むが、すぐにその怒気は抑え込められた。

「……ふん、なら、君の希望通りにしてあげよう」

一拍の間を置いた後、冴島は竜蔵の言葉通りに歩を進め始めた。油断無く、いつでも反応出来るように脱力された、武術的な歩行は、まさに歩く刃物と行っても過言ではなかったが……この場に、その程度の事で驚く者など一人も存在しなかった。

出来て当たり前……警戒して当たり前。

この三人だけの光景を見てみると、おのずとそのような考えを感じ取れる。

それ程に、実戦というやり直しが効かない舞台を、この場にいる者達は理解しているのであろう。

そして再び、冴島が左足と左肩を前に出した真半身の構え“八相”を、竜蔵との間合い三步半付近で取り始めた。

今度は、竜蔵の言葉どおり。彼の後ろには、屋上からの落下を防ぐための、背の高いグリーンのフェンスが威を構えていて。冴島の木刀からの逃げ道を限定させていた。

外見は、完全に竜蔵の不利……だが、それでも竜蔵は構えという構えを取ろうとはしない。

何か特別な事をしていると言えば、左手に持っている脱ぎたてのブレザーを、いまだに持っている事だけだろうか。

冴島が、ジリ……と、ミリ単位で間合いを詰め始めた。

しかし、それでも自然体で立っている竜蔵に動きは見られない。ただただ、こちらに迫ってくる相手と、視線を合わせ続けているだけだ。

また、ジリ……と、冴島が屋上の地面を摺り足で削る。

彼女が竜蔵との間合いを詰める度に、その時が来る感覚が、どんどんと強まっていく。

あと、確実に相手に打ち込める距離まで、半歩ぐらいか。

次第に、冴島の左頬を、一筋の汗が流れ始める。

間合いを詰めている、圧力を積極的にかけているのは、彼女の筈だ。

だが、対する竜蔵には、何の変化も見られない。むしろ、涼しい顔で、相手が来るのを待っている様に見える。

一体、目の前の男は何を考えているのか……？

次第に、冴島の頭を、この思考が支配し始めてきた。

予想するに、おそらく左手に持っている、脱いだブレザーを、こちらの注意を引き付ける為に投げてるのである。

そして、自身がそれに気を取られ、動きを止めている間に仕掛けてくる。

随分と古典的な手を……そう胸中で冷笑混じりに呟いた冴島は、再び間合いをギリギリと詰め始める。

確かに、木刀だろうが一刀で仕留めてみせる……。

それが、我が剣術なのだから。

絶対の自信を胸に持ちながら、遂に冴島の詰めが止まった。

気付けば、竜蔵との間合いは既に二歩半。

やろうと思えば、素手の竜蔵でも仕掛けられる距離だ。

そんな攻撃が飛び交っていても不思議ではない間合いで、二人は再び静止する……。

既に、緊張感なるものは限界にまで高まっていた。

冴島が持つ木刀に、彼女の意思が通い始める。

今、竜蔵の目には、彼女が木刀を“体の一部”として認識したのが、感覚として捉えられた。

道具に使われるのではなく、使うのでもなく。

道具という概念すらも否定し、それを自身の腕の延長線上と認識する考え方。

似ていると、竜蔵は素直に思った……が、その瞬間であった。

「ふッ！」

突然、冴島が、これまでの沈黙や緊張感すらも切り裂く様に、竜蔵へと間合いを一気に詰め始めた。

奥足を蹴り出し、前足でその全身の勢いを受け止めた動作……。

次に来るのは……そこで、遂に竜蔵も動いた。

竜蔵は間合いを一気に詰めた冴島に、持っていたブレザーを投げつける。

冴島の視界が、竜蔵の肩幅のために特注されたブレザーに占領される……が、それもほんの一瞬の事で。

（やはり！）

予めブレザーを視界塞ぎのために使ってくるであろうと予測していた冴島は、意識を空中で広がっているブレザーに向けるのではなく。

ブレザーに便乗して突っ込んでくるであろう竜蔵の側面を取ろうと、そのままの構えで体を右にずらした。

既に木刀も、“八相”の構えの状態で、腰だめに寝かせてある。後は、脱力された全身の力を使って、軸をぶらさずに木刀を逆袈裟斬りで振り抜くだけだ。

しかし、冴島の予想は完全に裏切られた。

「なッ!？」

投げられたブレザーが通り過ぎ、竜蔵への視線を再び向けると。

そこには、こちらがブレザーから見て、左に動くであろうことを予測していた竜蔵が。“元の位置”から動いていないまま立っている姿があつた……それも、これから前蹴りを蹴り出す為に、左足の腿を上げている状態で

この事実で急に反応した冴島が、腰だめに寝かせていた木刀を、右から斜め上へ振り抜こうと、腰よりも腹を意識した回転で動かそうとする……が。

「シッ!」

「ッ!？」

短い息の吐き出しと共に蹴り出された、竜蔵の左前蹴りが。冴島が両手で持っていた木刀の柄頭に直撃する。

背中を反り、腹と股関節を前に出した、体重の乗った前蹴りの爪先が襲った事により。冴島が握っていた、振り抜く寸前だった木刀が、思わずすっぽ抜けてしまう……。

また、既に木刀を振り抜こうと冴島は動いていたために。突然前に蹴り出された、竜蔵の左足の靴底に、木刀がすっぽ抜けてしまっていたために、何も持っていない両手を激突させてしまう。

しかし、この次の行動は、冴島の方が早かった。

（得物が無いのならッ!）

木刀を飛ばされた事など、一切気にしないかのように再び地面を

蹴り出し。前蹴りを蹴った左足を引いている最中の、竜蔵の懐へと彼女は突貫した。

しかし、後手に回ったとしても、この土俵は、完全に竜蔵のものであった。

相手の飛び出しを確認すると同時に、竜蔵は左足を一瞬の動作で、体勢が前屈みになるくらいに“必要以上に引いた”。

「ッ!？」

突然、牙島の視界から竜蔵が下へと消えた。

だが、気付いたときにはもう遅い

ドンッ!!

「ふぐッ!？」

竜蔵が飛び出してくる彼女を迎え撃つために、前に出していた右肩が。

ピンポイントで相手の腹部を捉えた……。

刹那に牙島の口から、一気に空気が吐き出される。

それを見越していたかのように、牙島の腹部に右肩をめり込ませた竜蔵が、地面を脚で“掻き始める”。

タツクル

それも、出てきた相手を迎撃するための、総合やラグビーでは当たり前の技術。

竜蔵の太く鍛え上げられた両腕と、丸みを帯びるくらいに頑強な右肩に抱え上げられた牙島の体は。彼女の腹部を基点として、“くの字”に折れ曲がっていた。

既に、もとの飛び出した地点から、カチ上げられるようなタツクルで完全に後ろへと押し込まれている。

脚も、地面には着いていない……これでは、抵抗も何も出来ない。出来るとすれば、竜蔵の背中のワイシャツを、必死に掴み続ける事だけか……。

この後の展開は、なんとなく一瞬のうちに理解できた。おそらく、このまま自分は、地面に背中や後頭部を叩き付けられ

るであろう。

視界が、信じられないぐらいのスピードで流れる。

（落とされるッー!!）

直後に訪れる、未体験の衝撃に覚悟を決めた冴島であったが……。ピタッと、その落下の勢いは止まってしまった。

「……え？」

あまりに突然訪れた、助かったという気持ちに、彼女の思考は一瞬停止する。

竜蔵の背中のワイシャツを掴みながら、抱きかかえられた状態で何が起こったのか、理解出来ないといった表情をしている冴島。

しかし、そんな彼女を無視するかのよう。竜蔵が抱きかかえていた彼女を、ゆっくりと地面に下ろした。

浮いていた足元が、屋上のコンクリートに確りと下ろされる。

同時に、冴島は竜蔵の背中から手を放した。

彼女の腰に回していた腕を、何の躊躇いもなく開放する竜蔵は。そのまま状況が飲み込めていない彼女と、再び視線を合わせた。だが、その視線はさっきまでの圧力を感じさせるものではない。むしろ心配そうに、すまなかったと言外に語っているような目であった。

「すまない、やり過ぎた」

言外だけではなく、口にも出して、タックルから開放した相手を見る彼の目には、なんの嫌味も感じられない。

しかし、まだ状況を飲み込めていない冴島は、その言葉に反応できないでいた。

すると、彼女の後ろから、今回の闘いの立会人代わりであった、

木佐貫が口を開いた。

「刀子さん、どうやらアナタの負けみたいです」

木佐貫の率直な……容赦の無い宣言に、ようやく意識を思考の世

界から戻したのか。

震えるような声音で、冴島が声を発し始めた。

「私が……負けた？」

「ええ、それは綺麗な負けっぷりでしたよ？ 怪我らしい怪我也特に無いという、本当に見事な負け方でした」

冷静に勝敗を決める木佐貫に、冴島がもともと鋭かった切れ長の目を強張らせながら振り返る。

「そんな！ 私は認めません！！ だって、私はまだ立っていますし、意識も確りとしているですよ！？ これは真剣勝負じゃ……」

「真剣勝負なら、アナタは既に、この世にはいないのではないですか？」

「ッ！？」

彼女の言葉を遮るように、木佐貫が抑揚の無い声音で話を続ける……。

「真剣勝負だと、もともと彼が認識していたのなら。アナタは今のタックルで、このコンクリートの地面に叩きつけられ、意識を失っていたのでは？」

屋上の地面を、足裏で叩きながら、木佐貫は厳しい視線を冴島に眼鏡越しで向ける。

「意識を一瞬でも失った……そんな事が、真剣勝負の世界で起こったのなら、アナタは何回死んでいると思うのですか？ それにもし、叩きつけられたとしても、アナタが舌を噛み、意識を保っていたとしましょう。その先、何が起こるのか？ 彼が、どんな行動に出るのか……想像するのも馬鹿らしいと感じないのですか？」

説教……というより、負けを認めない彼女を咎める様な、木佐貫の言動。

そして冴島は、その頭に血が上った自身でも理解できてしまうほどの、もっともな言葉に。ただただ無言で悔しそくに、拳を握り締めるしかなかった。

ギリギリと、彼女の奥歯を噛み締める音や、拳を握り締める音が、

竜蔵にも聞こえてくる気がした。

故に竜蔵が、そこまで言う事じゃないのではと、口を挟もうとすると。

「桐嶋さん、アナタは黙っていてください。これは、私と未熟な彼女の問題です」

「いや、俺はまだ喋って無い『黙っていてください』ぞ?」

有無を言わさぬ木佐貫の声音。

それに思わず、当事者であった筈の竜蔵が口ごもってしまう……。黙った竜蔵を確認すると、木佐貫は更に冴島に強い視線を送った。「大体、もしこの場がアナタと彼の二人だけの空間だったら。タツクルで地面に組み伏せられたアナタは、彼に何をされるのか分かっているのですか?」

「……?」

突然、例え話をし始めた木佐貫に、冴島が恐る恐るといった感じで首を傾げる。

どうでも良いが、背の高い彼女が悔しそうにしながら、背の低い先輩に咎められている光景が。どうにも竜蔵の視点からしたら、緊張感の欠けるものであった。

「周りには誰もいない、助けを呼ぼうにも、アナタの武術家としての“無駄なプライド”が、それを許さない……。なら、考えられる結末は一つだけです」

刀子さんの肢体に興奮した彼が、アナタを欲望のままに犯しつくすでしょう

「ちょおおおつと待とうかあ!! なあ!？」

もはやツツコミどころしかない……。いや、ツツコミざる負えない状況に、竜蔵が後ろから木佐貫の肩をガシリと掴んだ。

ちなみに、冴島は突然の彼女の発言に、顔を真っ赤にさせ、竜蔵の事を変質者でも見る目で睨みつけていた。

「なんですか？　まだ、私と彼女の話しは……」

「話しもなにも、かなり可笑しい方向に飛んでたな！　ええッ！？」
肩を掴んだ彼女を振り向かせずに、背中に向けて凄む竜蔵。

だが、どんなに竜蔵が掴んでいる肩に圧力をかけたとしても、彼女の表情には変化が見られない。

これは、握力を思いっきり入れるべきかとも考えたが、相手が一応は女性ということで、竜蔵はそれを自重した。

「俺はどんな状況だろうが、さっきと同じ行動で事を穏便に済ませるつもりだったんだぞ？　それがどうして、ソイツに危害を加えるとかいう話になるんだ？　確かに、思った以上に強そうだったから、ちよつとやり過ぎちゃったけどさ？　流石に、そんな事は絶対にしないと思うぞ？」

強い口調で、完全にさつき木佐貫が言った事を否定する竜蔵。

しかし、当の木佐貫は、これまで通りのしれつとした態度で。

「なら、あの刀子さんの見事な体を、ジックリ見てみてください」「は？」

あまりに堂々とした感じだったので、竜蔵は木佐貫の言葉どおり、目の前で顔を真っ赤にさせている冴島の体に視線を向けてしまった……。

スラリと優美な曲線を描いた美脚に、キュツと締まった、柳腰と称しても過言ではない、くびれのある腰つき。そして、それに逆らうかのように、存在を強調させている、制服越しからでも分かるほどの、張りの有る形のいい胸……極め付けに、彼女の白い肌と柔らかそうな唇が、異性である竜蔵の劣情をそそらせていた。

思わずマジマジと見てしまう、彼女の完璧な肢体に、竜蔵は意識すらも釘付けにされてしまう。

対峙している最中は、全く気にもしなかったが。こうして見ると、やはり校内でも才色兼備と有名になるのも頷けるし、タツクルした際に密着した、意外に柔らかかった感触が甦ってくる。

すると、その竜蔵の視線に気付いたのか。

冴島は、まるで身を守るかのように、両手で胸を隠しながら、竜蔵と木佐貫からバババツと距離を取った。

「な、何を破廉恥な目で、私を見ているのだ!？」

「……はッ!？」

実は結構鈍感な部類に入る彼女にすら、いやらしい目で見ていると看破されてしまった竜蔵は。

何かからの支配から覚醒したかのような表情で、意識を取り戻した。その光景を、客観的な立場から見ていた木佐貫は。意地悪な微笑みを浮かべながら、後ろにいる竜蔵に、首だけ回して振り向いた。
「でしょ?」

たった一言の、簡単な言葉。

だが今の竜蔵には、たったそれだけで彼女が何を言いたいのかを理解できてしまっていた。

「……いや、まあ確かに、魅力的な体だと認めるが。俺は絶対に、そんな事はしない」

「おやおや、さっきよりも、声に自信が感じられませんか」

「そ、そんな事はないぞ!? 俺は、絶対にソイツを襲いなんかしない!」

「本当に言い切れるのですか? 地面に力ずくで組み伏せた彼女のブレザーやワイシャツを、力任せに破き。下着を剥ぎ、スカートも剥ぎ。そして本能のままに、彼女の体を貪るため、唇も奪う……更に」

「ち、千代女さん!？」

迫真の語り口調に、思わず竜蔵ではなく、本人である冴島が。

これまた例外なく、耳まで真っ赤にさせた状態で、割って入ってきた。

「おや? どうしたのですか刀子さん? 私はまだ、彼から事の真意を……」

「聞かなくて良いです!! 本当に、やめてください! お願いします!!」

もはや涙目になりながら千代女に、これ以上の暴走は止めてくれと懇願し始めた冴島。

当たり前だ……目の前で、自分が暴行を受けているという設定の話しを、大真面目で異性にされているのだから。

普通の感性を持った女性ならば、冴島のように止めてくれと懇願せざる負えない。

そんな彼女の反応に、なぜか千代女は残念そうにしながら。

「……そうですか、幼少の頃より知っている刀子さんが、そこまで言うのです。まだアナタにも、言う事は色々ありますが、今回のところは、これで済ますとしましょう」

助かったのか？ それとも、良いように遊ばれてしまったのか？ 判断の付かない冴島であつたが、とりあえずはホッと一息を付くのであつた。

木佐貫千代女という、ちょっと独特な感性を持った女性に振り回された二人は。

現在、さつきとは違った落ち着いた表情で、確りとお互いに向き合いながら対峙していた。

ちなみに、この二人を振り回したという当の本人は。場をかき回すのを、ようやく自重したのか。

二人の様子を、静かに傍で見守っていた。

「その……さつきの闘いでは、取り乱してすまなかつた。あれは、確かに私の負けだ。認めるよ、君の実力を」

気まずげに、対峙している竜蔵に腕試しの結果を告げる冴島刀子……。

普段、学園内では凜々しい雰囲気と、異性すら魅了する容姿で有名な彼女にとって。

この視線すら、まともに合わせられない仕草は、とてもレアなも

のであった……が。

対面している竜蔵には、特には関係ないらしく。

「いや、俺自身、手加減が出来ない部分があったし。もう少し、ハッキリとした勝負の付け方もあった筈だから、そんなに気にしないで良いと思うぞ?」

かなり真面目に闘った相手に対して、失礼な物言いであるが。

当の本人が、それを本気で言っているために、不思議と嫌味には感じられなかった。

しかし、感じられなかったとしても。負けた本人にとっては、とても屈辱的な事には代わりが無い。

故に、一瞬冴島の目が険しくなるも、それを彼女は自ら頭を横に振る事によって、感情を治めた。

「……それだけ、私と君の間には差が有るという事なのであろう。今は、その言葉を胸に刻んでおくよ。後々、確りと返すために」

自ら感情を治めた冴島の表情には、どこか晴れやかなものが感じられた。

おそらく、気持ちを次に確りと切り替えられたのであろう。

それを見て、竜蔵は短く「そうか」とだけ返した。

二人のやり取りが、ひと段落した所で、木佐貫が口を開いた。

「確かに、刀子さんと桐嶋さんの実力には差があります……ですが、それは多少です」

「?」

「さっきの勝負では、桐嶋さんの奇策に、刀子さんが引つかかった形で勝敗が決しました。これは、完全に“経験の差”と言えるでしょう。それも、稽古や真剣同士などという事ではなく。どんな事でも、勝った者が正しいとされる、路上での経験です」

「路上での経験……ですか?」

「はい」

木佐貫の至って真面目なアドバイスに、冴島は教え子の様に視線を彼女に向けていた。

すると、冴島と竜蔵にも視線を向けられていた彼女は、突然、何かを提案するかのように、右手の人差し指を立て始めた。

「ですので、ここで私からの指令です」

木佐貫千代女という、二橋学園では数少ない執行部の中で、一番上の学年に籍を置いていた彼女からの指令……つまり、執行部からの直接的な命令という事。

それを理解していた冴島は、彼女に向けて居住まいを正す。

それをまだ理解していない竜蔵は、ただ突っ立ったまま、彼女と冴島のやり取りをボクッと眺めていた。

「明日から開始する、桐嶋さんの執行部正式メンバーとしての初仕事に。刀子さん、アナタも同行してあげてください」

「同行というと、バディという事ですか？」

聞き返す冴島に、明日から初仕事がある事を初めて知って、目を見開いている竜蔵。

そんな二人の様子を、軽く一瞥した後、木佐貫が言葉を続けた。

「ええ、今までの刀子さんの仕事は、路上^{リアル}……いえ、ストリートな内容のものではなく、どちらかというと隠密に近いものでした。ですので、これまではラフな闘いではなく、精密さを問われる、必中必殺の闘いを経験して来ていたという事です」

「つまり、私は彼と同行して、そのラフな闘いを学んでくれば良いのですか？」

「その通りです。また、もちろん彼の初仕事のサポートにも回ってもらいますので、明日は頑張ってくださいね」

「はい、了解しました」

勝手に進められる会話、勝手に進められる初仕事とかいう厄介事……。

竜蔵は、それらに異を唱えようと、ようやく会話に割って入ろうとしたのだが。

「ちょ……っ」

「あ、それと桐嶋さんに拒否権は存在しませんから、あしからず」

「ちょッ!? いや、それは酷すぎるだろ!」

とても理不尽な遮りに、思わず竜蔵が声を張り上げる。

しかし、当の木佐貫は、さも当然かの様に。

「アナタが去年に起こした問題や、昨日の“妹さん”とのプライベートなニャンニャン……それら諸々を、世間に公表されたいのですか?」

「ぐッ!」

「妹さんとのニャンニャン……? 私には聞きなれない言葉だが…

…それは一体、どういう意味なのだ?」

木佐貫に脅迫というより、弱みを突きつけられた竜蔵は、思わず口ごもってしまう。

冴島は、本気で意味が分かっていないのか、竜蔵に対して、知らない事が恥ずかしそうに尋ねてくる。

そんな光景に一瞬、悪戯心を擦られた木佐貫であったが。

そろそろ時間的にも、色々と押し始めていたので、それは自重する事にした。

「まあ、そんな事を私がしなくとも。桐嶋さんは、どちらにしても明日から取り掛かる初仕事には絶対に参加しなくてはならない理由があるのですけどね?」

「絶対に参加しなくちゃならない理由? なんだ、それは?」

気になる言葉を発した彼女に、竜蔵は訝しげな視線を向ける……。

しかし、次に彼女から発せられる情報に、竜蔵の表情は驚きと、怒気に染まる事になる。

それは、竜蔵にとって絶対に守らなくてはならない者に関係する、一番許せない事。

「アナタの妹さん、桐嶋美夏さんが」

何者かに狙われている様です

経験の差（後書き）

次回から、本格的に本章の話が進みます。

なるべく、テンポ良くという目標を掲げていきますので。

描写不足があるかもしれませんが、そういった場合は、なるべく
ご指摘下さい。

直せる範囲で、直して行きたいと考えています。

ではノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9403w/>

仁義なき妹【改訂版】

2011年10月10日03時23分発行